

---

# 東方双漂譚

USR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方双漂譚

### 【Nコード】

N3312S

### 【作者名】

USR

### 【あらすじ】

本小説は、『上海アリス幻楽団』様による弾幕STG『東方Project』シリーズの二次創作・幻想入り物であります。

以上テンプレ。

とある少年の幻想入りにまつわる物語。

自ら命を投げ出した少年がたどり着いたのはあの世ではなく、  
妖怪がごく普通に闊歩する場所、幻想郷。

常識が通用しない世界で、彼が送る生活とは

続きはWEBで、もとい本編で。

其之零・ とある少年の行動記録（前書き）

とある少年の幻想入りにまつわる物語。

ケレン味の固まり。糞駄文。厨二臭漂ふ。

それでも温かい目でみてやって頂ければそれ以上のことはなし。

喜びます。

主に作者が。

誰得？

主に作者得。

其之零・とある少年の行動記録

走っていた。

ただ走っていた。

後ろからは自分を追う男たちの靴音と怒号。

大通りから離れた狭い路地裏に逃げ込んだら撒ける。という考えは完全に裏目に出た。

あっという間に息が上がる。

こんな時に限って動きにくい服装で。

背中には最早重石でしかなかった竹刀袋を背負い。

誰だようちの学校に寒稽古なんて行事を作ったのは？

創立者か？

それにしだって学校への行き来までこの格好でなければならぬ理

由は無いだらう。

一月の下旬。午前4時30分。寅の刻(?)

そんな時間にもかかわらず、とめどなく流れる汗は、木綿製の胴着を湿らせている。

道中に追ってくる男たちの障害になりそうなものはなく、動きにくい服装に狭い環境と、笑えてくるぐらいに分が悪い。

手近な角を折れたところで、汗で湿り気を帯びた袴が足にまとわりつき、見事にすっ転ぶ。

放置されていた空き缶やら何やらを巻き込みながら、漫画のような効果音を響かせつつ派手に路面を転がる。アスファルトに皮膚が削り取られる痛みが走り、思わず呻き声が口から漏れ出す。

「おお、居た居たア。探したぜエ、坊主」

十メートルほど後方からの声。

地を蹴って立ち上がり、路地を進もうとするが、ほんの数メートル先には金網のフェンスが屹立し、ものの見事に逃げ道を塞いでい

た。  
とんだ三枚目もあったものである。

う。  
下手なB級映画だってここまで露骨な絶体絶命表現はしないだろ

る。  
その向こうは土手になっており、その下は深い暗闇に覆われてい

理。  
不条理。それもどこかの哲学者がのたまったような意味での不条

「相続制度ツてなア便利な代物だよなア！ 債務者が死んでもその子供に引き継がせればコッチとしちゃ言うことねエんだし」

派手な柄のシャツをまとった男が、状況を楽しんだ口調で言う。  
そりゃあんたは楽しいだろうよ。

こんな時、法律は無力だ。

僕をつけねらう。  
いかに相続放棄という選択肢をとったとしても、彼らは容赦なく

それは善悪うんぬんの問題ではなく、只単に利害得失の視点から生み出された彼らのロジックである。

「探したぜ？ 三週間の間どこにいたのか、ジョーホーが無くてよオ。」

ツテにあたってみたらお国の世話になってるって言うじゃねエか。」

男はそう言いつつこちらに距離を詰めてくる。後ろには同じような風体の男たちが数人。

当然、僕も男との距離を保つべく後ずさる。

機嫌よく、男はしゃべり続けた。

「やべえと思ってたら、自分からヒョッコリ出てきてくれてエ。本当に、神様仏様って奴は判つてらっしやるなア。俺アこの際拝んでみるのも悪くないと思うんだがねエ」

更にこちらに歩みを進める男たち。

「一人で一方的に縁を切ったつもりなよオだが、そんな虫の良いハナシは無エよなア？ こちらら慈善事業でやってるわけじゃねエのよ」



はたして、距離をとろうと後ろに引いた足は、金網のフェンスに無情にも阻まれる。

人間、追い詰められると自分から袋小路に入ってしまったとはよく聞くものだが、まさか自分の身に起こるなど思ってもみなかった。

端はたから見れば至極滑稽に思われること請け合いであるが、僕は自分の退路を塞ぐフェンスに手を掛ける。

「オイオイ坊主、あまり見苦しいマネすんじゃネエよ」 半ば呆れた様子で、フェンスをよじ登る僕に声を掛ける男。

僕の体を突き動かしているのは、何か。

恐怖？

違う。

逃走心？

これも違う。

すでに目的意識といえるものを失っている以上、その行為に理由付けはできないだろう。

ただの、行為。

儀式と言っても良いかもしれない。

彼らなどにはなく、自分自身で己の行く末を決めるための、儀式。

高さ二メートル半ほどのフェンスが、驚くほど高く感じられる。先ほど転んだ際に打ちつけたらしい左腕が、運動を拒むかのよう  
に痛みを発する。

「今なら温情料金にしておいてやるからさア、そっちにも悪い条件じゃねエはずだろ？」

嗜虐性溢れんばかりの男の声を背に受けながら、金網をよじ登る。

上端まであと、一メートル。

「なア、悪足掻きは止めてとつとと楽になれ」

痺れを切らした男がこちらに歩み寄る。

金網につま先を引っかけている右足を掴もつと男が手を伸ばしたのを肩越しに確認すると、すかさず右足を金網から外す。

男の手が空を切る。舌打ちしながら引き上げた右足を追う男、その手を件の右足で蹴りつけた。

「ッ、このクソガキ！」

見事に金網と僕の右足にサンドイッチされた手を引き抜きながら激昂する男。

その隙に残りの五十センチをよじ登り、上体をフェンスの上に出す。

「逃げんな！」

男もフェンスに足をかけ、追いつがろうと今度は左手を伸ばしてくる。

その手をかいくぐり、一気にフェンスの上へと足を引き上げる。

フェンスの向こうは急な土手。ほとんど垂直に下った先に、アスファルトの舗装路。高さはなかなか。

後ろでは男たちが明らかな動揺の色を浮かべている。

迷いは、ない。

「待  
」

フェンスをよじ登っていた男の手が足首を捕まえる直前。

冷たい空気の中へと身を踊らせた。

ふわり、と、重力が上方方向のベクトルを食いつぶすまでのつかの間、他愛もない思考をめぐらす。

ああ、これでお前のところに行くのか、と。

話をしたことはおろか、顔を見たこともない半身に脳裏で語りかけ。

先の男の手など比べものにならない強大な力が僕の体を地に向けて引きずり墜とす。

ひゅうひゅうと耳元で鳴る風切り音が、だんだん強く、甲高く変わってゆく。

見納めの俯瞰風景。

ゆっくりと目を閉じる。

これで、終わり。

こうして僕は逃走に成功した。

このロクデナシの現実から。

このクソツタレの生から。

其之零・とある少年の行動記録（後書き）

なんだか一昔前に見たことあるようなくだり。（苦笑）

本格的な幻想入りは後ほど。

原作設定？

なにそれ美味し（ry

連載と言ったものの、不定期投稿の可能性激高。

続かない？

続きたい。

其之き・ 他愛ない邂逅の件（前書き）

さて、投稿。

ページ数が無駄に増加致しました。

分量が躁鬱病とでもタグをつけられるだろうか（苦笑）

暖かく見守って頂ければ幸い。

其之き・ 他愛ない邂逅の件

肅<sup>しゅく</sup>、という静けさだけが、在った。

自分は死んだのか、と、今更ながらそんな思考が頭をよぎる。

「当然、あんな所から落ちればそうなるな」  
というのは理性の声。

肌に触れる空気が嫌に冷たい。

死んだのだとすれば、ここは俗に言う死後の世界なのか？

感覚からして仰臥した体勢であることだけはわかる。

いつだったか、幽体離脱の体験談で“夢を見てるみたい”な感触  
だとは聞いたことがあったが……。

はて、そういえば僕の理性よ、死んでもなくなったりはしないん  
だな？

よくよく考えてみれば、触覚も聴覚も嗅覚も生きているし。

背中には硬い地の感触に、ところどころ尖ったものが混ざり込ん  
だような圧迫感を感じるし、鼻腔に入るつんとする匂い　これは  
土か？　もある。

「……れ、…んげん…」

聴覚を確かめようとしたその瞬間、ほんの僅かな音が僕の鼓膜をくすぐる。

「……そう…し、な…こんな…に？」

鈴を転がすような、微かな音。音源はだんだん近づいてくる。

「ね…るのかな？ おこさ…きゃ…」

「だいじ…ぶかな？ 怒るかも…」

離れたところで幽かすかに聞こえていた声は、ほとんど目の前で聞こえるまでに近づいてきた。

音源が近づいてくるにつれ、会話の内容もはつきりと耳に届くようになる。

これは……人の声？

それも、舌足らずな少女のものだ。

そう思い至った時には、僕はゆっくりと瞼まぶたを開け始めていた。

結論から言えば、僕が聞いた声の主は人間ではなかった。

天国にいたと言われていた天使天人の系列でも、地獄に棲まう鬼悪魔の類でも、はたまた冥土に佇む幽霊や亡霊でもない。



もつとも、これらの知識はあくまでも生前のものだからアテにはならないが。

少女、それも極端に小さい、幼女と言って差し支えない外見。

身長は30センチほど。背中からは昆虫のそれに似た半透明な薄羽がのびている。そんなのが2人 人じゃないけど 地に臥す僕の顔を至近距離から覗き込んでいた。

「……妖精？」

そう、童話の絵本やらアニメにある妖精そのままの姿である。

「うん、妖精」

わお、言葉が通じた。

なんだか人の境界を超えた気分である。

まあ、既に死んでるんだから越える境界なんてあったもんじゃないが。

「で、起きたならどいてくれない？」

「……？」

僕がぼんやりとした思考のまま首を傾げると、目の前の手に袋を持ったもう片方の妖精（便宜的に妖精B）が言う。

「そこ、私たちの家なんだけど」

どうやら僕は大木の根に寄り添うような格好で横になっていたらしい。

僕が体を起こすと、その木の根元の地面にぽっかりと穴が穿た

れていた。

妖精ってこんな所に棲んでるのか……と、妙な感心を覚えながら、思い出したように頬をつねる。かなり力を込めて。

結論：イタかった。……もとい、痛かった。

死んでるのに痛覚はそのままなのか？

少なくとも夢という可能性はこれで消えた。

痛む頬をさすりながら、辺りを見回す。

鬱蒼とした、という表現がぴたりくる森だった。両親の実家も田舎の方だったが、ここまで深い森は見たことがない。

自分を中心にくるりと周囲を見渡すと、先程横になっていた位置から5メートルと離れていないところに、細長い合成繊維製の袋が転がっていた。

竹刀袋である。

それを見つけて始めて、自分の服装が剣道で着る胴着と袴であることに気付く。

そりゃ寒いわ。と納得しつつ、下草で覆われた地面に転がったままの竹刀袋を拾い上げる。

竹刀本体に、鍔やゴム製の鍔止めまで、入れたときから変わらずそのままである。

そこまで確認すると、先程の大木に背をもたせかけ、長い息を吐く。

死後の世界に妖精？

分かんちヨイスだな。

と、自分でもよく分からない思考と共に視線を宛もなく上に向けると、着ている胴着と同じ、紺色のウィンドブレーカーが木の枝に引っかかっていた。

上着として着ていたものである。

高さは5メートルほど。槍投げの要領で竹刀袋を投げつけ、ナイロンの塊を引きずり墜とす。

さすがに肌寒かったので有り難い。

胴着の上に着込むと、幾分か寒さも和らいだ。

空の境界？

何のことかな？

あれは着物だし。得物ナイフだし。

冗談はさておき。

「しっかしまあ、死んでなおこの格好とは思わなかったなあ」

「何言ってるの、あんだとっから見ても生きた人間でしょ」

ギクリ、と声の方向を見やると、先程の妖精Bがなにやら怪訝そ

うな面持ちでこちらを見やっている。先程持っていた袋は“家”に置いたらしく、手には何も無い。

「……生きてるって、んなバカな」

「いや、妖怪の妖力の感じもないし、亡霊って感じでもない。やっぱりあんた生きた人間だって」

はた、と気付いて胴着の胸元から手を入れて胸元を弄る。まわぐ

心臓が、脈動していた。

「ご丁寧にも、精神の緊張に合わせたわずかなハイペースで。

「……あり得んだろ……あの高さから落ちて？」

慌てて手足を確認するが、痛みもなければ出血している様子もない。

五体満足。無事息災。さすがに意気軒昂とまではいかないが。

「さすがにそれくらいは妖精でも判」

「あーっ、それあたしが見つけたやつ！」

言葉を続けようとした妖精Bを押しつけて妖精A（最初に声を掛けてきた方）登場。

その指は僕ではなく先程ウィンドブレーカーを叩き落とすのに使った竹刀袋に向けられている。

「せつかく見つけて運んできたのに！」

「いや、これはもともと僕のだし。別に食い物は入ってないぞ」

「えー、じゃあ私の努力は何？」

「瞬で興味を無くす妖精A。食べ物目当てか。」

「まあまあ、食べ物なら鞆の中にあっただから別に良いじゃない  
い」

「べ、別に食べ物だけが目的じゃないわよ」

「嘘つけえ、いっつも食べられないと判ると態度が変わるくせに」

「あんただって人のこと言えないでしょ」

「はいはいそこまで、喧嘩しても別に構わないが、一寸ちひよこ聞きたい  
ことがある」

目の前で言い争い始めた妖精たちの頭を両手のひらで押さえつけ  
て黙らせる。

横暴？

聞こえない聞こえない。

「まずは君たちに質問だ。極楽でも地獄でもない、かと言って僕  
がいたところとは随分違った趣きのするここはどこ？」

溜まりに溜まった疑問を吐き出したせいで無駄にややこしい問い  
かけになってしまったが、妖精二人はすぐに答えを返してくれた。

「どこって、魔法の森としか……」

「あなた外来人？ だったら幻想郷、と答えればいいのかな」

「魔法の森？ 幻想郷？」

おおよそ聞いたことのない地名である。まあ、魔法の森くらいならRPGの地名にでもありそうではあるが。

「だーかーらー、ここはケツカイで外の世界と分けられた幻想郷。さらにいうとその中の魔法の森」

頭を空中で押さえられたままじたばたと暴れる妖精A。

わざわざ手を押しつけて逃げようとせずの下から出れば良いものを。

それにしてもケツカイで、決壊？血塊？

ああ、結界ね。脳内変換が追いついた。

「外来人っていうのは、外の世界から幻想郷に入ってきた人のことね」

言いながら、僕の手を下からぐり抜けて脱出する妖精B。頭はこっちの方が優秀らしい。

「つまり、ここはあつちとは違う世界というわけか」

まあ、妖精がいる時点で2010年代の日本でないことは確実にあるが。

パラレルワールドみたいなもんか？

「パラレルって何よ？」

「なんでもない、ただの妄言だ」

そういえば驚愕、読みたかったな……。なかなか出なかったから作者失踪疑惑まで流れてたけど。

話を聞く限り、妖精たちの話には情報のソースとしての密度はなさそうなので、固有名詞に対する問いかけは後回しにする。

「まあいいや、とりあえず、次の質問だ。時に妖精さん、この袋を“持ってきた”、訳だよな」

「そうだけど？」

「どこから？」

「確か……こっちのほうだったかな？」

ムキになって手のひらを押し上げようと羽ばたいていた妖精Aを解放し、案内を頼む。

妖精たちの“家”から100メートルほど離れたところで、妖精たちは止まった。

「人間の里から帰ってきて、水を飲みはこの沢に寄ったらここに落ちた」

何の変哲もない小さな沢である。大きな岩が少なく、流れがそれほど早くないあたり、規模的にはそれ程でもないらしい。

軽く助走をつけて沢を飛び越えると、着地点のすぐそばに使い古された革靴が転がっていた。若葉をモチーフにした菱形の校章。僕の学校の制靴である。

男達に追われている途中で放り捨ててしまったはずのものが何故？ という疑問があったが、今は非常時。とりあえず中身を確認する。

「お、良かった。カロリーメイトとお茶は無事か」

「カロリーメイト？ なにそれ？」

「それお茶だったの？」

それぞれの反応を返す妖精たち。

まあ、妖精が栄養調整食品を知っていたら逆に恐ろしい。

お茶くらいはあるのだろうけど。

ペットボトルはさておいて。

その外にも雑多なものが鞆には入っていたが、それらを確認する  
うえで一つやらなければならぬことがある。

「さてと、お二方に三つ目の質問だ。単刀直入に聞こう」

「まだあるの？」

不満そうな表情を浮かべる妖精たちに向き合いながら口を開く。

「いくつか無くなっているものがあるんだけど知らないかい？」

しばしの沈黙。

「あはは、ちょっと用事を思い出し

「逃がさーん」

素早く飛び去ろうとする妖精×2。

それを両手で片方ずつ捕まえる。

というか、彼らの“家”の位置は分かっている訳だから、逃げられたところで変わらないのであるが。



「離しなさいよこの、ええと、なんだろ？」

「とりあえず、人間で良いんじゃない？」

「じゃあ……離しなさいよこの人間！」

「はいどうも、人間です」

観客不在のコントやってる場合ではない。  
しかも大して楽しくない。

「さて、大人しく持って行ったものを返して貰おうか」

「やなこつた！」

両手を振る。

数秒間振って、止める。

「こつ、この妖精虐待人間！」

「それはちつとばかり心に響くな」

「大体落つちてたもの拾って自分のものにして何が悪いの!？」

「お前さんたちは元の持ち主の気持ちを考えてみるべきだね」

「そんなもん私達を知るわけ無いじゃん!」

よろしい、ならば戦争だ。

「なら素直に言うことを聞くのと糸でぐるぐる巻きにされて沢に  
放り込まれるのとどっちがいい？」

鬼畜？

ろくでなし？

仕方ないだろう非常時なんだから。

結局、妖精たちは折れ、僕は残りの荷物を取り返した。

もつとも、元々が空に近かった鞆のためにそれほど重要なものは入っておらず、あらかたのものは妖精たちに渡してしまった。

「結局よこすのなら初めからそうしろよ」

などと文句を言っていた妖精Aには、いつどこでもらったか判らない試供品の飴玉を口に突っ込んでやると大人しくなった。

食い気優先な奴らである。

「本当に貰っていいのかな？」

「どうせもう使わないからな。要らなかつたら返してくれても構わんが。」

「いや、貰うけど。いつも悪戯を仕掛けてる人間から物を貰うのは初めてだから不思議な感じ」

「ほどほどにしとけよ。世の中僕みたいに節度のある人間ばかりじゃないからな。ストレス発散目的で捕まったら目も当てられん」

「節度のある人間は妖精ひつのことをやたらめったに振り回したりしないでしょ」

「そこ、飴玉返せ」

「ざーんねーん。もう食べちゃった」

妖精たちとそんな話をしながら、さらに軽くなった鞆を整理して立ち上がる。

森の中なのでよく分からないが、既に日は高く登っているらしい。

「さてと、お二方に最後の質問だ」

「まだあるの？」

露骨に不満そうな顔をする妖精A。残念ながらエサの飴玉はもう無い。

「そうがなるな。これで最後だって。ここから人里まで降りるルートを教えてほしい」

「時間がかからない方がいい？」

「まあ、日が暮れるまでに着きたいからな」

「それなら、さっきの沢に沿って下っていくのが一番早いかな。

森を抜けて道に出れば、その先は人間の里だよ」

「ふむ。簡潔かつ的確な指示ありがとさん。それじゃあ、僕はこの辺で。縁があつたらまたいつか」

「もう会いたくもないけどな」

「そうか、残念だ。人里に着いたらお礼に何か買ってきてやろうとも思ったが」

「前言撤回。是非ともいらして下さい」

なんだか知らないが、妖精の餌付けに成功した僕だった。

じゃあね、という声を背に受け、手をひらひら振って答えながら歩き出す。

じめじめした森の中を歩きながら、これからのことについて思いを巡らせる。

何の因果か知らないが、この場所にたどり着いたのにはそれなりの理由があるはずだ。

ひとまずは人里に降りて情報を集めるのが最優先だ。魔法の森だの、幻想郷だの、外来人だの、妖精たちから得たワードは多いが情報は少ない。

RPGで言うところの長老様みたいな奴がいれば楽なんだがなあ、と、益体もないことを考えて、ふと気付く。

「妖精なんてモノに会っても全っ然驚かなかったな」

むしろノリで気楽に接していたような気もする。

目覚める前　あちらの世界　でのことの反動で驚きというものが麻痺してしまったのか？

もともと、どうにでもなれという心持ちで跳んだために、恐怖が起こらないのかもしれない。

「なんて言うか、生きちまったなあ、僕」

思い出したように、頬をつねってみる。　小さくも鋭い痛み。

生きている証拠……だろうか？

仮想現実ともなれば話は別だが。まさかねえ。

鞆からペットボトルのお茶を取り出し、一口含む。  
森の気温にあてられて、すっかり微妙なぬるさになってしまった  
茶葉の香りをゆっくりと飲み下しながら、沢に向かって歩みを進め  
た。

「ねえねえ」

「なに？」

「さっき教えた道のこと」

「別に間違っちゃいないでしょ」

「それはそうだけど……」

「じゃあ、なに？」

「あの道ってヤマイヌのテリトリーじゃなかった？」

「でも人間の里には一番近いし、そんなに時間はかからないでし  
よ」

「よ」

「まあ、そうだけど」

「あんなどころで寝てられるくらいなんだから大丈夫でしょ」

「そうかなあ？」

「それに、あの人間が持ってたシナイとかいうやつ」

「竹でできてたあれのこと？」

「そうそれ。あれを持ってることとは剣術の心得があるはずで  
しよ」

「しよ」

「そうか、そうだよな。それなら妖獣なんて訳ないか」  
「これでも、ちゃんとそこまで考えてるわよ」  
「流石、今日は随分冴えてるわね」  
「ありがと。それより、これから何する？」  
「そうね、あつ、そういえば神社の巫女が」

一つ、妖精たちが忘れている重要な事実がある。

『あの少年は外来人である』

一つ、少年が知らない重要な事実がある。

『幻想郷の妖精はおおむねバカ』

其之壱・ 他愛ない邂逅の件（後書き）

残念ながら、今回のキャラは名のある妖精ではございません。

イメージ的にはザコ敵の赤妖精と青妖精。

本家のキャラクターが出てくるのはまだ先ですので悪しからず。

其之弑・森の中、臨死の件（前書き）

神霊廟体験版出ましたね〜

こんな1ボスがあつてたまるかWWW  
と、叫びましたがまあ、そこはそれ

製品版の発売を待つばかりで御座います。

何はともあれ

ggggggまっしぐらな三話目をべっぞ



## 其之貳・森の中、臨死の件

とんとんとんと。

自分が進む先の地面を竹刀の先でリズムカルに叩きながら歩く。

沢の両脇は、太陽光を遮る木の陰が薄いこともあり、葉の長い下草が生い茂っていた。

こんな状態では草葉に隠れた良からぬものを踏みつけてしまうことも考えられるので、念のための杖がわりである。

代償が転倒程度に留まれば別に問題ないが、それこそ蜂の巣やら蛇やらを踏みつけた時には文字通りの死活問題である。

これは蛇に限ったことだが、地面を叩いた時の震動により、蛇の方から人間を避けてくれるということもあるらしい。

昔バラエティー番組で見たネタである。

真偽の程は定かではないが、何もしないよりはマシだろう。

隣を流れる沢の水音を聞きながら、僅かな異音をも聞き漏らすまいと、できるだけ耳を澄ませる。

妖精たちと別れてから二時間ほど経ったことを、手首の腕時計が

教えてくれる。

こんな状況でも実直に時を刻むこいつは、今のところ、以降役に立ちそうなモノランキング暫定一位である。

カロリーメイト　ちなみにクッキータイプのチョコ味であるの一片をペットボトルのお茶で流し込み、緩やかに下っている道を進む。

結局この道程がどれだけ続くものか分からないため、お茶もカロリーメイトもできるだけ温存している。

こういう時ばかりは、少し腹に入れるだけで上手く騙されてくれる空腹の虫に礼を言いたい。

昔から基本的に少食なのであるが、こういう時にはやはり便利だ。

お陰で身体つきは貧弱そのものですが。

剣道教室に通わされたり、半ばなし崩し的に、それが体育の授業に組み込まれた学校に入ることになったりしたのもそのせいだ。

剣道、といえば。

「どうでもいいけど、何でまたこういう時に限ってこんなにもけつたいな服装なんだろうか？」

取り留めもない思考、その一。  
先程目覚めてからの懸案である。

フェンスの上から飛び降りると、そこは妖精がいるよくわからない世界でした。などという全くもって訳の分からない展開に直結したわけで、服装なんてたまたま着ていたものがそのまんま繰り越しである。

えり好みしている時間がなかったことからして、服装や持ち物に  
関してどうこう言えるわけは無いが、それでもやっぱり言うてやり  
たい。

誰に？

まあ、神様やら仏様やら、世間でそう言われるものにだろう。

どうしてこうなった!？

……。

言ってみただけですよ。

しかしながら、愚痴を垂れたところでどうにかなるものではない  
とは分かっている、やっぱり服装は重要だ。

本来動きやすさを重視して作られたものであるから、耐寒性は低

いのだ。

ウィンドブレーカーがあるだけまだマシだが、それにも限度というものがある。

季節は相変わらず冬場であるから、歩き続けていないと低体温症にでもなりかねないし、現に手足の先が冷え始めている。

森の中で目を覚ましたというのも、今更ながらだが、ロケーション的にはかなり危なかった。

凍死しかねないぞ全く。

TPO? なにそれ美味しいの? 的な状態である。

むやみやたらに軽い革靴から手袋を取り出し、左手だけはめる。

竹刀を持つ右手のグリップ力を落とすたくないためだ。

どうでもいいが、手よりもむしろ手袋の方が冷え切っていた、というオチがついた。

保温性マイナス補正w。

さて。

服装のこともそれはそれで重要だが、さらに深刻な疑問がある。

要約すれば、「で、ここどこ?」という内容。

「先程から常々先延ばしにしてきたが、いい加減考慮しなければならぬ。」

これからの身の処し方にも関わることである。

詳しいことは後々人に聞くとして、自分が置かれた状況を整理しておくぐらいは必要だろう。

そこまで考えて、再認識。

「やっぱり夢幻ゆめまぼろしの類じゃないんだよなあ……」

頬をつねる、という定番の脱出法を試してみたが、結局得られたのはヒリヒリとした痛みだけ。

つまむところ、もとい、つまるところ、つねり損であった。

他にも自分の手を石川啄木よろしくじつと見つめてみる、というところで聞いたかも分からない眉唾な対処法もとりあえず試したが、別にそのおかげでこの状況に変化が訪れたという気配もない。

むしろかえって今現在のこの状況が現実のものであるという結論を補強する結果になった趣がある。

妖精たちとの一件の後となっては半ば覚悟していたが、ようやく心細さというものが“そこはかたなく”芽生えてきた。

例えば、

タイムスリップして元の世界に戻れなくなった物語の主人公たちはどんな気持ちだったのだろうか。  
と、そんなことを考えるくらいには。

「……悩んでたってどうにもならねーな」  
鬱積した気分を突き崩すように、言葉を吐き出す。

どういう方向に事態が転がるにしろ、なるようにしかならないのである。

こんなところでちっぽけな不安に拘泥していたところでどうにもならない。

端から見れば無理矢理な対処法かも知れないが、とりあえずそう自分に言い聞かせ、改めて両手の竹刀と鞆を握り直し、歩き続ける。

いつの間にか、道には下草が若干踏み倒された形跡があった。完全に地面が覗くほどではないから、人の手によるものでは無さそう。獣道というものだろう。

足元が若干見やすくなったとはいえ、警戒は怠らない。

例によって竹刀で前方の草を捌きながら進んでゆく。その感触も、決して幻ではない。

フェンスの上からダイブして、森で目覚めるまでの間に、どれくらい経ったのだろうか？

常々の睡眠時間がそうであるように六時間ぐらい眠っていたようにも思えるし、十何時間、下手をすれば何日単位のことのような気がする。

左手首の腕時計を見ると、とりあえずはその日の翌日であると表示されているが、時計の時刻設定が正しいものである、という前提があることを忘れてはいけない。

身体が冷え切っていない訳だから、森で眠っていた時間はそう長くはなさそうだが、それにしても随分と頭ははつきりしている。

寝不足の感も、逆に寝過ぎで疲れている様子もない。  
このような状況下でも不思議なくらいにクリアな思考。

まあ、たいてい小説やら何やらの場合“錯乱すなわち死亡フラグ”という図式があるような気もするので、そういう意味では冷静なままでいられるということは良いことなのだろうが。

思考だけではない。

五感そのものもまた大幅に研ぎ澄まされているように思う。

すぐ脇を流れる沢の水音から、下草を掻き分け、それを足で踏み鳴らす時に起こる草の葉が擦れる音、遠くで聞こえる鳥のさえずりまでが鋭く聴覚を刺激する。

一足踏み出すごとに揺れる下草、立ち上つる草いきれ。

袴をくぐって足元に届く冷気に、僅かに足のうらに届く地面の傾斜や段差。それらに意識を伸ばす度に、感覚器官からは想像以上のレスポンスが返ってくる。

不思議を通り越して、最早不気味なくらいである。

人間辞めたつもりはこれっぽっちも無いのだが。

ニュータイプじゃあるまいし。

サイコミュが使えたりはしない。



……我ながら何を考えているのだろう。

と、おかしな方向に向かいかけた思考を修正。

ふと立ち止まり、日の傾き具合を確認しようと顔を上げた、瞬間。

あらかた落葉した広葉樹と、緑が残る針葉樹。

まだらに空を覆う木の葉の向こうから、風切り音を従え、黒い影が一つ飛び出した。

黒と白を基調とした服装に、金髪頭には黒の三角帽。跨がる筈の柄に両手を添え、木々の梢を掠めるようにかつ飛んでゆく。

住人第一号。 いや、それ以前にあの風体は、

「……魔女!?!」

影はこちらに気付くことなく、沢の真上を横切る形で飛び越えていき、対岸の木々の向こうに姿を消した。

先の妖精といい魔女といい、もう何がなんだか判らない。

困惑を抱えつつ、とにかく人里に降りようと再び歩き出そうとした。

ガサリ、という草音。

それに阻まれ、踏みだそうとした右足は僅かに前へ移動しただけで押し止められる。

先程まで、後方に気配はなかった。

別にA級のスナイパーだったり幾多の戦場を渡り歩いてきた歴戦の傭兵だったりしなくても、これだけは確実に言える。

後ろにいるのが人にしろ人外にしろ、好ましい状況ではない。

先の魔女に気を取られて警戒を怠ったか、と、悔やんでも後の祭。

心を決め、素早く後ろを振り返る。

そこには、一匹の獣がいた。

灰色の毛並みに身を包んだ狼が、いた。

グルル、という、獰猛さを内包した唸り声を響かせながら、5メートルほどの距離をおいてこちらを睥睨する。

その目に灯るのは捕食者としての絶対的な本能の光。  
光が照らすのは、……僕しか居ねえ。

日本において、狼は明治期に既に絶滅している。

当然、山道を歩いていても遭遇する可能性は皆無だから、その場合の対処法などは伝わっていないし、分かる筈もない。

だが、背中を見せて逃げれば瞬く間に追いつかれて食われるであろうことは容易に想像がついた。

緩やかに腰を落とし、両足を肩幅に開く。鞆をもつ左手は体の斜め後ろ側に。竹刀を構える右手は正眼に。

狼を正面やや左から睨み返しながら、重心を落とした体勢のまま、ゆっくりと後ずさる。

剣道の練習により身に付けた摺り足。本来の用途とは異なるが、この際そんなことは問題ではない。

できるだけ刺激を与えないように、という心がけである。

左足を後ろに退<sup>さ</sup>げ、その後を追うように次の右足を引きつける。

剣道の試合で強敵とあたった時にも経験したことがあるが、サシで向かい合ってここまでの緊張感を感じたことはない。

そもそも人对狼はおろか、猛犬とすら向き合ったことは無いが。

下手な動きをすれば即座に襲いかかられる。

その予測が外れていないであろうことは一向に視線を逸らさない狼の様子からも十二分に理解できた。

そろりそろりと、針に糸を通す慎重さで狼から距離をとってゆく。距離は、1メートル程稼いだか。

更に左足を後ろに引く。その左足の裏が地面に接したのに合わせ、体重をかけた、刹那。

パキリ、という異音。

それが、枯れた木の枝を踏み砕いた音であると認識した時、僕と

狼の間の張り詰められた緊張の糸が切れたのを感じた。

反応は、素早い。

狼は、しまった、という表情のままであろう僕に向けて、一気呵成に踏み込んでくる。

（　　ツ、喰い殺す気まんまんか！！）

左手の鞆を地面に落とし、素早く両手で竹刀を握り直す。

猛然と駆けてくる狼。その脚にかかる力の流れを“読む”。

試合と同じだ、と、半ば自棄になりながら、狼の体を両目で捉える。

狼が大きく背中を丸めたのを見た瞬間、竹刀で打ち払うという選択肢を捨て、素早く地面に身を伏せた。

僕の上体を狙って飛び出した狼の体は、地面に密着した僕の身体を飛び越えていく。

まだ終わりじゃない、と、自分を叱咤し、伏せの体勢から立ち上

がると、狼へと向き直る。

再び狼が動く。今度は更に速い。

再び上体を狙って飛び込んでくる狼。その速度に合わせ、素早く地面から拾い上げた鞆をフルスイングした。

空気が抜けるような、ぼすっという気のない効果音とともに、狼の体は強制的にその移動方向を修正させられる。

が、空中でぐるりと身を翻した狼は、なおもしっかりとその四本の脚で地面を捉えて着地する。

さらに攻撃を仕掛けてくるか、と身構えたが、予想に反して狼は再びこちらを睨みながら、低い唸り声を上げてこちらを威嚇し始めた。

諦めたか、と若干期待するが、直後にその期待が呆気なく打ち碎かれるのが判った。

理由は狼の唸り声。

低い、低い、唸り声。その発生源は一つしかない筈なのに、スピーカーのハウリングのような不協和音（、、、、）が発せられる。

1音ずつ和音が重ね合わされていくにつれ、段階を追って唸り声そのものが纏う“圧力”が膨れ上がってゆく。

ただの音圧ではない。

一つの喉から複数の異なる音程を発するという異常な発声そのものが、得体の知れないモノに対する原始的な恐怖心を掻き立てる。

ジェット機のエンジンが回転数を上げていくが如く、唸り声が轟然と空気を振るわせる。

ぞわり、と、狼の全身から正体不明の何かが放射された。

壮絶なまでのプレッシャーに、思わず膝を着きそうになる。

胴着の背中が、いつの間にか汗でじっとり張り付いていた。

いくら頭の中身が冷えていようと、湧き上がる体の震えが抑さえられない。

何が『どうにでもなれ』だ。

死への恐怖などろくに理解もせず、結果はこのざまである。

そんな僕の動揺など、狼の方が気にとめるはずもなかった。

溜めに溜めたエネルギーを爆発させ、狼が動いた。

先程とは比べ物にならないスピードで、5メートル足らずの間合いを詰め、跳ぶ。

回避は無理と考え、とつさに鞆を盾に使い、僅かながらもシヨックを和らげようとする僕を嘲笑うかのように、弾丸のように突っ込んできた狼はたったのひと蹴りで盾に使った鞆ごと僕の身体を吹き飛ばした。

数秒間かそれにも満たない短い時間、僕は確かに宙に舞っていた。

圧倒的な力の差で弾き飛ばされた僕の身体は空中で錐揉みのように回転すると、再び下草に覆われた地面に激しく叩きつけられる。

背中に加わった激烈なまでの衝撃で、一瞬呼吸が止まっていた。

口の中か、それとも更に奥の内蔵からか、尋常でない量の血液が噴出する。

衝撃でおかしくなった横隔膜を無理矢理に動かし、激しくええずきながら体を起こす僕に、最早獣としてのポテンシャルを余すところ無く発揮した狼が、間髪入れずに襲いかかった。

ぐらぐらと不規則にブレる視界の中心に、とどめを刺さんと駆け寄る狼をとらえ、反射的に体を捻る。

ダメージの抜けない状態では、それがやっとのことだった。



足元が安定性のそれなりに高い、スニーカーであったことだけは、ひとまず良かったのか。

僕の喉笛を咬み千切るべく広げられた狼の顎あごは、僕の悪あがきにより本来の目標を外した代わりに、結果的には副次的にその効力を発揮した。

ぐちゃり、という粘着音とも、バキリ、という断裂音ともつかない、この世のものとは思えない音。

人生の中で、まともな生活を送っていれば到底聞くはずのないであろうそんな音を立てて、

僕の右手、肘から先がそっくり丸ごと咬み千切られた。

「

！……！……」

焼け付くような、とか、抉えぐるような、などという修飾すら、霞む。ただ、痛い。

痛い、痛い、痛い、痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

痛い、という二文字だけで思考が埋め尽くされる。

切断面からは関節の残骸らしき塊が垂れ下がり、点滴のチューブが太くなったような外見を見せる血管からは、どくりどくりと、一拍ごとに緩急をつけて莫大な量の血液が流れ出ている。

想像を絶する痛みは痛覚を飽和させ、絶叫を終えた僕に呼吸する事さえ許さない。

とすん、という落下音。

それが、僕の右手だったモノが狼の顎の束縛から離れ、地面に落ちた時に発せられたものであることに、遅れて気付く。

呼吸もままならず地面に横たわる僕の視界にわざと自らを晒すように、ゆっくりとした拳動で近づいてくる狼。

その像が急速にぼやける。

一度に大量の血液を失った為か、急激な寒さが体を包む。既に体も満足に動かない。

激烈な痛みだけが右腕を駆け上り、脊髄を伝って脳髄に突き刺さる。

口を開いて言葉を発しようとするが、酸素が肺に入っていない。

勝ち誇ったような狼。もういくばくもなく、彼が狙う獲物は沈黙するだろう。

為す術もない僕の傍らに歩み寄った獣は、正真正銘の最後の一手を下すべく、再度、その死顎を開く。

朦朧とする意識のなかで、鋭い刃のような歯の並ぶ顎を見据える。

もともと捨てるつもりは命だった。

捨てるのがたったの1日足らず遅れただけのこと。

そんなことは判っていても、恐怖というものは明確に存在した。

狼の吐息が顔にかかる。

情けないことに、痛みと恐れで体は動かない。

ほとんど零距离で、狼の瞳を見据える。冷酷な、捕食者の眼。明確すぎるまでの死の予感に、無駄とは分かっているも、ほとんど無意識のうちに息を止めた。

最期の瞬間は、唐突に訪れた。

僕が予想していた結末とは正反対の最期が。

明るさをほとんど失いかけた視界の中央で、狼が何かに気がついたように僕の首筋にあてがっていた顎を離し、左に顔を向ける一連の動作。

そして、僕の身体を跨いでいたその姿が鋭いエネルギーの奔流により弾き飛ばされる様子が、さながらスローモーションのように映し出された。

(な 何……が……?)

頭を狼を撃ち抜いた攻撃が発射されたであろう方向に向ける。

肝心の攻撃の主の姿を認めるだけの余裕はなかった。格段に増した瞼の重みに抗うだけの力もなく、僕の意識は深い闇に閉ざされていったのである。

十

肅、<sup>しゅく</sup>という静けさだけが、在った。

自分は死んだのか、と、今更ながらそんな思考が頭をよぎる。

「当然、あれだけ出血すればそうなるな」というのは理性の声。

しかし、肌に触れる空気が嫌に暖かい。

何か違う。

感覚からして仰臥した体勢であることだけはわかる。

はて、そういえば僕の理性よ、やっぱりなくなったりはしないんだな？

よくよく考えてみれば、触覚も聴覚も嗅覚も生きているし。

背中には柔らかい布の感触。他にも体のあちこちに圧迫感を感じるし、鼻腔に入るつんとする匂い。これはアルコールか？もある。

「……れの、…うだいは…？」

聴覚を確かめようとしたその瞬間、ほんの僅かな音が僕の鼓膜をくすぐる。

「……りあえず…、ひつな…しよは終わった  
…」

鈴を転がすような、微かな音。音源はだんだん近づいてくるかと思えば、いつの間にか一転してだんだん遠ざかってゆく。

「本当に　　だい……　　ぶ？　　かな　　…の　　ふか…　　だけど」  
「だいじ　　ぶ。月の　　は　　だて……ないわ」

離れたところで幽かすかに聞こえている音声。

これは……人の声？  
それも、声色に筋の通った女性のものだ。

そう思い至った時には、僕はゆっくりと瞼まぶたを開け始めていた。

「……知らない天井だ　　」

どこのロボットアニメの主人公だ。

結論：イタかった。……もとい、痛かった。

少し身じろぎしただけで、体のあちこちに痛みが走る。

死んでるのに痛覚はそのままなのか？

いや、違う。

体の痛みに顔をしかめながら、辺りを見回す。

典型的な、日本家屋の和室だった。両親の実家も田舎の方だったので、こんな感じであったのを覚えている。

畳敷きの和室に敷かれた布団の上に横たわっていたのである。

自分を中心にくるりと周囲を見渡すと、横になっている位置から数メートルと離れていない壁に、細長い合成繊維製の袋が立て掛けられていた。

竹刀袋である。

壁にもたれかかった棒状の物体の脇には、幾分くたびれた様子の革靴が寄り添うように置かれている。

それらを見つけて始めて、自分が置かれた状況に気付いた。

「命、拾いましたかね……」

さすがにこの期に及んで“生きちまった”などとは言えない。

痛む体を刺激しないように気をつけながら、周囲を見渡す。



枕元には紺色のウィンドブレーカーがきっちり畳まれて置かれていた。

着ている服は、相変わらずの剣道着。

もとの藍色の生地の上におびただしい範囲に渡って乾ききった血の色が上塗りされたため、なんとも形容し難い色になっている。

右手に感じる圧迫感をたどってみると、包帯でぐるぐる巻きにされた上下両腕（、、、、）が、二枚の添え木により両側から挟み込まれる形でがっちり固定されている。

恐る恐る自由な左腕を伸ばし、ミイラのように隙間無く白い包帯に包まれた右手の手首に、触れる。

「……………つぎやつぶん」

痺れにも似た痛みが腕を駆け上り、思わず悲鳴をあげた。

おおよそ普通の人間なら発しそうにない悲鳴だったが、生憎とこちらら普通の怪我ではない。

ビリビリとした痛みを発する右腕、さらに全身をいたわりながら半身を起こす。

新たに起こった痛みに顔をしかめていると、左側の襖が、するりと開く。

「わざわざ起きんでも良かろうに……」  
襖を開け、こちらを覗き込んだのは、1人の女性だった。

切れ長の双眸を宿した細面。  
年齢は二十歳を過ぎたあたりに見える。  
白地に薄く花の意匠があしらわれた小袖に身を包むその姿は、ぱつと見どころの社長秘書。

呆れたような語調でそう言いながら、女性は僕が臥している布団の脇に腰をおろすと、じつと僕の顔を覗き込む。

「……あ、あの……」  
「腕の調子は？」

とりあえず口を開きかけた僕を遮り、女性は静かに問うた。

右手のことか。

「は、……ええと、痛みます」  
「指の感覚は？」

「ご、五本とも、ありますけど……」

「ふむ……とりあえずは、問題無さそうじゃな」

そう言って僅かに口元に手をやる仕草をした後、僅かに身を引いた女性に、ようやくのことで問いかける。

「あの、……貴女は？」

「ん？ ああ、名前か。……弊めい文ぶん神かみ楽らくじゃ。まあ、よろしゅうな」

「はあ……どうも」

にかっ、と笑いかけてくる女性。

その言葉にかなり戸惑いながらもなんとか返した微妙な返事に、一転して彼女は唇をとがらせた。

「全く、何じゃ？ そんな辛気臭い顔をして。もしかして助けてやらん方が良かったかの？」

「いや、そんなつもりじゃなく……一寸ちよじと驚いたもので」

「腕がくつついていたから？」

「それももちろん有りますが……何もかもがいきなり、と言いますか……」

何が、と限定はできない。

言うなれば5W1H全てに関して、である。

何から質問するべきか、候補となるものが脳裏に次々と浮かび上がり、それぞれが口をついて出ようとしたあたりで大渋滞を起こす。

尚も齒切れ悪くごちゃごちゃと唸っていると、まあまあ、とスト

ツプが掛けられた。

「答えられ限りで、順を追って説明するとしよう。見るからにあんたさんは外来人らしいしの。……まずその前に、」

そこで一拍置くと、真剣な面持ちで女性は再び言葉を続ける。

「あんたさん、名は？」

何でもない問のはずだった。

普通なら素直に答えてそれで終わり。

しかし、何の因果だか事はそう上手く行かなかった

その問いに答えようとした瞬間のことを、僕は決して忘れないだろじ。

忘れようとしても忘れられないのだろうけど。

この瞬間、僕の思考は掛け値なしに止まったはずだ。

思っ。

ああ、何てことだ。

過去十年以上慣れ親しんできた、自分の名前。

その頭文字の一字はもとより、名字の最初の一字すら、思い出すことはできなかつたのである。

十数年間積み上げてきたはずの記憶の海から、まるでハサミか何かで切り抜いたかのように。

綺麗さっぱりと消失していたのだ。

其之貳・ 森の中、臨死の件（後書き）

さて、原作キャラがチラリと登場。

しかし我ながら酷いggggggっぷりです。

下手なクセに使い回ししてんじゃねえよ、と自分の頭に拳骨をぶつけつつ。

今回はこの辺で。

さて、次回はいつになるやら。

其之參・妖怪の邸、能力と名の件（前書き）

量多し。

何故増えたし。

其之参・妖怪の邸、能力と名の件

天井に照明装置が無い光景というものを見たのは、十何年生きてきて初めてのことではないだろうか。

“向こう”にいる間は当たり前すぎてほとんど意識しなかったものが、ここには無いと分かるや否や、途端に形容し難い居心地の悪さにさいなまれる。

それが見事なまでに現在の自分の内面にリンクしているように思えて、布団の中、やるせなく一人溜め息をつく。

明かりの無い天井。名前を忘れた自分。

もうすぐ日も暮れるだろう。

照明となる燭台の火はあるが、自分の名前はどこかに行ったまま。

とんだ失せものである。

幣文と名乗った女性は、僕が自分の名を思い出せないと知ると、真剣な面持ちで『本当に覚えていないのか』という旨の問を投げかけてきた。

僕が全く思い出せないと再び答えると、しばらく難しい顔が続けた後、とりあえず名前については保留という結論を下し、それ以降は僕が質問し彼女が答える、という形の会話が続いたのだった。



さて。

幻想郷。

僕が流れ着いた世界の名である。

妖精たちとの会話の中でも出てきたワード。ここに来てようやく中身を知ることができた。

幣文氏曰わく、ここ幻想郷は強力な結界により僕がこれまでいた世界と隔離された空間であるということだった。

結界で隔離された幻想郷の中には、外の世界で“幻想”のものとなった、妖怪・妖精・神霊、そして、そこで混じりながら暮らす人間が暮らしている。とのこと。

“外の世界”とは陸続きであるものの、結界で隔離されているので、通常は外部から幻想郷を認識することも行き来もできず、逆に内部から幻想郷の外の世界を認識したり行き来したりも出来無い。が、これには例外が存在する。

幻想郷は、その性質そのものにより、“外の世界”で忘れ去られて幻想のものとなったものを幻想郷内へ呼び寄せる働きがある。

これにより物品の移動が起こる、というのが一つ。

二つ目は、結界の管理人の手により、何かしらの目的のために人やら物やらが行き来される、というもの。

最後は、たまたま結界を越えてしまう、という一種の事故的な方法。結界が薄くなっているような場所で、たまたま起こるらしい。

これらの原因により、“外の世界”から幻想郷へと流れ着いた人のことを『外来人』という。

森で妖精たちが言っていたのはこれのことである。

森、といえば。

「しっかし……魔法の森で目覚めて、良くもまあ無事で居られたもんじゃね」

「もつとも、狼に殺されかけましたが……」 「ああ、あの山犬か？ それについても勿論じゃが、それ以前にあの瘴気や毒胞子の漂う森で、正気を保っていられたことの方が驚きじゃんよ」

「……そんなに危ないところなんですかあそこは？」  
「少なくとも魔力やら妖力やらに全く耐性のない外来人にとっては、好ましい場所ではないな」

いつの間にもやら危ない綱渡りをしていたようである。我ながら恐ろしい。

「山犬についても同じじゃ。普通、外来人に限らず人間ならば、妖獣の接近には気づけても、攻撃をかわすのはよほど慣れてでもない限り無理じゃからな」

「……はあ」

綱渡り、というかこれではもはや糸渡りである。

一つ気掛かりな事がある。あの森 本来ならば瘴気にやられていなければおかしい魔法の森の中での、妙に研ぎ澄まされた五感。瘴気により減殺されるのが道理だろうに、あの時の感覚はほとんど生まれて初めてなレベルまで高められていた。

そのことを幣文氏に話すと、彼女は手を口元にやり、しばし考え込むような表情を見せた。

「そこらへんが、あなたさんの“能力”なのかも知れんね」

しばしの黙考を払いのけるように明るい口調でそう言うと、彼女はすっと立ち上がる。

僕に夕食は何か良いかと訊ねた後で、再び襖の向こう側へと出て行ってしまった。

後に残るのは布団に横たわる僕だけとなって、今に至る。

いつの間にやら雪が降り始めていた。

ふわりふわりと降り注ぐ白い粒が、地面に落ちてはゆっくりと融

ける。融けては舞い降り、舞い降りてはまた融けてゆく。

あちらの世界でも雪が降るシーンは幾度となく見ているが、この日はかりはセンチメンタルになってしまっても許されるだろうか。

ぼーっ、と外に面した半開きの障子戸の隙間から庭を眺めている間にも、雪は次第に地面を覆い隠してゆく。

よくよく考えてみれば、今は1月。真冬である。幻想郷は日本と陸続きな訳だから、当然季節はそのままだ。

雪が障子の向こうの庭をつつすらと覆い隠していくにつれ、若干の寒さが縁側から這い上がってくる。

そろそろ顔にあたる冷気が確かなものになってきたため幣文氏を呼ぼうかと考えたものの、大声を出して現在絶賛炊飯中の彼女を呼ぶというのは、いささか態度がでかすぎるといっつか、分不相応といっつか、ともかくもそんな理由ではばかられた。

例によって傷をいたわりながらゆっくりと布団から上体を起こし、障子に向けて使える左手を伸ばそうとした時だった。

カサリ

と、なにやら白いものがチラリと障子の向こう側で蠢いた。

「うん？………うわ」

解説。

その何かに意識を集中した際に発した「ん？」と、完全に姿を表したそれを目にしたために発した「うわ」、である。

一言で言えば、それは紙人形。

人間でいう頭の部分は完全な円形。頭の下には和服の袖のような腕状のパーツが伸び、腕の付け根から人間の腰にあたる位置までスカートのように紙幅が広がってゆく。

人形と違い、足にあたる部分には切れ目がなく、杭のように尖った一本“脚”の先端を床につけて、器用に直立している。

陰陽師か何かが使っているような紙人形は、一体だけではなかった。

ひよこひよここと、障子の向こう側から現れた紙人形は計5体。

紙人形たちは腕にあたるパーツを障子の木枠に添えると、意外な力強さで押し始める。

左手を伸ばしたままで啞然としている僕をよそに、着実に障子は閉まってゆく。

やがてずいずいと音を立てて障子を閉め終わると、紙人形たちはふっ、と空気に溶けるように消えてしまった。

「……………なんぞ今の？」  
あんなのが跋扈しているのか。  
げに幻想郷とは恐ろしきところぞ。  
……………そうではなく。

あの紙人形たちには、どことなく幣文氏に似た趣があったような気がする。

趣というのも不正確かもしれない。雰囲気、気配、オーラ……………？  
どれも違うような気がするが、とにかくあの紙人形たちは、自分の全く知らない何かのようにには思えなかったのだ。もっとも、出会って数時間の相手の特徴を理解できるほどの力は持ち合わせていないし、それが可能だとも思えない。  
しかし、こんな第六感やフィーリングを軽んずるべきではないことは、この幻想郷を訪れてからの短い間で思い知らされてもいるのだ。

妖怪と人間が共存する幻想郷。  
魔術や魔法などというものも、外の世界では“幻想”となつていても、ここでは日常的に利用されると幣文氏から聞いている。  
あれもそういう“幻想”の産物なのだろう。

そう考えると、紙人形が勝手に動いていても案外不思議なことではないのかもしれない。

どこかの幻想殺しが入ってきたらどうなることやら。

我ながら無理矢理な発想である。  
これはひどい。

再び布団に横になると、薄暗くなった部屋はうまい具合に眠気を引き立ててくれた。

先の紙人形たちについて益体もないことばかり考えながら、ゆっくりと目を閉じる。

まだ体力は完全ではないようで、それほど長く起きていたわけでもないのに妙に身体にまとわりつくような倦怠感を感じた。

ちなみに、魔法の森で幣文氏に助けられてから3日間はぶっ通しで眠っていたらしい。

片方の下腕をぶち切られたのである。むしろ3日で身体を起こすことができるまでに回復したということが自体が幸運ともいえるだろう。

ここで無為に起き続けることではけなしの体力を使い果たし、また何日も寝込んでしまつては、夕餉ゆづげの支度をしてきている幣文氏に申し訳ない。

そんなふう結論づけてすうつ、と息を吐き、身体力を抜いて布団の暖かさに身を任せると、すぐさま抗いようのない速度で睡魔が迫ってきて僕の意識を刈り取っていった。

おーいぼーずー、という、妙に間延びした言葉とともに起こされた。

「お疲れのところ悪いが、夕飯じゃ」

てな訳で、幻想入り後初のまともな食事である。

まあ、怪我人の身であるため必然的に主食はお粥と相成るわけだが。

「あーん、てやったるか？」

「魅力的なお話ですが拒否の方向で」

幣文氏の軽口に応えつつ、無事な左手でレンゲを持ち、程よい具合にふやけた白米の塊を掬い取る。

あーんは断ったが、流石にお盆の上に置かれた茶碗は押さえて頂



いた。

ゆっくりとレンゲに載せた粥を口に含む。  
熱すぎず、ぬるすぎず。程よい暖かさ。

ああ、絶食後の口内に光が満ちる……………。

いや、この感動は半端じゃない。

粥が舌に触れた途端に痺れにも似た何かを舌を走り抜け、思わず  
身震いした。

その何かが味覚からの信号であるということに遅れて気づく。

これは、この味は

空になったレンゲを口から離し、一言。

「うますぎる！！」（CV：大塚明夫）

ピキユン、という効果音が脳内再生される。

大方、体力ゲージだけでなく気力ゲージも回復したことだろうw  
ww。

こんがりレーションレベルも真っ青の回復量である。

「美味いか。そいつは重置じゃ」

「染みるっ……………お粥ってここまで腹に染みる食い物だった

のか……………」

隣で満足そうな微笑みを浮かべる幣文氏をよそに、僕は左手のリングを動かして幾度となく粥を口に運んでは咀嚼し、ことごとく胃袋の中へと送り込む。

あまりのペースに隣で幣文氏が慌てはじめたが、無視。

「おいおい、そんなに急いで食うと腹がびっくり……………って、食い終えてもった……………」

「……………ああ……………生きてるって素晴らしい」

今まで命を粗末にしてゴメンナサイ。

別にこれといって信じている神など無いが、漠然とした感謝を述べてみる。

「……………あなたさん本当に怪我人か？」

「いやあ、そのはず……………」

やれやれ、という表情で聞いてくる幣文氏。

そんな顔をされても。

なにせ単純計算で3日、外の世界に居たときから考えれば4日ぶりの暖かい食べ物である。

道中、お茶はちびちびと口に含む程度。カロリーメイトなどで腹が膨れるはずはない。

殆ど飲まず食わずである。

そりゃあ腹も減ります。  
育ち盛りの男子高校生なめんな。

「今度はゆつくりな……」  
「……じゃあ、ゆつくりと」

よそられた2杯目をレンゲで掬い、口に運ぶ。先程とは反対にゆつくりと咀嚼すると、予想以上の芳醇な甘味が口の中を満たす。どうでもいいが、たったお粥一匙口に含んだだけなのに唾液がものすごい。

パプロフの犬か僕は。

米はデンプンの塊だから、唾液によって分解され、それで甘味を感じる訳である。

甘味といっても砂糖のような舌にまとわりつく甘さではない。あくまで自然な、柔らかく優しい甘み。

「うめえうめえ」

「いやはや白粥がここまで喜ばれるとは……」  
空腹は最高のソース、とは良く言ったものである。

そういえばさつきから飯の話しかしていない。  
お粥から受けた衝撃があまりに大きすぎて、それまで考えていたことが吹き飛んでしまっていた。  
危ない危ない。

「幣文さん」

「ん……神楽でええよ」

「……じゃあ、神楽さん」

「何じゃ？」

「……その、ここまで面倒を掛けてる僕が言うのは失礼かもしれませんが……」

布団から上体を起こした格好の僕と向き合う幣文氏　いや、神楽さん。

その視線が、伏し目で軽くうつむいた僕の額を撫でていくのを感じながら、言葉を続ける。

「何故僕を助けたんです？　貴女は　」

「妖怪なのに？」

言おうとした言葉をそのまま返される。　視線を上げると、彼女は変わらず柔らかい笑みを浮かべていた

幣文神楽は、妖怪である。

先程目覚めてすぐに知らされたことだ。

そのままゆっくりと腕を組み、幾分真剣な口調で彼女は話し始める。

「確かに、妖怪は人間を食らい、人間は妖怪を退治する。その形式は何年経とうが変わらん」

「それなら何故？」

「うーむ……どう言えば良いか」

腕を組みながら僅かに考える素振りを見せる神楽さん。10秒ほど右手を顎にやり黙考した後、再び口を開く。

「まあ、言ってみれば、興味じゃの」

「興味……ですか」

「いくら何でもそんな格好の外来人なぞそうそういない」

「……というか外来人だとは判ったんですね」

「当たり前じゃ。今は真冬じゃぞ。雪が無かったとはいえ、その薄着で外に出るような普通の人間は幻想郷にはおらんで。日常的に着る服とは違うしの」

「さいですか……」

というか、普通の人間以外はこんな薄着でも外出するらしい。びっくりである。

さらに言葉が続く。

「まあ、別に人間を助けたからといってお咎めがあるわけでもないし、どうせならってことで助けた訳じゃの」

「失礼ですが食べようとは？」

「お前さんのようなほとんど骨と皮だけのを食べたところで食った気がせん」

「そいつはごもつとも」

ああ、貧弱さに感謝。

それに、と一旦言葉を切り。

「ワシは若干人間が混じっとるしの」  
頭を掻きながら言う神楽さん。

「純粹種じゃないんですか……?」  
かなり驚きつつ問い返す。

「確か……父方の祖母かそこいらが人間らしいの。良くは知らぬ  
が」

「良くは知らぬて……」

「仕方なかる。何せ千五百年ほど前の話。ワシが生まれた頃には  
死んどつた」

「妖怪が長生きだとは思ってましたが……」

それにしたって年齢詐欺である。

二代前で千五百年てことは、この人自身は……。

「今何か失礼なことを考えなかつたか？」

「……いや、いくら何でも若作りすぎると」

僕の言葉にはあ、とため息を返すと、半ば拗ねたような表情を浮かべる神楽さん。

「大体の妖怪は成長を止める代わりに長命を得とるんじゃ。好き  
で若々しくいる訳ではないわい」

「なるほど……しかし若いつて良いことでは？」

「生意気言つと食つぞ」  
「申し訳ございません」

素直に謝る。

骨と皮とは言え、食べられないものではないらしい僕。  
こんなところで命を無駄にしたくない。

「別に1日1人だとか、そんなに必須でもないし。数月に一人で十二分じゃ」

「……すげえエネルギー効率」

「あくまでも妖怪は人間の恐怖が生み出した存在。物質的なエネルギーより、むしろ精神的なエネルギーの方が重要じゃ。空腹感なら人間が普通に食うような食い物でも満たせるし、妖力の無駄遣いさえしなければこれといって困る事もない」

「そういうものなんですか……」

「そういうものじゃ」

はつきりと言い切る神楽さん。

「もつとも、お前さんのその怪我を見たときに若干本能が疼いたがの」

空腹だったらあの山犬蹴散らして食ってたかも知れんな、などと恐ろしいことを言う。

怒らせないようにならう。冗談でなく本当に食われそうだから。

「……と、こ馳走さまでした」

「うむ、お粗末さま。満腹かの？」

「しばらくの間食べていない状態でしたから。いきなり大量に胃に入れるのは拙まよいかと」

「……一杯目のドカ食いの方が拙いと思うのじゃが気のせいか？」

気のせいです。

食い気優先？

何のことかな？

十

そういえば、と。

空になった茶碗を下げながら、神楽さんは口を開く。

「名は思い出せたかの？」

「……いえ、……まだダメです」

ほづか、と、残念そうに返す神楽さん。

「……すみません」

「謝る必要は無いじゃろ。ゆるゆると、思い出せたらそれでええ」



「ご迷惑お掛けします」

「迷惑というほどのものでは無いわい。もつとも、何かしらあんなさんの呼び方を決めないと不便ではあるがの」

「はあ……無茶苦茶なものでなければ良いんですが」

そう応えると、神楽さんはふふふ、と笑みを漏らす。

「さあて、何が良いかの……まあ、今夜のうちに考えておくとしてどうか」

「まあ、どうぞお手柔らかに」

他人に言いにくい名前は遠慮したい。

平凡な名前を望むばかりである。

「神楽さん、さっきの紙人形は？」

「うん？ 紙人形というと、障子を閉めにやった奴らのことか？」

ついで、気になっていたことを訊く。

「ええ。あれは貴女でしょう？」

「左様じゃ。まあ、この家にいるのはワシとあんなだけじゃし、分かって当然かの」

「まあ、そうですね……あれを見たとき、何となく貴女に似た何かを見た気がするんです」

「何かとはなんぞ?」

「……どう言えば良いのか……雰囲気というか、オーラというか、そんな感じの何かです」

そこまで僕が言うと、神楽さんはゆっくりと立ち上がり、僕から見て左手側、件の紙人形たちが閉めた障子の方へと歩みを進める。右手を顎にやり、思案顔を浮かべる神楽さん。

ガラリ、と音を立てて障子戸が開け放たれる。

「あの、神楽さん……?」 僕の呼びかけにも応えることなく、障子戸の縁にあてた左手も、形の良い口元を覆う右手もそのままに、こちらに背を向けたまま障子戸の向こうの縁側へと足を踏み出す。

雪は相変わらず降り続けている。

ひやりとした空気が、開け放たれた障子戸の合間から流れ込んだ。

雪降る外の光景を睨んだまま動かない彼女に、再度声を掛けるべきか考えた、その瞬間である。

幣文神楽が、勢い良くこちらを振り向くと同時に、いつの間にか手に持っていた紙人形を僕の顔面を掛けて射出した。

「なっ、……!」

勢い良く迫る紙人形。とっさに視線を向ける。

時間にしてみれば、一秒の何分の一か。最早時間のうちに入らない、“瞬間”。

その間に僕は、迫り来る紙人形の通過点を予測し顔を、

動かさない（／＼／＼／＼）。

風切り音が耳元で響き、紙人形が押しつけた空気の塊が髪を僅かに持ち上げるのを感じながら、叫ぶ。

「一体何を　　!？」

再度、返答は紙人形。

一直線に飛来するそれを視点の中心に捉え、弾道予測。  
今度は勢い良く頭を傾ける。

頭を掠めて後方に流れていった紙人形は、畳に触れると同時に霧散、消失した。

「さつきから気になっていたんじゃ」

「何がです？」

「何故、妖獣の攻撃を殆ど初見のあんたさんが、たったの一撃にしる、かわす事ができたのか、じゃ」

一つ一つ区切るように言いつつ、パタン、と、障子を閉じる神楽

さん。

「ワシの式の一撃目をかわさなかったな」

「だから」

「対して、二撃目はしっかりとかわしてくれおった」

つ、と目を合わせる。

瞳ではなく、その奥の何かを探るような神楽さんの視線に釘付けにされる。

僕の視線をしっかりと縫い止めながら、彼女は言った。

「おぬし、見えて（／＼／＼）おるのじゃろ」

十

いつからかは判らない。

気がついた時には出来た、というのが一番正確だ。

だが、あれを初めて実用的に使ったのは確か剣道の試合中の事だったと思う。

剣道を本当に信じてやっている方々からしてみれば、僕の考え方は酷くへたした不誠実なものであるには違いない。

それを承知の上で言わせてもらう。

ぶっちゃけた話。当初から僕は剣道にはあまり乗り気ではなかった。

体力を付けるため、という理由で手近な剣道教室に放り込まれ、とりあえず技の練習ぐらいは真面目に受けたものの、実戦であるところの試合には全く持って参加しなかった。

あくまでも僕が目的としたのは精神的な面での向上。要は集中力だとか瞬時の判断力だとかが身に付けばそれでよしという考えだったのである。

それ故に、段位はおろか級すら取っていないし、取ろうという気もはなから存在しなかった。

そうは言っても地稽古などガチンコで打ち合わなければならぬような練習形態もあるわけで、その際はある程度本気で打ち込みに行っているようなフリをして、凌いでいたわけである。

もつとも、そんな小癪な対処法など剣道の師範からすれば見え透いたもので、結果的に当然と言おうか、まあ、有り体に言えばマクされる形になったのだ。

そんな訳で僕のナメた根性を叩き直そうとでも思ったのである。師範は、その教室の中でも指折りの手練れを地稽古の相手として僕に割り当てた。何となく師範にそういう意図があることは判っていたし、僕自身ただでボコられるような気はなかった。 “それを試してみたのだったか。”

当時小学2、3年だった僕の相手となったのは中学生。何年かは知らなかったが、何せ年齢は4歳以上違う。滅茶苦茶な体格差があり、自分の置かれた状況が最早イジメか何かのように思えた。

身長差は30センチは優にあつたに違いない。

数値からして自分より段違いに大きい上に、防具を付け竹刀を構え、という状態での威圧感は半端ではなかった。

もちろん太刀打ちできないのはいくら小学校低学年のガキの頭といえど簡単にわかつたし、しようとも思わなかった。

精々被害をなるべく受けないようにと考え、当初は“それ”を使うことなど考えてもいなかったが、その判断は他ならぬ僕自身によって転換される。

理由は稽古相手の表情。

恐らくは師範から直々に許可を得ていたのだろう。竹刀を正眼に構えた相手の表情は、名実ともに格下である相手を思う存分いたぶれることへの悦びに歪んでいた。

今思えば何故こつもあからさまに敵役っぽく記憶に残っているの

か甚だ疑問である。

とどのつまりその表情がウザかったわけで。

丁度テレビアニメの主人公キャラか何か自身を重ねたのである。う僕は、なにくそ、と、“それ”を使ってみたというわけである。今の僕からすれば、何やってんだ、と頭でもポカリと叩いてやりたい。

やつ。

いい加減“それ”について解説しなければならぬだろう。どうせなら、件の地稽古を用いて。

師範の「始め」の号令。その直後の太鼓の音とともにあちこちで気合いの声が発せられ、僕は間髪入れずに相手の両腕を凝視した。

相手は待つてましたとばかりに声を張り上げ、大きく踏み込む。

今にも振り上げられようかという竹刀、それを握る両手両腕から、それを支える肩まで、小手や胴着に覆われた外見ではなく、丁度、それらを動かす筋肉でも“探る”かのように視線に力を込める。

そして、“視”た。それは、青白い燐光にいた何か。

相手の肩口から始まり、上腕、下腕、手へと流れるように広がってゆく燐光が竹刀の柄に届いた瞬間、僕は次の瞬間に取るべき行動

を理解した。

相手の竹刀が勢い良く振り上げられ、僕の面を目掛けて振り下ろされたとき、僕はただ一歩、されど全力で左に足を踏み出す。

はたして、

必中の間合いで放たれた打突が空を切る。

一撃をかわした僕は心の中で喝采し、一撃をかわされた相手は猛然と次の攻撃に移った。今度は小手打ち。判断理由は、先程と比較して振りかぶり方に若干のズレがあること。そして何より、

込められるエネルギーの量が、違っていた。

再びの打突。

相手の竹刀を叩き落とすような防御で、強引に軌道を逸らす。

理由はわからない。

動作を注視すると、その動作を行う際に起こる筋肉へのエネルギー伝達、とでも言うべきものの様子を捉えることができる。そんな力が身に付いていたのだ。

地稽古とは、簡単に言えば複数組のペアが同時に練習試合を行う



ような形式で、制限時間一杯、とにかく相手と1対1で打ち合うというものだ。試合とは違い、技が決まってもそれで終わりではない。

その後も幾度となく相手からの打突を受けた。強烈なのが数回直撃したが、ほとんどを竹刀による受けと回避で凌いだ。

師範もずっとこちらを見ていたのだろう。通常の地稽古の3倍はあるつかという長時間の稽古に、あらかたの生徒がバテたあたりで、慌てて「止め」の号令をかけた。

ちなみにこの一件以降、さらにマークがきつくなったというのは、まあ、どうでもいい余談である。

十

「その燐光とやら、他の人間に見える代物じゃないのだから？」

「ええまあ、少なくとも僕以外に見える奴はいませんでした」

再び、向き合う僕と神楽さん。

戸は全て閉じられ、燭台の明かりが淡く室内を照らし出している。

ふうむ、と、先程と同じく口元に手を添えながら思慮を続ける神楽さんは、僕の“能力(?)”についての話を聞いてからずっと同

じ格好を保っている。

「見てるこっちの肩が懲りそうだ。」

「山犬についても同じものをかえ？」

「ですね」

魔法の森ではあれに助けられた。

「ワシの式はどう見えたんじゃ？」

「最初の障子を閉めにきた奴には、うっすらと糸みたいなのが」

「糸？」

「マリオットみたいないや、違うな。紙人形を釣りの餌としたら、丁度釣り糸みたいなのが伸びてるように見えました」

それを聞いた神楽さんは、見えるのは物理的な運動量だけではないよっじゃの。と呟き、

「ワシがさつきお前さんに投げつけたのをかわしたな。あれは？」

「ワシが式を投げた瞬間の動きを“視”たか？」

「ええ……そこから軌道を予測できたんだと思います。これまでも大体そんな感じでした」

「……軌道、のっ……」

僕の言葉を繰り返しながら、そのままブツブツと何事か考え続ける。

そしてしばしの後、つ、と顔を上げた彼女の口から思いもよらない言葉が発せられた。

「いや、それは無理じゃろ」

「え……?」

反射的に呆けたような声を上げた僕に対し、神楽さんは先刻から少しも変わらぬ口調で説明した。

「あんたはん、最初にそれを使ったのは剣道の稽古の時と言ったの?」

「……それ以前にも使ったことは有りました。ですけど、見えたものの情報を明確に次の行動に反映したって意味ではあの時が最初です」

「問題は、そこじゃ」

そこで一度言葉を切り、

「なぜ、“初めて得た特殊な情報”から“ある特定の一つの動作”を予測できたのか、ということじゃ」

「……何度か他人の動作を“あれ”で覗いたことがありましたから、その時の記憶を判断材料にした、という可能性は?」

これはかねてより考えていた僕なりの“あれ”についての考察な

のだが、それについてもやはり神楽さんは首を横に振った。

「いや、そう考えると絶対量としての記憶が確実に足りないはずじゃ」

「それじゃあ……あの時の予測はたまたまだったんでしょか」

「まさか、偶然でよけられるような相手でなかったことはあんたさん自身、分かっとるじゃろ？」

「なら、“あれ”は一体何なんです？」 率直な疑問を述べる。

「何、と問われてものう……その“能力”を持つとるのはワシではなくお前さんじゃ。ワシができるのはあくまでもお前さんの言葉からその一部分を推測すること。お前さんに何かを教えることはできん。それを念頭に置くがよかる」

神楽さんは何度目かの黙考の後、そう前置きしてから語り出した。

「“能力”というものは言わば一個体に固有の言語のようなものじゃ。言語を解する者は内容を知る可能性があるが、そうでない者にとっては、語られる言葉はただの音の羅列に、記される文字はただの点と線が不規則に絡み合った模様にしが見えぬ。“能力”は言語の持つこの特徴が一個体レベルまで縮退したもの、と考えることができるのう」

言いながら、それまで正座だった足を崩す。着物の裾から白磁のような足がちらりと覗き、そんな場合ではないとは分かっていたが、ドキリとした。

「ただ、言語は後天的に学ぶことで程度の差こそあれ、それが異言語であっても修得する事ができるのじゃが、能力は後天的に身に付くものではないし、他人の言語であるところの“能力”を修得することもできぬ」

それこそ『他人の能力を使用する程度の能力』なんてものでも存在すれば話は別じゃがの、などとうそぶきつつ、神楽さんは話を続ける。

「さて、……ここからがあなたさんの能力についてじゃ。あなたさん、“それ”は具体的にどんな能力じゃと思つとる？」

「……どう、と言われましても……」

それまでの記憶から、あの燐光が示す意味を導き出す。

あえて、言うならば……。

「『エネルギーの流れを見る』能力ですかね？」

「ふむ。それがお前さんの考えかの」

「ええまあ、さっきの貴女の紙人形も、それのお陰で回避できたんだと……」

僕が言つと、神楽さんはニヤリと口角を僅かに吊り上げながら返す。

「種明かしをするとの、ワシはあの時、二つの式を全く同じ軌道を通すつもりで投げた」

「……っ?! ですけど、あの時は確かに」

「軌道は違った。ワシの手を離れてからある程度飛んだところで曲がるように、あらかじめ妖力で細工をしておいたのじゃ」

「……………なら、僕の“あれ”は　あの燐光は紛い物なんですよ  
うか……………」

動揺を隠しきれないまま訊く僕とは対照的に、泰然とした様子で答える神楽さん。

「それならば前提からしておかしいじゃろ。あちらの世界で有用に用い得た能力とはあんたさんの話からも分かった。能力自体は本物じゃ」　「　なら……………」

「逆じゃよ。あんたさんの能力は、あんたさんが思っとるより遙かに効果が大きいということじゃ」

ふふん、と、僅かに微笑みを浮かべながら、彼女　幣文神楽は言い切った。

地球は丸い、ということは今日び知らぬ者はいないはずである。

しかし、六百年ほど前ならばどうだろう。世界的には大航海時代の手前、もしくはその初頭。その時代、人々の頭の中にあつたのは、地球という球体ではなく巨大な円盤型の大地だった。

理由は簡単。人という一生物に対して地球という一天体があまりにも大きすぎるからだ。大きすぎる全体に対して、小さすぎる個体が察することができるのは、ある意味で分相応な“一部分”だけである。

対比される大きさの差こそあれ、僕の能力についても同じことが言える、と、神楽さんは言った。

例えば、

文法を半分だけ理解して、文を読むようなもの。単純に考えて、理解できる内容は文全体の半分。

残り半分は、持ち合わせた知識に照らしてカンとフィーリングでの推測を行う以外に方法はない。

動作からエネルギー経路を見る、というのはあくまでも能力の一部。先程の軌道予測を成し得たのは、まだ理解されていない残りの能力の一端、と。

「あなたさんには、確かにワシの妖力が見えとる。しかもそれが如何なる効果を持つかということも、自覚なしに理解できとるのではないか？」

「ですけど、何故そんな事が……？ 訳も分からずに予測して、しかもそれが正しいなんて」

「気味が悪い、かの？」

僕の言葉を先回りして、神楽さんは言う。

「そう思うのは当然のことじゃろ。誰しも、己の自覚を越えたものには自然と不安を感じるものじゃよ」

「……それは一寸違ちよつとう気がしますが……」

明確な理由も無く信じていた、というのと、自分が酷くアホらしく感じられる。

そんな風に考えていると、神楽さんはいきなりすつと畳の上から立ち上がり、そのままぐつと伸びをしながら言った。

「まあ、何じゃ、能力を確立するために一番最初に行くべきは、己の能力のキモが何であるか自覚すること。それが分からなければ、……んしょ……せつかくの能力も宝の持ち腐れじゃ」

可愛らしい声を発し、肩をポンポンと叩きながら言う神楽さん。肩が凝ったようである。

だから言わんこっちゃない。

別に忠告してないけど。

「……………それにしても  
キモ、ねえ……………。  
即ち、中心か。  
中心、つまり根本、すなわち骨子、核、核心……………。」

原点、実質、本質……………。本質？

突然。

どくり、と。

何かが、頭の中で、脈動した。

「っ、本質

！？」

「うん？」



神楽さんがぐつと伸びをした体勢のまま、こちらに顔を向ける。

きん、と、冷たいものを口の中に放り込んだ時のような痛みが走り、反射的に左手で頭を抑える。

小さくも鋭いその痛みに後押しされるように、意志とは関係なく口から言葉が漏れ出す。

“あれ”は、僕の能力は

『本質を操る程度の能力』

意志とは関係無く、勝手に吐き出された言葉が、ワントンポ遅れて聴覚に捉えられる。

その瞬間、再び先程と同じような鋭い痛みが頭に走り、反射的に頭をうつむけた。

何だ、これは。

僕自身ではなく、何か他の意志に操られたかのような不快感の反面、それでいてどこか懐かしさを覚えるようなフレーズ。

明確な違和感。それと相反するはずの、妙な統一感。

一体、何だ？



ニヤリと笑いながら何やら納得した表情を浮かべる。  
僕自身は全くもって分からない。

「面白いのかどうか分かりませんが……何というか、漠然として  
て」

「確かに、その通りじゃの。じゃが、記憶に照らし合わせてみい。  
おんしは自分自身、知らず知らずのうちに対象の本質を見抜いとっ  
たんじやろつよ。燐光が見えるというのは、恐らくその能力からの  
派生じゃ」

神楽さんは一語一句を僕に言い聞かせるように告げた。

全ては、知らず知らずのうちに。

かつて剣道の稽古中に見たのは、相手の動作の本質。

しかも本質の予測、ではなく、本質の知覚。

外の世界で何度か意図的に“視た”燐光。それらは全て動作の本  
質が言わば視覚的に投影されたものか。

幻想郷。

魔法の森で狼に襲撃された時。

普通の人間ならばかわすことの難しいはずの攻撃をなぜ避けられ  
たのか。

確かに、意識的に燐光を“視た”。

しかしそれは狼という獣におけるエネルギーの流れを視るということ。

当然、人間の筋肉を流れるそれとは全く異なるはずのものなのに、なぜ予測を成し得たのか。

つい先ほど。

幣文神楽の放った紙人形は、物理的に込められたエネルギーからすれば、全く同じ弾道を描くはずだった。

実際には込められた妖力により、物理的なエネルギーだけでは考えられない軌道を描いたが、それすら見越したかのように身体は動いた。

今の今まで失念していた。彼女の妖力と言うものを、僕はそれ以前にも目にしていただ。

彼女の指令を受けた紙人形が障子戸を閉めにきたその時に。

無意識のうちに知覚した彼女の妖力。 その“本質”を、同じく無意識のうちにとらえていたのか。

全く。

我ながら、なんて不気味な能力だ。

何故できるのか分からず不気味で。

何ができるのか不透明で

できるとわかっている内容が不連続で。

どうしようもなく、とんでもなく、曖昧模糊。

十

「僕はどうすればいいんでしょう?」

そんなことを訊くのは身勝手なことだとは分かっている。

自分のすべきことなど、目の前の赤の他人　この人は妖怪だが　に問うても仕方がない。

それは分かっていたし、当然そんな答えが返ってくるものだと思っていたが、幣文神楽という女妖怪は律儀に答えてくれた。

「外人には幻想入りした後、二つ三つ選択肢がある。ここに残るか、外へ帰るか、もう一つは……まあ、あんたさんは当てはまらないだろうからこの線は無いの」

「何です? 最後のは?」

「聞かぬ方が良いと思うがの」

「なら、今は聞かないでおきます。……帰ろうと思えば」  
「帰れる。無論じゃ」

神楽さんは明確に言い切った。

それにしても、帰るか、残るか、である。

どちらを選ぶべきか。今置かれた状況について考え、結論を出す。

「帰りません」

「ほうか……。理由は？ 聞かぬ方が良いか？」

「いえ、大したことじゃありません。あつちでの僕は、既に死んでも同然だっただけです」

結論を出すのは早すぎるかも知れない。

もちろん勝手知ったる外の世界に戻るのなら、戻るべきかも知れない。

あちらに残してきたものだってある。

しかし、フェンスの天辺から飛び出した時、僕は外の世界をもまた飛び出したのだ。行きつく先が、たまたまあの世でなく幻想郷だったというだけのことである。

今更どの面提げて戻れるだろうか、と、思うのだ。

「おんしがそうしたいと言っならそれで良かる。気が変わったらいつでも良いからワシに言え。博麗の巫女に掛け合ってやる」

僕の言葉に特に意見する事もなく神楽さんは言った。

「まあ、そうなるとしても身体が治っってからですが」

「そのための、薬じゃ。ほれ」

言葉とともに、薬包紙を手渡される。

「何でも自然治癒力を高め、断裂した骨、筋肉、その他諸々の癒合を速めるとか言う話じゃ。まあ、薬師の請け売りじゃがの」

「はあ……、少なくとも見たところ、ただの薬ですね」

「それは能力を通して視て、かの？」

「どうなんでしょうねえ……？」

理屈の分からない能力というのは、ある意味本能に近いかも知れない。

こればかりは、自分自身で何とか理屈付けしていくほか無いだろう。

顆粒タイプの薬を薬包紙から口に流し込む。

そしてお約束というべきか、

「にがつ、……まっじい」

慌てて水で流し込む。

かつて服用した薬のうちでもワースト3に確実に食い込むような代物だった。

もったも、美味しい薬なんてものがあってもぞっとしないが。

ちなみに僕が薬を飲む様子を神楽さんはニヤニヤしながら眺めていた。Sだこの人。

ぐへえ、と、口に残るえげつない後味を噛みしめている僕を見やりながら、神楽さんは部屋を仕切る襖に手をかける。

「ま、せいぜい安静にする事じゃ。はよ寝るが良い……………うん、お、そうじゃ」

開けた襖の間を抜けて部屋を出ようとしていた神楽さんの体が急停止。

「丁度思いついた事がある」

そう言って振り返った彼女の顔には、妙に自身たつぷりな表情が浮かんでいて。

「何でしょーか？」

「さあて、教えてやろうかのー、どうしたものか。知りたいか？」



知りたいか？」

そう言って手首から先をすっぽりと着物の袖口に隠し、それをわざとらしく口元に持って行く。おまけに腰までわずかにひねり、妙なシナを作っている。

ぶっっちゃけウザい。

あんた精神年齢が追いついてんのか、という怒涛の感想を押し殺し、言葉を返す。

「僕に関わる事なら教えて下さい」

「なら教えよう」「いや、早いよ。

もうちょい粘れよ。」

コロリと、という形容がぴったりくる変わり身だった。肩透かしである。

「あんたさんの名前じゃ。考えてみた」

「えっ……ああはい」

思っていたより重い内容。

慌てて居住まいを正す。といっても、怪我人の身であるためあまり正す要素は無かったが。

居住まいを正したところで、神楽さんのお言葉。

「要<sup>かなめ</sup>、でどうじゃ？」

「要……要点の要……能力が由来ですか……………」

「まあ、 “ 本質 ” の類義語を漁ったら浮かんだ。どうじゃ、好かんか？」

「いえ、良い名だと思いますよ」

「他人事みたいに言うなや」

ぺしっ、と、漫才師のようなツッコミを頂いた。

結論。

姓の方は置いといて。

名前：要。

幻想郷の命名法がどんなものかは知らないが、悪くない名前だと素直に思う。

「ありがとうございます。神楽さん」

本心から頭を下げる。右半身が上手く動かせないのが、少々不格好だが、致し方ない。

「いやなに、やはり名がないとどうにも不便じゃしの。ちと安直

すぎるかと思っただが、本当に良いか？」

「むしろそのくらいが良いんじゃないですか？」

そう返すと、神楽さんは満足そうに微笑みながら畳に腰を下ろし、黙って手を差し出す。

それに応えるかのように僕も左手を伸ばす。二つの手が二人の間で繋がるうとした、  
刹那。

「あらっ？」

すっ、と動いた神楽さんの左手が、僕の左手首を捕まえ、ぐいつと引き寄せた。

「ほっそいのう……」

「ほっとして下さい」

神楽さんの感想にそう言い返すと貧弱な腕があっさり解放される。

「何がしたかったんですか？」

「いやあ、ノリかの？」

「……疑問形に疑問形で答えられても  
やっぱりこの人、精神年齢が追いついてねえだろ。」

そんな僕の感想をよそに、屈託のない笑みを浮かべながら、再度神楽さんは立ち上がる。

「それでは、ゆるりと休み。要」  
「ええと、何はともあれお休みなさい」  
今の僕は至極微妙な表情なんだろうなあ、とか思いつつ、挨拶。  
ACはお帰り下さい。

神楽さんが燭台の明かりを消し、完全に暗くなった部屋から出て行くと、僕はゆっくりと上体を布団の上へと倒す。

再び、照明器具の無い天井。  
だんだんと目が暗闇に慣れてくる。  
とは言っても、目を閉じているのと大差ない明るさである。

そんな中、どうでもよい思考を口に出す。

「要、ねえ。……………女っぽい名前だな」  
阿良々木暦といい勝負である。

かと言って、嫌いかと言う訳ではない。

この幻想郷で初めて他人から貰ったものだ。  
まあ、呉れたのは妖怪だが。

益体も無いことを考えていると、ふと、口の中に異物を見つけた。

舌に載せて、それがなにやらえげつない味を発する薬品だと理解した僕は、速やかに唾液をかき集め、それをのどの奥へと押し流す。

彼女に明朝、さっきの腕の件の仕返しでもしてやろうかと、これまた益体も無い考えを巡らせながら。

其之参・妖怪の邸、能力と名の件（後書き）

はい。オリキャラで御座います。

キャラクターとしては、爺言葉を喋るおねーさんの外見を念頭に置いておりますが、まあ、良くも悪くも東方キャラらしく、お堅い表面がわずかに剥がれると途端に幼くなります。

ええ、年齢詐称です。

さて、次回はようやく原作キャラクター本格登場の予定です。

更新速度は更に遅くなりますが、柏餅でも食べながらまったりとお待ち下さい。

待ってもらえるうちが花ってね。（ボソッ

其之肆・ 迷いの竹林、診察と弾幕の件

「それじゃあ、ちょっとくら行つてきます」

「うむ、氣い付けての」

そう言葉を交わすと、僕は玄関の敷居を跨いで幣文邸の外へと踏み出した。

天気は晴れ。日は照っているものの流石に寒い。

なぜならば今は2月の頭。山奥に位置するここ幻想郷は、同然のごとく辺り一面雪化粧である。

神楽さんが引つ張り出してきた綿入れの着物に身を包み、更にも上から羽織りを着ているが、尚も寒い。特に足まわりが。

右腕を支える三角巾を調節しながら、なかなかの厚さに降り積もった雪のうえをゆっくりと進んでゆく。

雪が降り続いていたお陰で、幻想入り後8日目にしてようやくの初外出と相成った。その間のほとんどの時間を過ごしていた布団の上から離れたことで、自然と気持ちも高揚してくる。

布団の上とはいっても、別にNEET三昧だったとかそういう意味ではなく、ひとえに右腕の治療に専念していただけだ。

薬師から処方されたという薬の効果は抜群で、幣文邸で目覚めたときにはほんの少し身じろぎしただけでビリビリとした痛みが右腕を走り抜けたていたが、それから五日が経過した今日には、三角巾で吊り下げながらもある程度は体が動かせるまでに回復した。

正直信じられない効用である。

なにせ右腕の肘から先が丸ごと咬み千切られたのだ。

外の世界の治療ならば、ここまで回復するまでに月単位、もしかしたら年単位の時間がかかっただろう。

さて、ある程度回復したとはいえ、病み上がりならぬ怪我上がりの身であることには変わらない僕が、何故屋外を出歩いているのかと言つと、その薬師 八意永琳さんと言つらしい の診察を受けに行く途中なのである。

目指すは迷いの竹林。その奥深くに、薬師・八意永琳の居る永遠亭はあるという。

<sup>Aれる</sup>迷いの竹林というだけあって、内部で迷つと良い感じに<sub>o</sub> (^ ^ ) /らしく、その点を考慮して神楽さんは案内役を待機させてくれているらしい。

幣文邸そのものも、竹林からそう離れていないところに立地しているため、実質一人で歩き回る時間はそう長くはないはずだ。

肝心の竹林に入る前に迷いでもしない限り問題無いはずであり。その竹林までの道というのも、全くと言って良いほど分岐のない道であり、むしろ迷う原因を見つけるのに苦労しそうな感じだった。

これで迷つたらもう確実に心が折れるね。  
いろんな意味で。



……フラグじゃ無いよ？

さくさくざくざくと、軽快な音を立てて、履き慣れたスニーカーで新雪の表面に靴跡を穿つてゆく。

ちなみにこのスニーカー、もともと外の世界で学ラン制服に合わせて買ったものなので、基本色は黒。

雪の白色とあいまって、現時点では視覚的に良さげな感じがするが、春になればただのシケた靴に成り下がりそうな気がする。まあ、ファッションにはそれ程こだわりは無いので特に気にするほどのものでも無いのだが。

うー寒々、と、爺臭いコメントを一人垂れ流しつつ歩くこと、ものの五分ちょい。

積もった雪の下は田畑であろう白一色の平原を見下ろしながら、若干の高台にあたるあぜ道をひたすら道なりに進むと、枝の所々に雪を湛えた竹林が現れた。

「雪の白色と青竹色がいい仕事してますねえ」

………某鑑定士のノリで言ってみたらチョイスをミスった感が予想以上。

自分でもこの選択は無いと、言った後になって認識。  
こりゃいかん。

落葉した木と雪しか無い、良く言えば自然的、悪く言えば殺風景

な光景ばかりが目映っていたため、それに比べれば色合い的にはなかなか良さに思えたのは事実なのだ。

さて、そんなことを考えながらも足は進むもので。

竹林の周りをなぞるように歩いていると、それまで一本だった道が分かれ、片方の道はそのまま真っ直ぐ、もう一方は竹林の中へと続いていった。

神楽さん曰わく真っ直ぐいけば人里に出られるらしいが、今の目的地はそっちではないので、迷わず竹林の中へと続く道を進む。

竹林というだけあって、一歩中に入れば周囲360度、竹、竹、竹である。中はやはりと言うべきか、薄暗い。

魔法の森でのこともあるので、万一に備え、地味に気を引き締める。

もつとも、手負い状態の僕が出来ることなどタカが知れているが。

ノリ的にはお化け屋敷に入った時みたいな感じである。

驚かされに入っているくせに、こう、驚かされないように無駄に神経尖らせると言うか、無駄な抵抗を試みる人間は僕だけじゃない筈だ。

決して襲われることが目的ではないですよ。そこまでmasoc histではありません。

と、無数の竹が乱立する中に、白いものを見かけた。

白いものとはいつでも雪ではない。

竹のカーテンの隙間からちらちらと見え隠れするそれに近づいてゆく。

結論から言えば、白いものの正体は一人の少女　の頭髪だった。

腰のあたりまで伸びた白く長い髪。

同色の上衣と、それと対照的な緋色の和製ズボン　もんぺと言

う奴か　に身を包み。

けだるそうな表情で太めの竹にもたれ掛かっている。

どうでもいいけど、かなりの美少女。

少女に注目すると、神楽さんが使っているのと同系列の、されど明らかに匂いの異なる力が“視えた”。

まあ、見るからに妖力の火の玉である。

神楽さんにあらかじめ聞いていた通りの姿。

僕が竹の合間を縫って十メートルほどの距離まで歩み寄ったあたりで少女もこちらに気づいたようで、つ、と顔を上げた。

「すみません……貴女が、藤原妹紅さん？」

寒さのため、左手でわずかに羽織の襟元の部分を引き寄せながら、声を掛ける。

若干たどたどしさが混じりそうだったが、とりあえず何とかな

た。  
決して三次元経験値リアルが少ない訳じゃありませんよええそうですとも。

本当のところ……低いです。はい。リア充とは間逆のベクトルで

あります。

「そうだけど……君は？」

「永遠亭までの道案内をお願いした、あやなし文成 かなめ要です」

僕の答えに妹紅さんは、ああ、という表情を浮かべた後、

「……なんだ、男か」

「僕は女じゃない!!」

まさか幻想郷に来てカミィユ・ビダンの迷台詞を言うことになる  
とは思ひもしなかった僕であった。

十

「さつきはごめん。失礼なことを言ったわ」

「僕の方も、大声上げてすいません」

出才手感がぶんぶん漂う邂逅の後、何はともあれお互いに詫びた

僕と妹紅さんは、一路、迷いの竹林の奥へと歩みを進めていた。

斜め前を歩く妹紅さんの後を、若干間を開けてついて行く。はぐれでもしたら一大事なので、自然と気も引き締まる。

どうでもいいけど、この年代の男女が二人つきりでこんなロケーションをうるついているというのは、どこことなく犯罪臭がする。

前に行く妹紅さんの背丈は、僕の肩くらい。

見た感じ女子中高生あたりに見えるが、実際の所は僕など足元にも及ばない年　もとい“キャリア”の持ち主であるらしい。

若い衝動を暴発させぬように。一瞬で灰にされたく無ければの、との有り難い注釈も受けている。

流石にせっかく拾った命をドブに捨てるような真似はしたくない。

あれ？

気を引き締めているのに益体もない思考だけは浮かんでくるのは何故？

「……………それにしても、迷いの竹林という名前は伊達じゃないですね」

「そう思う？」

「どこを見ても竹ばっかりで視覚的にストレスがかかるし、霧が濃くて更に先が見えにくい。これなら迷うのも同然です」

視界は良くて十メートルほどだろうか。竹林に足を踏み入れてすぐの時点ではそれほどのものでもなかった霧は、奥に進むにつれて体にまとわりつくほどの濃厚さになっていた。

「おまけに微妙に地面が傾斜しているもんだから、気をつけないと真っ直ぐ歩いているつもりでも、おかしな方向に進んでしまいうな……」

「それ、誰かに聞いたの？」

「いや、なんとなく傾いてるな、と」

こちらを振り返りながら訊く妹紅さんに答えると、彼女は少々驚いた様子で言った。

「普通の人間じゃ分からないぐらい微かな傾きなのに、よく気付いたわね」

「ええ……これも能力なんでしょうかねえ？」

そんな僕の言葉に、疑問形で言われても……と、一転して呆れた表情を浮かべる妹紅さん。

「まだ自分の能力がどんなものか、イマイチ釈然としないんです」

言い訳のように言い添え、体を包み込んでくる霧に注意しながら妹紅さんの背中を追った。

さて。

話は変わるが、ここで僕の名前について。

あやなし  
かなめ  
文成 要。

幻想入りの過程において、どういう理屈か忘却の彼方に吹っ飛んでしまった旧名の代わりに名乗ることになった、僕の新たな名前である。

命の恩人（妖怪だが）たる幣文神楽さんの姓から“文”の一字をもらい、何か使えるものはないかと、僕とともに幻想入りしてきた革靴の中身を漁って見つけたのは英単語集。その見返し部分に書かれていた円で囲まれた“成”の字を、外の世界での名の一部だろうとアタリを付け、新名称にも使うことにした。

で、姓：文成。

名の方は、僕的能力から神楽さんが連想ゲームっぽく付けた、“要”。これといって嫌がる理由もなかったので、そのまま名前に採用した。

考えて見れば、これである女妖怪は僕の名付け親となったわけでありまして。

何から何まで本当に頭が上がらない。

ちなみに、名前を正式に決めたのは今から3日程前の事なので、まだあまり名前そのものに慣れていなかったりするが、適当に生活していれば何とかなるだろう。

慣れていかなくはならないものといえば、もう一つ。

「『本質を操る程度の能力』ね。面白そうな能力なこと」  
「ま、操れるレベルには程遠いですが……」

要という名前の由来となった、『本質を操る程度の能力』であるが、具体的に何ができるのかはほとんど分かっていない。

そもそも“本質”というワードからして漠然としたものなので、更に能力の意味が分からないのだ。

現時点で出来る（と思われる）のは、感覚器官の向上。

といっても、例の“非物質的な力が見える”という事を除けば、視力が上がったたり、超音波が聞こえたり、嗅覚が鋭くなったり、などの即物的な強化は今のところない。あくまでも人間が普通に知覚できる範囲のものに敏感になった、ということか。

普段ならば確実に見逃しているような細かいものに目がいくようになった、だとか。具体的な変化としてはそんなものである。

地面の傾斜も、竹の生え方だとか、その辺から推察したのだろう。

他人ごとのような言い回しで申し訳無いが、受けた視覚情報から推察を導き出すまでの間に具体的な因果関係が無いように思えて、どうにも心地が悪いのだ。

言ってみれば、自転車に一切乗ったことも、乗る練習もしたことが無いにも関わらず、ウィリーをやるのに必要な感覚が分かっているような、そんな感じだ。

だって、ねえ。

得体の知れないものに対する不快感ってものは少なからず有るわけ。



場合によってはそれが好ましい事ではないのも分かつちや居るが。

そんな心地の悪さも理由にあるのか、五感のうち最も能力が開花している視覚以外は、ほとんど全くと言って良いほどただの人レベルに留まっている。

よって、現時点の僕の能力はほぼ『本質を視る程度の能力』とい  
って差し支えない。

なんだかゲームの体験版みたいである。

注意

この能力は体験版です。

製品版とは一部仕様が異なる場合があります。

なんちゃって。

能力の製品版で。

ちなみに、神楽さんには、気長に修行すればよかる、と、慰めて  
いるやら諦めているやらよく分からない言葉をかけていただいた。  
前者なら嬉しいが後者なら……やりきれない。

「ところで妹紅さん」

「なに？」

「能力って、幻想郷の人間や妖怪はみんな持つてるものなんです

か？」

ひたすら竹林の奥を目指して歩きながら、ふと疑問に思ったことを訊ねた。

「全員が全員、と言うわけでは無いわ。人間より妖怪の方が発現している割合が多いけれど、それでも能力持ちはそこまで多くはないわね」

前を向いたまま、妹紅さんは応える。

「……貴女も能力を？」

「ええ」

「どんな能力か、は……訊かない方が良いですか？」

「そうしてくれると、ありがたいわね」

案の定、妹紅さんはそう応えた。

相手のことを根掘り葉掘り訊ねるのは、さすがに良い気がしないし、マナー違反であろう。

この話題はここのまで。

「着いたわ。永遠亭よ」

それからしばらく歩き続けたところで、ふと妹紅さんの示す方を見ると、竹林そのものに溶け込むようにしてひっそりと佇む建造物が。

左腕の時計を確認すると、竹林に足を踏み入れてから二時間ほど

が経過していた。

建物の近くに寄ってみると、全体はかなりデカイ。お屋敷レベルの日本家屋であるが、その大きさに反してうまい具合に周囲の竹林に溶け込んでいる。

「失礼するわ」

コンコン、と扉を叩くと、妹紅さんは返答を待たずに扉を開けて中に入ってゆく。

良いのかなあ、と、しばし逡巡したが、ここで一人残っていてもどうしようもないので、ひとまずは中に入る。

「うわあ……」

扉の向こうの光景に、思わず声が漏れた。

日本家屋然とした内装の玄関。奥へと続く板張りの廊下。

それは良い。

問題はそのあちこちに転がる白い毛皮を被った小動物。

兎である。

それも一匹二匹ではない。

一面の、とか、累々たる、とか、足の踏み場もないほどの、とか。そんな形容がぴったりくる物量。

何なんだここは？ 動物病院の間違いじゃないか？

随分人に慣れていているらしい兎たちは、足下に群がっては人の顔を見上げてきたり匂いを嗅いできたり。

それ自体はめちゃくちゃ可愛い。

しかしここまで囲まれると逆に鬱陶しくもある。

一方隣の妹紅さんの方を見やると、その体を中心とした直径一メートルほどの円形の範囲はぽっかりと穴が空いたように兎たちの集団が途切れている。

もの見事に避けられていた。

結界でも張っているみたいな感じ。まあ、実際のところ結界なんてものを見たことは無いので、ノリで言ってみただけである。

ふと、一匹の兎がクレーターのようには開けた領域に踏み込む。

妹紅さんが一睨みすると、兎はわたわたと円内を飛び出し、仲間集団の中へと体をうずめた。

この人、体から何か出してるのか？

どうにかしてください、と、無言の視線を向けるが、妹紅さんは曖昧な微笑みを向けるだけ。

「どなたですか……あら、妹紅」

どうしたものか途方に暮れていたところで、ようやく家人と思われる人影が現れた。

否。“人”影ではなかった。

紺のブレザーに灰色のプリーツスカートという、なんだか外にあるどこかの学校の制服みたいな格好の

「でっ、出たー!!」

あえて言うならば、頭から二本のウサ耳を生やした人間型の何か。

「……………えと……………私の顔に何か付いてる？」

瞠目する僕に、若干たじろいだ様子で訊ねるウサ耳少女。首を傾げると、頭のウサ耳も連動してふらふら揺れる。

図らずも、ウサ耳を凝視したために能力発動。

例によって理屈は知らないが、彼女の耳がコスプレの類でないことは判った。

きちんと生命力つばいものが通っていたのである。やべえ本物だ。

「鈴仙、彼は外来人」

「あ……なるほど。それなら驚くのも無理無いわね」

ポンと手を打つウサ耳少女。

「鈴仙・優曇華院・イナバよ。兎の妖怪みたいなもの、と思ってくれば良いわ」

厳密にはちがうけどね、と言い添えつつ、脳内漢字変換の追いつきそうにない自己紹介をする。

はあ……と、曖昧な返事を返すことしかできない。

冷戦・うどんげいん・因幡？

コールドウオー？ ソ連邦は崩壊したから幻想入りしたのかね？ いやまさか。

「それで、貴方は診察希望者？」

「見れば分かるでしょ。永琳は居るの？」

僕の代わりに妹紅さんが応える。

「師匠なら奥に」

「なら、後はよろしくね」

言うが早いか、妹紅さんはそそくさと背後の玄関の戸を開けて外へと出て行った。

「な……え、ちよつ　！」

足元を兎たちに囲まれて身動きが出来ない状態のまま、為す術もなく玄関を出てゆく妹紅さんを見送るしかない。

いや、どうしろと言うのだ……？

「彼女なら大丈夫よ。外で待っているはずだから。いつもの事よ」  
レイセンさんの言葉に、不安に思いつつも前へと向き直る。

「それより、そんな所で突っ立っていないで、どうぞ上がって」  
「いやあ、身動きが取れんですよ……」

「え？……こら、あなた達離れなさい」  
僕が言うと、僕の足元を包み込んでいた兎たちに気づいて一喝するレイセンさん。

兎たちは従順にも速やかに僕の足元から距離を取った。

「ええと……それじゃあ、失礼して」

靴を脱ぎ、板張りの床に足を付ける。

靴を揃えて立ち上がると、レイセンさんは、付いて来て、と僕を促した。

長い板張りの廊下を、後に続いて進む。

内装は基本的に和風。廊下の脇には閉じられた襖が並んでいる。その光景から、ふと、田舎の祖父母の家を思い出した。

祖父の家に入った一番古い記憶は、確か三歳ぐらいの時のこと。古き良き日本家屋の丁度中心にあたる位置を、さながら背骨のようにまっすぐ貫いていた長い廊下。それがなんだか無性に恐ろしかったのを覚えている。

もちろん、それから十年以上の月日がたった今となってはそんな恐怖心など欠片も残っちゃいない。しかし、ここが見知らぬ場所であるということを考えれば、自ずとそんな記憶も蘇ってくるのである。

廊下を進んだ先の奥の方の部屋。確かそこにあったのが祖父の部屋だったか。

ちなみにその部屋、祖父母の家唯一の洋室であった。

僕に剣道を教え込んだ張本人である祖父の部屋は、その主の厳格さも手伝って、幼い僕にとってみれば文字通り“開かずの間”のように思えたのだろう。確か六歳ぐらいまで中に入ろうと近づいた事は無かったはずだ。

そして、その六歳ぐらいの夏の日。主が留守にしている時を見計らって、当時の僕からすれば並々ならぬ勇氣を持って、その“開かずの間”の扉を開けた。

結果から言えば、好奇心にはそれ相応の対価という物が支払われるわけでありまして。

何があったのかというと、そろりと開けた扉の隙間の向こうから、得体の知れない仮面が僕の方を睨みつけていたのである。

当然のごとく、とんでもなくビビった幼き日の僕は、物凄い勢いで扉を閉め直し、長い廊下を走って一目散に逃げた。

まあ、逃げたからと言ってどうなるわけでもない。

仮面を見ていたのはほんの数秒程度のことであるにも関わらず、その表情というか、顔つきというか、そこら辺がいつまで経っても網膜に焼きついたかのように忘れられなかった記憶がある。

確か夢にまで出てこなかったか？

種明かしをすれば、その仮面は熱帯地域のどこかの部族が呪術の道具としていたもので、民俗学の研究者をしていた祖父のコレクションだったのだそう。

つい最近、祖父の部屋にまともに入った時に祖父に直接訊いて、初めて判ったことだ。

そんな回想と共に、板張りの廊下を進む。

永遠亭の長い廊下が左に折れたところで、レイセンさんは立ち止まった。

その前にあるのは襖ではなく、扉。

扉 即ち洋室。おっとどっこい。デジャヴである。

まあ、流石にあの時のようにはならないだろうが。

コンコン、と、扉をノックするレイセンさん。どうぞ、と、中から返答があるのを待って彼女はドアノブに手を掛ける。

「失礼します」



一声掛けてから扉を開け、部屋の中に入るレイセンさん。その後  
に続いて僕も部屋へ足を踏み入れる。

部屋は白を基調とした内装。診療用であろうベッドが一床、部屋の  
右側の壁に接するように据えられている。

向かって部屋の左奥には、辞書サイズの厚みの本がぎっしりと詰  
まった本棚。

正面奥には 黒檀ひきだしだろうか 黒の木机が鎮座し、その上には  
これまた大量の本と、抽斗ひきだしだらけの小箆筥。

そして、机の前に置かれた椅子に腰掛けている一人の女性。

「貴方は この前の腕の子ね。どうぞ、掛けて頂戴」

「は、はい。失礼します」

腕の子で……。

何はともあれ示された丸椅子に腰掛け、人物観察。

柔らかな微笑みを浮かべる一方で、確かな知性を伺わせる整った顔  
立ち。

背中に流れる長い銀髪は一本の三つ編みに纏められ、赤と青の装  
束に身を包んでいる。よく見てみると、原型はナース服である。

そしてなかなかの美人さん。(ここ重要。

ちなみにウサ耳の件の驚きですっかり忘れていたが、レイセンさ  
んもかなり整った顔立ちである。師弟揃って……。

美人率高いなあ、幻想郷。

「一週間ぶり　と言っても貴方は眠っていたから、はじめましての方が正しいかしらね」

「声だけなら聞いた覚えが有りますが……」

僕がそう言うと、女性はふふ、と笑い。

「八意永琳よ。貴方の右腕の処置をさせて貰ったわ」

「……お世話になってます。文成要です　あ痛」

握手の為に右手を出そうとして、チクリと肘に痛みが走る。

「あらあら、それじゃあ早速診てみましょう。……うごんげ」

「はい」

八意先生（見るからに医者っぽいのでこの呼称に。）の言葉に、脇に控えていたレイセンさんが僕の背後に回り、首の後ろにある三角巾の結び目を解く。

三角巾の下から現れたのは、手首から二の腕あたりまで包帯に覆われた右腕。　左手で肘の辺りを支えながら差し出すと、八意先生の白魚のような指が、白い包帯をすすると巻き取ってゆく。

包帯が肘の辺りまで外されたところで、その下の傷口の様相を想像し、思わずゴクリと唾を呑んだが、

「……くっついてる?!」

「あら、予想外だったかしら？」

「予想外も何も、……こんなに短い時間でここまで……」

包帯の下のガーゼを外してみると、何てことはない。ただ肘の辺りの皮膚をぐるりと白い輪っか状の傷痕きずあとが取り巻いているだけだ。血の滲みすら欠片もない。

「ゆっくり腕を曲げて」

声に従って、丁度力こぶを作るときのように腕を曲げてゆく。

「痛むかしら？」

「少しだけ」

成長痛に似た痛みが走るが、動かせない程の物ではない。

「腕を戻して。手を手のひらを上にして開いて」

言われるがままに手のひらを出すと、八意先生は人差し指の爪を僕の親指に軽く押し当てる。

「痛みや痺れは？」

「いえ、圧迫感だけです」

引き続き、人差し指、中指と、五指全てにおいて同じようなやり取りが続いた。

「じゃあ、最後に指を一本ずつ握って行って」

数を数えるように親指から一本ずつ折ってゆき、

「開いて」

小指から順に伸ばす。

「経過は良好そうね。あと一週間は、今まで通り投薬治療を続けましょう。それまで腕は吊ったままで居なさい」

満足そうに微笑みながら告げる八意先生。

「はい。それにしても……」

「何か？」

「あ、いや、大したことじゃ。良薬は何とやらだなあ、と、しみじみ感じた所です」

驚きを隠せぬまま、思う。

本当に良く言ったものである。ことわざを作った先人たちには是非とも敬意を表したいものだ。

服用した薬の中でもワースト3確定レベルの味。しかし効果はダントツ。

「ふふふ。蜥蜴とかけの妖獣が肉体再生に使う原理を応用して作った薬なのよ」

「それは……ある朝起きてみたら右手が鱗で覆われていた……なんてことにはなりませんよね」

「……実はそこが一番の副作用なの」

「嘘でしょう!?!」

「ええ。嘘よ」

ビビった。いやもうマジで。瞬間的という意味では祖父の部屋の  
仮面の一件よりもビビったかも知れない。冗談抜きで。

「さて、カナメ君と言ったわね」

「はい。作文の文、成長の成に、要点の要、で文成要です」

「文成……要、ね。投薬7日、経過観察……と」

机に向かい、カルテと思しき紙に書き付けてゆく八意先生。  
そこでふと、思い至る。

「あの……すみません、先生？」

「あら、先生とはこれまたご丁寧に……何かしら？」

カルテを書き終えたらしく、再びこちらに向き直る彼女に対し、  
僕は口ごもりながら話し出した。

「……治療費はどうしましょうか。諸事情あってオケラなので  
が……」

「代金なら構わないわ」

さらに、と、言つてのける薬師・八意永琳。

「いや、払わない訳には行きませんかでしょ」

「かと言つてすぐ払える訳では無いでしょう？ それに貴方は外  
来人なのだから、治り次第“外”へ帰つてしまうはず」

「その点は大丈夫です。今のところ帰る気はありません」

考えは変わっていない。

端から見れば、ひねくれているだけなのかも知れない。しかし、

僕はあちらでの生活を投げ出したも同然なのである。

言うなれば家と縁を切つて飛び出してきた勘当息子と同じようなものか。

「……言い切つたわね。そこまで考えているのなら、受け取る事にするわ。特に返済期限は決めません。その代わり、全額きつちりとね」

「はい。必ずお支払いします」

お金の受け渡しに関しては、はっきりさせておきたいのである。それを疎かにした事によって失うものが有ることを、知っているから。

二の舞は、御免だ。

「それはそうと、要君」

「はい」

「これから先、衣食住はどうするの？」

「かぐ……幣文さんの所にしばらく置いて頂けると言うことなので、当面はお世話になるうかと」

もちろんタダでという訳はない。家事の手伝いやら何やら、やれることはやるつもりである。

「アテはあるのね。それならば、私から他に言うことは……あ、強いて言えば」

言つて、先生は僕の手首の辺りの皮膚をつまみ、

「もう少し肉をつけなさい」

「……薄々予想はしてましたけどやっぱりそう来ますか」

自分で言うのもなんだが、僕は根本的に貧弱な体格である。具体的に言えばBMIにしてようやく18に乗るか乗らないか。

哀しいかな、つい去年、面倒くさがって夏休み中に髪を伸ばしっぱなしにしていたら、女子に間違われたという伝説をもつ。人並みに運動はしているのだがあまり身体に反映されて来ないらしい。

どうしてこうなった。

「初めに診たときは女の子かと思ったわ」

「そこまでひ弱に見えますか……」

前言撤回。

記録が更新されました。

誠にシヨックである。

「まあ、それについてはおいおい何とかしていくという方向で」「それが良いわね。……さて、何か気になる事があったら、すぐにまたここに来ること。今日はこれで診察終了」

「はい。それでは」

お世話になりました、と、言いかけた僕の言葉が、発せられることはなかった。

丸椅子から立ち上がりかけた瞬間、ゆさゆさと永遠亭そのものが揺さぶられたのだ。

震度にして3ぐらい。揺れそのものはすぐに収まった。

ぱたぱたと、足音がして、振り向くとレイセンさんが部屋から廊下へと出て行くところだった。

バランスを危うく崩しかけながらも、何とか再び椅子に腰を落ち

着かせる。

「地震でしょうか……?」

三角巾で右腕を包み直しながら訊くと、先生は、おそらく違いわ、と、僕の考えを否定した。

「念の為訊いておくけれど、要君、ここへはどうやって?」

「藤原妹紅さんに案内を。ですけど、中には入らずに外で待っているはずです」

僕が答えると、やれやれ、といった表情を浮かべる八意先生。

「……………八割方間違いないわね」

「何がです?」

僕の問いかけに覆い被さるように、映画やアニメの中でしか聴いたことのないような、凄まじい爆発音が立て続けに響く。

「あの……………師匠、姫様が」

「……………その様子だと九分九厘、間違いないわね」

緊張した面持ちで部屋に入ってきたレイセンさんを見て、先生は額に手を当てつつ嘆息する。

窓から外を眺める、と、その向こうに見える竹の集団のてっぺん付近に、直径一メートル前後の“火球”が激突するのが見えた。

おい。ちょっと待て、直撃した辺りガチで燃えてるんだが大丈夫



か？

……それ以前に

「何なんですかさっきの火の玉は！？」

「精神的ストレスによる幻覚……と言いたいところだけれども、生憎そういう訳にも行かないわね」

そう言いつつ、先生は椅子から立ち上がり、ふふん、と、小さな笑みを見せながら告げた。

「そうね。ここに残るのだから、どうせなら見に行かない？ 後学のために」

「はあ、……後学、ですか……」

ならばと、言葉に従い、部屋を出て先生とその後ろに付いて進むレイセンさんの後を追って歩く。

途中、ガコン、という衝撃音と共に、永遠亭を何度目かの激しい揺れが襲った。

さながらカーブに差し掛かった満員電車の中にも放り込まれたような振動に、バランスを取ることもできずに盛大によるける。

「うわっ、と……とっ！」

「ひゃあっ！ー！」

そして支えを求めて中空をさまよった僕の左手が掴んだのは、レイセンさんの肩。

「す、すみません……」

「……大丈夫、少し驚いただけですから、っ」

左手をレイセンさんの肩から離れたところで、間髪入れずに再びの振動。

さすがに今度は廊下の壁に背中を預けて身体を支える。が、今度は逆にレイセンさんが僕の方へと倒れ込んできた。

「っ」

倒れ込んできたレイセンさんの背中に、三角巾で吊った右腕が挟まれ、にわかに走る鈍痛に顔をしかめる。

「あ、ご、ごめんなさい。大丈夫ですか!？」

「大丈夫です。この位、どうという事は無いです」

実はそれなりに痛かったのだが、何も言うまい。レディーに心配をかけては男として失格だろう。

そこ、見栄張って悪いか。

「今日は随分と派手にやっているわね……」

謝ったり謝られたりしている僕とレイセンさんをよそに、八意先生は独りごちる。

「今日は、って……いつもこんな事が有るんですか!？」

「いつも、という訳では無いのだけれどね……」

時折巻き起こる揺れに用心しつつ、八意先生の後について、いくつもある部屋の内の一つへと足を踏み入れる。

念の為下がっていて、というお言葉に従い、部屋の上座側の壁に

身を寄せ、待機。

レイセンさんが縁側に繋がる障子戸を引き開ける。

「かあああああぐやあああああ！！」

開いた障子戸の向こうから飛び込んできたのは、つい先ほど耳にした女性の叫び声。

というか、藤原妹紅さんの絶叫。

「もこおおおおおおおおお！！」

それに応えるように、もう一つの絶叫。

叫びが交わされた次の瞬間、障子戸の向こうに見える風景が、赤、青、黄、緑、白、色とりどりの光弾によって埋め尽くされた。

光弾どうしがぶつかり合うごとに、ごう、と、空気が震え、腹に響く爆発音が轟く。

その莫大な光の渦の中に佇むのは二人の少女。

一人は色素の抜けた白髪、白い上衣と火焰のような紅のもんぺに身を包む少女。

永遠亭への案内人こと、藤原妹紅さん。

その妹紅さんと相對する位置にいるのは、長い黒髪、桃色の衣と蘇芳色の袴を纏った少女。

少女たちの周囲からは間断なく光弾が放たれ、さながら白昼の空に銀河が現れたかのような様相を呈している。

「……………な、八意先生、これは一体！？」

目の前で繰り広げられる光の乱舞に啞然としながら訊くと、先生は至極こともなげな様子で答えた。

「弾幕ごっこ」よ

「弾幕……ごっこ……あれが、ですか？」

「ええ。その言い方だと、多少は知っているようね」

「ええ。幣文さんから、ちょこつとだけ聞きましたか……」

曰わく、

人間と妖怪が共存する幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段であると。人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールであると。（ここ注目

だがしかし、

「それにしただってオーバースペック過ぎるんじゃないありませんか！？」

「いつもの事よ。それに、弾幕に当たってもそこまで手酷いダメージを負う訳ではないし」

当たりどころが悪ければ話は別だけでもね、と、空恐ろしいことを付け加えつつ、空を飛び交う無数の光弾を眺める八意先生。

視界を埋め尽くさんばかりの弾幕に意識を集中、能力発動。

火の様式の強い妹紅さんの弾幕に対し、相対する黒髪の少女の弾幕は若干毛色が違うように見える。まあ、具体的にどこがどうと訊かれても答えられないのだが。

「そういえば、妹紅さんの相手をしている方は？」

「あの方はこの永遠亭の主。蓬萊山輝夜様よ」

主、つまり姫様というのはそう言うことか。

「……えと、お二人は一体いかような理由で弾幕戦を？」

「……色々あるのよ。色々……むしろどろどろ？」

「それは……深く突っ込まないでおきます」

まあ、当人たちにも訳が有るのだろう。

あれだけの調子で弾幕をぶつけ合えるだけの何かが。

「しかし師匠、この様子ではこの建物にも被害が出そうですよ？」

「確かに、そろそろ仲裁に入った方が良いかしらね。……鈴仙、

よろしく」

「やっぱり私ですか……」

「何か？」

「い、いえいえ何でもありません……」

渋い顔をしながらもレイセンさんは縁側に立ち、叫ぶ。

「お二方共、ちょっとストップ！！ 一時休戦して下さい！！」

返答は素早い。

「うるさい！！」

「下がってなさい！！」

言葉と共に、二人分の弾幕が放たれ、レイセンさんに殺到。

「だから嫌だったんで」

半ば悲鳴にも似たボイスは、紅の楔形弾と色とりどりの丸弾の衝

撃音と爆発音にかき消されて最後まで聞き取れなかった。  
というか、

「うわわわわっつツツツ」  
聞き取れたとしても聞いている暇は無かった。

レイセンさんに向けて八つ当たり気味に放たれた弾幕が、地面やら床やらに跳ね返って部屋の中にまで飛び込んで来たのである。  
慌てて幅跳びの要領で後ろに跳び、畳二枚分程の距離を稼ぐ。

部屋の入り口の襖に背をつけるような位置まで下がり、片膝を立てた状態で一息つこうとすると、

「まだ来るのかよ!!」

爆炎を突き破って尚も飛び出してくる妖力弾。弾速が若干遅くなっているのがせめてもの救いか。

計三発の丸弾に意識を集中。能力発動。

「つ、つとお」

弾道をおおざっぱに“予想”し、とっさに畳の上に身を伏せる。

バチバチバチツ、

という激しいかすり音。<sup>グレイズ</sup>ついでに髪の毛が一房持つて行かれた。

その後が続いてバスン、と、板を踏み抜いたような異音が自分のすぐ後ろで響く。

振り返ると、無惨にも大穴が3つ穿たれた襖。当然これでは最早使い物にならないだろう。

「襖は犠牲になったのだ……」

じゃなくて、

「……先生、そちらは無事ですか？」

「私としては貴方のほうが無事なのか訊きたいわね」

立ち込めていた煙が薄れた先から、レイセンさんの首根っ子を掴んでいる八意先生の姿が現れる。

ちなみに、服があちこち破れてなかなかキワドイ格好のまま、ぐったりと伸びている彼女とは対照的に、全くの無傷。

「レイセンさんは？」

「この子なら大丈夫。気を失っているだけよ。貴方のほうは？  
新しく傷をこしらえたりしていない？」

「何とか、腕は繋がったままです」

「それは重畳。そういえば、なかなか上手い回避だったわよ」

「それは、……ありがとうございます」

言いながら、僕は左腕を着物の袖の袋状になった部分 袂 に差し込んで、その中に仕舞っておいたモノを引っ張り出す。

逆手に握り、抜き出したのは一振りの木刀。それも全長四十センチほどの小木刀だ。

念の為言っておくが、別にコレを使って狼藉を働くとか、そういう目的のためのモノではない。

まあ、当初の目的と異なるのは事実なのだが、念の為に。

「これで最後 食らいなさい！」

「残念ね 墜ちるのはそっちよー！」

一方、こちらの状況など完全にお構いなしで、上空での弾幕戦はクライマックスを迎えている様子。

そんな言葉を互いに交わしながら、二人の少女はそれぞれカードのようなものを取り出し、相手に向けて突きつける。

「スペルカードよ」

「スペル……カード？」

「自分の得意技を記したお札を『スペルカード』と言って、試合開始の時点で所持していたすべてのカードが相手に攻略された場合は負けとなるの。決闘の美しさに意味を持たせ、意味の無い攻撃を互いに行わせないためのルールよ」

「……し、師匠……冷静に解説してる場合じゃ……」

『新難題「金閣寺の一枚天井」』

『パゼストバイフェニックス』

意識を回復した鈴仙さんが言うが早いのか、二人の少女達が宣言すると同時に、再び莫大な数の光弾が産み出され、瞬く間に空を覆ってゆく。

「まさに弾“幕”だな」

「……双方共に最後のカードを切ったようね。行きましょう」

「どこへ？」

「流れ弾に巻き込まれたくはないでしょう？」

修羅場じみた様相を呈する上空を一瞥し、ボロボロのレイセンさんに肩を貸しながら部屋を出ようとする八意先生の後を追う。

「悪いけど要君、あの調子では帰るのが遅くなりそうよ」

「大丈夫だ。問題無い……と思います」 益体も無い言い返し。



まあ、言ってみただけである。

間断なく響く爆音を背に、再び長い廊下を進み、先生はとある部屋の前で立ち止まる。

「……すみません、師匠」

「良いから。手早く済ませて来なさい」

そんなやり取りと共に、レイセンさんはフラフラとした足取りで部屋の中へと入って行く。

「あの……レイセンさんは何を？」

「あら、貴方としてはあの格好のままの方が良かったかしら？」

「失礼しましたごめんなさい」

要するにちえんじくろうずである。

まあ、確かに正直なところ眼福だった。

ここは念の為あの部屋から距離を取って置こう。ラノベ的事故は防ぎたい。

ゆえに、若干後ずさろうとした、

その時。

「っ、危ない!!」

「っおおあっ」

廊下を挟んでレイセンさんが入って行った部屋との反対側。

中庭のようになった屋根の無い一角を通って、廊下に上空からの弾幕が降り注いだのだ。

すぐ後ろの床板が砕かれ、爆圧に足を掬われかけた、刹那。

八意先生が僕の右腕の三角巾に強引に指を引っ掛け、自分の側に引き寄せた。

つんのめるような体勢で前に倒れ込む僕の頭を抑えつけ、板張りの床に伏せさせる。

「何でわざわざ交戦範囲をずらしたし!？」

中庭をぐるりと囲む屋根によつて四角く切り取られた空の中で、ばっこんばっこんと弾幕をぶつけ合う二人の少女達。

尚もその弾幕からはじき出された弾が散発的にこちらに向かってくる。

八意先生の手を押しつけて片膝立ちの体勢をとると、バツティングセンター初級クラスの弾速で迫る光弾のうち、一番危なそうな一つに注意を向ける。

軌道の『本質』を見て、

リーチに入るタイミングを予想し、

左手の木刀を、振るう。

ガツキイン、と、A・Oフィールドでも展開したような衝撃音が響き。

すくい上げるような木刀の打撃により、強引に軌道をずらされた光弾が肩の上の辺りを通り抜け、後ろの襦の上部に穴を穿つ。

「ひゃあああっ!」

レイセンさんの悲鳴。

「やべえ、ミスった……」

「弾いただけでも上出来よ。襦は直せるし、鈴仙も無事のようだし」

「確かに無事ですけど……着替えてる最中にとっつのはどうかと。あと襦……」

逆に被害を悪化させているようで、なんだか誠に申し訳無い。

「鈴仙、早く済ませない」

「は、はい!」

後ろから衣擦れの音が聞こえてくる。  
非常に耳の毒だ。

「その木刀、妖力が付加されてるのね」

「幣文さんに借りたんです。低級妖怪やら妖獣ぐらいが相手なら、当てさえすれば昏倒させられる、と言うことで護身用に」

妖刀ならぬ妖木刀。

必要とあらば妖力弾も弾けるとは聞いていたが、まさか本当に使うことになるとは思わなかったね。

ぶっちゃけ利き手ではないので振りにくいし、そもそも小太刀サイズ故に射程もそれ程ではない。

むしろ妖怪やら妖獣の身体なんか当てられるのか疑問だった。何分彼らのスピードとパワーは人間と比べてケタ違いなのである。弾幕相手の方が、数の上では不利でもかえって対処し易いかも知れない。

「しっかし、上の二人は凄いですね。あんな普通の人間なら絶対に避けられないでしょう?」

楔形弾の間隙をすり抜け、乱舞する丸弾にかすり、レーザーの周囲に沿うようにぐり抜け。自分を狙って放たれるナイフ弾をギリギリまで引きつけ、最低限の動作でかわし。

目が回りそうな空中機動で弾幕をかき乱し、返す刀で新たに弾幕を生成して打ち出す。

「二人とも普通の人間以外なのよねえ」

言いながら、自信も弾幕を展開し、流れ弾を迎撃する八意先生。

その言葉には僅かな呆れが含まれていたが、それとは対照的に、明らかに“弾幕を張る”ということに対する楽しみの感情が現れていた。

弾幕ごつことは、あくまでも決闘とは言えども一種のスポーツに似た物なのかも知れない。

「よっ」

八意先生の迎撃から漏れた小さめの丸弾の一つに、左手の木刀を斜め上から叩き付ける。

「そおい！」

中庭へと弾き返したことを確認し、次弾のナイフ形弾を弾く。

やべえたのしくなってきたw

妖力を付加した刀（木刀だが）を振りかざして何たらって、厨二病乙。とか、端から見たら言われそうだが、良いじゃないか。

どうだ、似合ってるだろ？（CV：大塚明夫）

似合ってるないか？（CV：同上）

似合ってると思うんだがなあ……（CV：大（ry））

それにしてもこの少年ノリノリである。

「もう一丁！」

ナイフ弾がクルクルと回転しながら廊下を飛んでゆき、離れた所で自然消滅したのを確認して、ゆつくりとした動きの、ちょうど野球ボール大の大きさの米粒形弾に対し、調子に乗って木刀をフルスイング。

硬球を金属バットで捕らえたような甲高い音が響き、米粒弾を上空へと打ち返す。新たな運動量を得た弾は、再び雲霞の如く入り乱れた弾幕の中へと突き進んで行く。

弾き返した米弾を目で追っていると、ここで予想だになかったことが起きた。

双方の弾幕が交錯する中に飛び込んだ米弾は、莫大な数の妖力弾

のうちの一つに激突する。

玉突きのように、ぶつけられた方の丸弾があらぬ方向に向かい、また他の妖力弾に衝突。次々と連鎖を重ねてゆく。

キン、キン、という衝突音が何度か続いた後、その瞬間は訪れた。

桃色の装束の少女　蓬萊山輝夜　が、何かしらの異常を感じ取ってか後ろを振り向いた、瞬間。

べしっ、と。

その美麗に整った顔面に、激突した。

「ぐむっ」

という、おおよそ美少女が発するにはふさわしくない声とともに、ぴちゅーん、と、気の抜けた効果音が発せられ。

そのまま仰向けに倒れ込むようにぐらりと体勢を崩し。

真っ逆様に地面へと急降下、もとい、墜落していった。

「……………やつば」

さあつ、と顔から血の気が引いてゆくのが自分でも分かる。

ゆっくりと顔を右に向けると、ヤレヤレ、といった様子で肩を竦める八意先生。

ススス、と背後の襖が開き、ワイシャツへとフォームチェンジし

た鈴仙さんが顔を出す。

「済みません、終わりました……って、あれ……？」

先ほどまで空を埋め尽くしていた弾幕が一かけらも見当たらないことに怪訝な顔をする鈴仙さんに、僕は何も言えずに引きつった苦笑を顔面に貼り付けていた。

「……とりあえず、勝者：藤原妹紅ということに……なるのかしらねえ？」

さあて、どうだろ？

其之肆・ 迷いの竹林、診察と弾幕の件（後書き）

うん。中間審査中なんだ。わあい

ええ、もう自棄です。成績がレッドマジックにならないよう、せいぜい頑張るとしましょう。

はてさて、誠に勝手ながら更新ペースを更に遅くさせて頂きます。できれば毎月の電 文庫あたりの発売日にも被せるような感じで。

本文ですが、ようやく原作メンバーがまともに登場ですな。

永夜抄メンバーは基本原作しかやったことがないので台詞回しがイマイチ良く分かりません。

そんな優曇華は永琳の実験台になってしまえ、だとか、批判等有りましたら具体的にどうぞお願い致します。

もこたんもinnしてくれました。

彼女は原作じゃごく普通の女言葉なのに、二次だと思いつきりやさぐれますよねえ

まあ、ニートとバトってる間だけでもやさぐれておけば良いのでしようか

う詐欺が出てないのは仕様です。



其の伍・修行場、靈力操作修練の件

すつ、と鼻からゆっくり空気を吸い。

ふう、と口から長く吐き出す。

身体の中に僅かに感じるそれを、呼吸によって練り上げるように。

息を吸う。再び、吐く。

腹式と胸式を組み合わせた特殊な呼吸法のリズムを崩さないように細心の注意を払いながら。

緊張の為か、心臓の脈動が幾分速い。

それを宥めるように、尚も息を吐いて、再び吸う。

呼吸と共に身体の中で渦巻くものも、だんだんと一つの塊へと凝縮されていく。

そろそろか、と、アタリを付け、体内で形を持ち始めたそれを、そのまま手のひらへと流し込むようにする。

微かな違和感が体幹から肩、腕を伝って、体の前方に向けられた両手のひらへと走り抜け、体外へと飛び出す。

そのままにしておけばただ垂れ流されるだけになってしまわずのそれを、脳内に描いたイメージを基に、文字通り丸め込み、形作ってゆく。

緩く前に構えた両手の中に感じる確かな感触。  
やったか、と、閉じていた両面を開いた。

瞬間。

パスン、と、軽い音を立てて。

なけなしの霊力を集めて作った霊力球が破裂、霧散した。

「……………」

数秒間の沈黙。その直後、がっくり、と板張りの床に両手を突く。

「おんし本当に靈力薄いのう」

orzを体現した僕に、神楽さんは容赦ない言葉を浴びせた。

「そんな事を言われても、まだ始めて二日目ですよ？」

もうダメば体勢から上体を起こし、床に正座。自然と、前に立つ神楽さんを見上げる格好になる。

「うんにゃ。巧拙の問題でなく、そもそもおんし自身の靈力生成量は並の人間以下と見た。それでは体外での靈力の運用には足りんじゃないろうな」

「まじすか……」

明かされる衝撃の事実（苦笑）。

と言つても、別段驚くような事ではない。

何せ僕はつい最近まで外の世界で普通の学生をやっていたただの人間である。

そんな人間がホイホイ扱えるものだとはい到底思えない。

もつとも、靈力について説明を受けたときに期待の念を抱かなかつたか、と訊かれれば勿論そうではないけれど。

だってさあ、厨二ではあるけど楽しそうじゃね？

手から火を出すとか、そんな程度でも忘年会の隠し芸は張れる。

「……なら神楽さん、僕には霊力使って何やかんや、つてのは無理ですかい」

「無理とは言わん。あくまでもおんし自身の霊力だけでは薄すぎるといっただけじゃ」

腕組みしながら、運動オンチの生徒を教える体育教師みたいなノリで言う神楽さん。霊力とかの部分は何か適当なワードに置き換えれば、その様子も分かり易いか。

そんな彼女は、仕方無いのう、と、ばやきながら、

「方針転換じゃ。ワシが霊力をおんしに供給する。それを操作できるかどうか、やってみい」  
と、のたまった。

いや、自分の霊力が使えないんだったらその時点で制御なんて無理じゃね？ という反論が浮かんだが、取りあえず黙っておく。  
教えを請うている立場だし。

「……まあ、やってみます」

どうだかなあ、と釈然としないものを抱えつつ、そう言って再びゆっくりと両目を閉じた。

さて、ここで状況説明。

如月 二月の四日、午の刻に入ったあたりだから大体午前十一時ぐらい。

僕がこの幻想郷に流れ着いてから、約二週間が経った。 幻想入り初日に負った怪我も八意薬師の治療により晴れて全快。 普通の生活が送れるまでに回復した。

外の世界には帰らない、という僕の意志を再度確認した神楽さんは、特に何かしら考える様子もなく、ほとんどノリで僕を居候として迎え入れると申し出た。

しかし、さすがにタダ飯食らいのヒモ野郎になれるほど僕の神経は図太くはないし、魔法の森で助けられたことに始まり、彼女に対しては多大な恩が山積しているため、これ以上迷惑を掛けないためにも辞去するべきだと考えていた。

……のだが、『どうせ行くアテなど他に無いんじゃろ』との言葉には言い返せず、結果的に居候と相成ったのである。

まあ、頼るアテが無いのは本当の事だけでも。

なにもせず居候と言うのもまずかろうと、掃除、洗濯、炊事、その他諸々の仕事を引き受けさせて貰おうと神楽さんに申し出たの

だが、予想外にも、別に気にせんでもええ、と、かなりの軽さで断られた。

いや、居候ならば何もしないわけには参りますまい、と、彼女の口調が移りでもしたのか、なんだか古典的な言い回しで僕が言つと、ふむ、と少し考える素振りを見せた後、

「ま、おんしの好きなよーにせい」  
という答えが帰ってきた。

彼女曰わく、身の回りの一通りの事は妖術を使うだけで足りること。ぶっちゃけた話、僕が働こうが働くまいがあまり変わりはないらしい。

その代わりに、とでも言うか、居候する条件として言いつけられた事がある。

一つは、生活の上でのある程度の自己防衛力をつけること。

喰われないための抑止力といったところか。

基本的に、幻想郷の妖怪は幻想郷に居を構える人間を襲うことはない（逆に言えば、人里にたどりつくまでの外来人は襲い放題。いづぞやの僕自身がその典型）らしいのだが、目的意識を特に持たない低級〜中級妖怪には目を付けられることも少なくないということだ。

その場合の対処法は逃走もしくは“弹幕ごっこ”に持ち込むかのどちらかが主となるのだが、それに必要な体力その他をつけるという旨を言いつけられたのだ。

もう一つは、例の『本質を操る程度の能力』を拡充すること。

何だか知らないが、神楽さんとしてはこの能力に対して並々ならぬ興味があるらしく、逆にこちらが引いてしまふほどの語調で注文をつけてきた。

あなたは僕の母親か、とでも言いたくなかったが、“能力の実態を掴む”というのは僕自身やるべきと思っていたことに他ならないので、特に反対する理由が無いのも事実だった。

そんな訳でもって、現在進行型で神楽さんより教えを受けている訳なのDA。

まあ、だだの人間　それも外来人の自分に靈力制御など簡単にできるはずがないのは分かっていたが、これは長く掛かりそうだと再認識中。

昨日は靈力とはいかなるものぞ、という内容の座学めいた内容だったが、今日は朝食後からほとんどぶっ通しで実技指導だった。いい加減空腹感がマツハである。

神楽さん曰わく雀の涙ほどしかない靈力を体内で錬成できるようになるまでしめて四時間。

で、四時間かけていたらだと体内でこねくり回したなけなしの靈力をどうにか体外へと出力させたまでは良かったが、その四時間分の労力の結晶を呆気なくポシヤらせ　現在に至る。

ふっつ、と、長くゆっくり息を吐き出す。

簡単に言えばこれは自己暗示じゃ、と、神楽さんは言った。

当然のことながらというか、お約束と言うか、霊力制御には精神的な集中が不可欠である。

逆に言えば、漫画やらアニメやらでもお馴染みの、“集中が乱れると能力が弱体化する”パターンが実際に現れうるということだ。

霊力を使わなければならないシチュエーションが必ずしも十分に集中できるものだとは限らないし、もちろんそんな状況に置かれた場合に使えないのでは話にならない。

そこで、本格的な霊力制御のプロセスに入る前に、何かしらの“手順”を挟むようにする。

毎度毎度“手順”を踏んだ後に霊力制御を始めるように習慣付けることで、最終的には“手順”を踏むだけでどんな状況下でも霊力制御が即座にできるまで持って行くのだそう。

陰陽師や山伏やらが精神統一のために印を結ぶのと同じような原理であるらしい。



どうせなら、それを使ってみよう。

パン、と、柏手を打つように両手を合わせ、合掌。  
そこから五指を順々に組み合わせてゆく。

《CAUTION！！ CAUTION！！》

《厨二病が通ります。ご注意ください。》

(臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前つとWWW)

「何故九字印が結べるのか訊いても良いかの？」  
心底不思議そうな神楽さんの声。

「黒歴史の賜物です」  
「意味分らん」

ですよー。

小学五年生ぐらいの頃に、図書館で見つけた本を見て手遊び感覚  
で無駄に極めたまま、今の今まで忘れずに来てしまった。

げに厨二病とは恐ろしきかな。

どうでもいいが、某忍者漫画は余り読んだことがない。

厨全開時代、クラスメートにそれ何てナ〇ト？ と突っ込まれたことがあるが、印の元ネタはアレとは違います。

似たようなモンだけど。

「……認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものを」  
「分からんて」

意味も益体もない文句を垂れ流しながらも、とにかく先程の如く集中を開始する。行くぞー、という間延びした声と共に左肩に手が置かれ、何かが身体の中に流れ込んで来る感触。

胸の辺りで風船でも膨らんで行くような身体の内側からの圧迫感。

再び手のひらを前方に向けてように緩く開き、体内に流れ込んできたそれを、ゆっくりと両腕、両手のひらへと誘導してゆく。

頃合を見計らって、呼吸のリズムを崩さないように留意しつつ、手のひらに集まる靈力を“視”た。

ある意味では見慣れたものと言えなくもない例の青白い燐光が、両手を包み込むように発せられる。

両手の中でゆっくりと凝縮してゆく靈力を、かめは〇波のチャージみたいないメージで手のひらの前方の空間へと出力してゆく。自然と早くなる心臓の鼓動を無理矢理に押さえつけるように、深く、長く呼吸。

野球ボール程の大きさに凝縮した霊力の塊を核として、正確に球状を保ったままさらに霊力を込める。

「お、うわわわ」

霊力が供給されることに、霊力球はムクムクと肥大化し、一気に野球ボールからバレーボール程のサイズを経て、デカイ地球儀クラスまで育ってゆく。

「そろそろええじゃる。球を崩さぬようにそのまま保つんじゃ」

神楽さんの手が肩から離れ、体内に流れ込んでくる何かの感触が薄れるとともに、霊力球の巨大化も止まる。

「保つって、言われましてもねえ！」

白磁のように透き通った白色の霊力球。その外側はとりあえず滑らかに安定しているように見えるが、能力を通して見れば内側に閉じこめられた霊力の奔流が渦巻いているのが見えた。

水風船のように、下手に力を掛ければまた破裂してしまうはずだ。

おまけにゴム製の風船という殻を手で持って支えることのできる水風船とは違い、霊力球に実体は無い。

ならどうやって支えるのか、と、訊きたいところだろう。

残念ながら説明できない。

何せ最早イメージの世界である。

どう、と訊かれても、とにかく支えるんだよ、としか応えられないのだ。

考えるな、感じるんだ。って奴かね。

とにかく、今のところ球体にできるだけ均等な力を加えることしか頭にはない。

水風船ならゴム製の外殻の一点を押ししたところでそこがぐにゅと凹むだけだが、霊力球にはそれほどの柔軟性はないので、一点に力をこめ過ぎるとたちまち不安定になるのだ。

まあ、到底ズブのド素人が一発でこなせるような事ではない。

「う、おっ、ととと やば」

で、実際に力加減をミスってゆらゆらと危なっかしく揺らぎ始める霊力球。

その中で青白い燐光がぎゅるり、と渦巻く。

露骨に嫌な予感がして、霊力球に向けていた両手を反射的に引っ込めた。

直後、青白い燐光がぐぐつと収縮した瞬間、横合いからひよいと伸ばされた神楽さんの手が、霊力球を勢い良く弾き飛ばす。

ぎゅん、と、修行場を横切った霊力球が開け放たれた窓から飛び出すのと、それがぼふっ、という鈍い音を立てて破裂したのは同時だった。

「霊力の制御はなかなかじゃが、まだまだ練度が足りんの」

ぐへえ。

精神的疲労から板張りの床の上に仰向けに倒れ込んだ僕に、容赦のないコメントを浴びる神楽さん。

「こんなモン、たったの数日ぽっちで出来るようになってなりますかね……」

「まあそりゃ、ちっとの訓練で身に付くような代物ならだれも苦労はせんわな」

「そう思うならもうちっとスローなカリキュラムでお願いします。ゆるゆると、って言ったのは貴女でしょ？ ……ちと、休みますよ」

ひやりと冷たい板張りの床にべったりと背中を付けて、ぜえはあと何度目か分からない深呼吸。

知恵熱出そう。

「私は数日の練習であそこまで霊力を操れるなら十二分だと思っけどっ」

修行場の壁際から有り難い援護射撃。

「……とのご意見ですが？」

「速く進めて悪いことは無いじゃろっ」

さらりとのおたまっ神楽さん。

なぜそこまでスパルタ式なのか、皆目見当が付かない。

「神楽、確かに彼の霊力への適性は高いけれど、一度に技術を詰め込むのには余り賛成できないわ」

「記憶能力のピークは確かこの年代じゃろ？ ならばとっとと詰め込める知識と技術を詰め込まなければなるまい。ヒトの生は短いし」

「死にますから！ 一日中こんな調子なら技術の習得以前に精神疲労で三回は死ねます！」

顎に手をやり、ニヤリと不吉な笑みを浮かべる神楽さんに、がばつと上体を起こしながら訴える。

「貴女が人間の寿命をどう捉えてるのか疑問だけれども、少なくとも貴女が考えているほど技術習得のできる期間は短くないわ」

「ほら、ドクターストップが出ましたよ」

「もつとも、無理をして身体を壊したとしてもすぐに治せるのだけれど」

「その場合はむしろ治さないで下さいお願いします！！」

この場には全面的に僕を擁護してくれるような人物はいないようだ。

ああ、ゆとり教育が懐かしい。

というかそもそも教育に分類されるのかこれ？

「……前にも訊いたような気がするんですけど、神楽さん？」

「何じゃい？」

「何故にここまで教育熱心というか、スパルタなのか尋ねたいの

ですが」

「面白そうだから」

僕の問いに、一瞬の間も置かずに答える。

「外来人の癖に霊力やら妖力やらが認識できて、聞くからに面白そうな能力も持つとる。なおかつ外には帰らないと来た。これに食いつかぬというのは勿体なさすぎるじゃろ？」

「僕は釣りの餌ですか」

「単なる知的好奇心の発現じゃよ」

間違いない。

その知的好奇心の発現とやらには十中八九耐えられません。

このままでは本格的に身の安全が保てない。

と、更に抗議の声を挙げようと口を開きかけたのだが、生憎突如として僕の腹部から響いた異音によってそれは呆気なく妨害された。

「……………うおう、空腹感が……………」

さながら朝を知らせる鶏の声の「とく」、腹の虫の一声によって空腹感が急速に訪れる。

霊力制御でエネルギーを使ったのか、はたまた朝食を軽めにしたためかは判らないが、ぐるぐると唸ると唸るように響く胃袋からのシユプレヒコール。

成長期の学生（元）の食欲は、幻想入り後も未だ健在のようだった

た。

「……まあ時間も時間じゃし、そろそろ昼餉ひるげとするかの」

少々呆れた様子を見せながらもブレイクを入れる事には賛成の様子の子の神楽さん。

因みに妖怪も人間の食べもので腹は満たせるのだという。

幻想郷での食物連鎖の形がどうなっているのか、イマイチよく分からないが、多分ピラミッドのトップは妖怪。

数で言つと捕食者たる妖怪の方が被捕食者たる人間よりも多いらしい。

バランス悪くないか？

「要、四人前じゃ。内容は任せる。食べるモノ作るんじゃぞ」

「食べるモノ以外作りませんよ……。っと、お二人は何か食べたい物とか有りますか？」

言いながら立ち上がり、背後の壁際に並んで座る八意先生と鈴仙さんへと向き直る。

二人は人里への往診を終えて永遠亭まで戻る途中に、僕の腕の経過観察も兼ねてつい先程から立ち寄っていたのである。

「あら、ご馳走してくれるの？」



「ええ、永遠亭まで帰ってからだと遅くなってしまつてしょう？」  
「それほど遅くはならないけれど……それじゃあ、有り難く頂くわ。これと言つて食べたい物は特に無いから、お任せで」

二人は空を飛んで帰る事が出来るため、それほど遅くはならないという八意先生の言葉は事実だが、折角なので昼食は任せて貰おう。

「分かりました。鈴仙さんは？」

「私もこれと言つた希望は特には……」  
とのこと。

作る側としては何かしら希望があつた方が作りやすいのだが……、  
無難なものを作るとしよう。

「それじゃあ、三十分　て何刻だろう？　　ほどで作りますか  
ら、待つていて下さい」

「ええ、楽しみに待たせて貰うわ」

そう言つて柔らかい微笑みを浮かべる八意先生。

どうでもいいけど、綺麗な声だなあ。　　声優でいうと桑島法子  
さんみたいな。

容姿の美しさと相まって尚良し。

……何考えてんだろ。

どうでもいい思考を振り払い、それでは、と一声掛けてから修行  
場を後にした。

母屋の勝手口をくぐりながら考える。  
さて、今ある食材で作れるものは……………。

「彼、なかなかの腕前ね」

幣文邸・居間。

薬師・八意永琳は、正方形の卓袱しっぽくの向かい側で湯呑みに急須から緑茶を注ぐ妖怪・幣文神楽に声を掛ける。

その弟子は現在昼食の支度を手伝っており、ここにはいない。

「初めてであそこまで霊力を使いこなすなんて、かなりの才能じゃないかしら？」

「才能……………の。そんなものがある外来人というものも、珍しいものじゃが」

ことり、と、永琳の前に湯呑みが置かれる。

ふわりと緑がかった液体の表面から立ち昇る湯気が、ゆっくりと

空気に溶けてゆくのを眺めつつ、神楽は続ける。

「しかし、どうもアレにはいくつか疑問点があるのう……」

「疑問点？」

湯呑みを口元に近づけながら、永琳は聞き返した。

「おんしも気付いとるんじやる？ あの治癒力に」

「確かに。妖怪並みとは行かないまでも、人間のレベルは確実に越えているわね」

文成要の怪我を診察・治療したのは、永琳自身である。

ふらふらと永遠亭の自室に入り込んできた紙人形型の通信術式によつて呼び出され、幣文邸の一室で布団の上に横たえられた要の怪我を見たのは16日前のこと。

その時点で、左下腕切断、各部の打撲、擦過傷といった症状があったのだが、そのうちの打撲と擦過傷は、患部を冷却したり薬を塗ったりという対症療法により、わずか3日という早さで完治した。

要が意識を取り戻したのがその日の昼であるから、本人は怪我が左腕だけだったと考えていることだろう。

軽度の負傷だけでもその回復速度には目を見張るものがあるが、更に驚くべきは件の左腕についてである。

断裂した関節や骨、筋組織などに直接薬剤を塗布し、縫合。

その後は再生力に定評のある蜥蜴とかげの妖獣から抽出した薬剤を投与して様子を見たのだが、同じく3日目に経過を見ると、その時点で抜糸ができるまでに回復していたのだ。いくら八意永琳を『月の

頭脳』たらしめている天才的な製薬技術をもってしても、あくまで“薬を投与する対象が本来持っている治癒力・回復力を増強する”という基本的効能から外れた薬を造る事には難がある。

あの薬は細胞の再生機構を“補助”して、結果的に治癒を早めるためのもの。

薬そのものが傷を修復するのではなく、それを行うのは原則として患者である文成要の生命力であるから、治癒の速度が“薬剤の支援を受けた人間”レベルを超えるはずが無いのである。

「特異体質か、あるいは外部から何らかの干渉を受けたか……」  
「少なくともワシは何もしとらん」

ずずず、と、うつすらと白い湯気を立ち昇らせている緑茶を啜る音が八畳間に響く。

神楽は一口啜った所で湯呑みを一度卓袱に置き直し、再び口を開いた。

「気になった事がもう一つ」  
「何かしら？」  
「アレには霊力がほとんど無い」

その言葉に、永琳も湯呑みを口から話して応える。

「霊力が無い？ いくら何でもそれは」  
「有り得ないが、事実あの程度の制御が可能だと仮定して、必要であるはずの推定量には到底及ばぬ。下手をすれば並みの人間以外の水準じゃ」

霊力とは、全ての人間が多かれ少なかれ持つ精神的エネルギーであり、妖怪の持つ妖力、神いが有する神力などに相当するものだ。当然人間は肉体だけで生きている生物ではないため、人間一個体に対して最低限の霊力というものが存在する。無意識下で霊力を生命力から作り出しているのである。

霊力の量は生命力から霊力を精製する能力の巧拙によって人それぞれであるが、それを考慮しても文成要の持つ霊力は希薄すぎた。

これは霊力を流し込んだ時に初めて分かった事じゃが、と、前置きし、

「どうやら、精製した霊力を片っ端から使い潰しているようじゃ。必要最低限の分量を残しての」

神楽の言葉に永琳は、今度こそ明確な反駁を返す。

「それこそ有り得ないわ。彼は霊力を消費するような行動なんて、何もしていないでしょう？」

「せいぜいあの修練が関の山じゃの」

「それなら何故　？」

困惑の表情を浮かべる永琳に神楽は、さあの、と、素っ気ない言葉を返す。

「詳しくはこれから、あやつ自身が自分の能力を自覚した所で判る事じゃ。何と言っても『本質を操る程度の能力』じゃしの」

あやつ自身の本質も、自ずと知れるじやろ。と。

神楽は言うだけ言うと、再び手の中の湯呑みを持ち上げて、中身をずらずと啜り始めた。

永琳はしばらくの間黙考していたが、やがてふと思い出したようにくすり、と、微笑みを浮かべる。

「貴女が彼を指導しようと思ったのはそれが理由？」

「まさか。そこまで分かったのはつい今しがたじゃ。理由はアレに話した通り、面白そうな奴だったからじゃの」

まあ、確かにさっきので尚更興味が湧いてきたが、という言葉が続けつつ、湯呑みを手にしたままにつしつし、と笑う神楽に、永琳は内心でやれやれという感想を浮かべ、両手の中にある湯呑みに口を付ける。

口の中に広がる茶葉の味。

下の上で僅かに渋みのある液体を転がし、彼女は再び思考を巡らす。

文成要という、一人の外来人に宿る特異な性質。

発展途上にある能力がどこまで伸びるのか。

人並み外れた治癒力や霊力制御能力の由来は何か。

じっくり調べてみるだけの価値はあるはずだ。と。 『月の頭脳』  
の勅は静かに告げていた。

永琳もまた、自分の心中にある好奇心がふつつと湧き上がるのを感じつつ、芳醇に薫る緑茶をゆっくりと飲み下した。

其の伍・修行場、靈力操作修練の件（後書き）

さてさて、今回は分量少なめです。

このくらいの分量で月一位を目安に投稿して行くつもりかと思っております。

靈力の件には、独自解釈が多分に含まれます。

所々？が付く部分もあるかも知れませんが、生暖かく見守って下されば有り難いです。



其の閑・台所より始まる一挿話

若干の汗が染み込んだ修行着　剣道着を流用した　を脱ぎ、  
普段着の着流し姿に着替えてから台所に戻る。

と、勝手口の辺りでちらりと揺れるウサ耳。  
鈴仙さんが所在なさげに辺りを見回していた。  
どうしたのか、と訊くと、本人曰わく昼食の支度を手伝いに来た  
とのこと。

客人に手伝わせるといふのは不味かろうと断ろうとしたが、彼女の師である八意先生の手前もあるということ、有り難く手伝って  
頂くことにした。

「それで、何を造るの？」

渡した割烹着に袖を通しながら尋ねてくる鈴仙さん。なかなか似  
合っている。  
じゃなくて

「そうですねえ……」

考えてみれば、残っている食材は少ないので、造れる物にも限り  
があるのだった。

近々人里まで買いに出ると神楽さんは言っていたが、何だかんだ  
でまだ行っていない。

そんな訳で、残っている食材をざっと見直し、メニューを決める。  
……手抜きとか言わないで。

「……うどん、ですかねえ？」

「からかっているの？」

「え……いや、まさか」

鈴仙・優曇華院・イナバ。

優曇華というのは仏教にある想像上の植物であり、小麦粉を水でこねて造る麵料理とは何の関係も無い。

ツッコミを返そうとする僕に、「冗談よ、と告げて勝手口の横にある桶の水で手を洗う鈴仙さん。

そこはかたなく遊ばれているような気もしなくは無いが、気にはするまい。

で、結果的に昼食のメニューはうどんに決定。

釜揚げ辺りが妥当だろう。寒いし。

鈴仙さんに倣って手を洗い、壁際に置かれたお櫃の中から直径30センチほどの皿に載せられた白い塊を取り出す。

朝方小麦粉を水で練って今まで寝かせておいたものだ。

当初はすいとんにでもすれば良いかと思っていたが、量としては二人で食べるには多すぎたので、まあ丁度いい位だろう。

出汁は鈴仙さんに任せてこちらはうどんの手延べに取り掛かる。

「貴方、料理できるの？」

「まあ、外では自炊してましたから、一通りは」

意外そうな様子の鈴仙さんに言葉を返し、平たい延べ板の上に打ち粉を振り撒く。

料理ができるとは言っても、麺類の手延べはほんの一、二回しかやった事がないが。

普通なら手延べなんてやらない？

まあ、そうだろうけど。

生地がくっつかないように時たま打ち粉を蒔きながら、麺棒に巻き付けるようにして延ばす。

そうこうしているうちに隣から鰹ダシの芳香が漂い始め、それに敏感に反応した胃袋が、ぐるる、と異音を発した。

鍋をかき回している鈴仙さんがくすり、と笑う。

「仕方ないでしょう、腹減ってますから」

言い訳がましい文句を並べる僕に、わかってるわよ、と笑いをこらえながら言う鈴仙さん。

何だかそこはかとなく“このリア充め”という無言の圧力がかかっているような気がするが、気のせいだと思いたい。

慎重に生地の厚さと全体の形を整えた所で、続いて生地を折り畳み、いよいよ打ちの作業に入る。

長方形に整えられた生地の上に打ち板をあてがい、右手に持った菜切り包丁で細切りにしてゆく。幅は一センチ弱ぐらいに揃えられ

ば良いだろうか。

「おつゆ、出来たわよ」

鈴仙さんの声に従ってそちらを見やると、鰹ダシと醤油ベースの漬け汁が、鍋の中でホカホカと湯気を上げている。

一旦麺打ちを中断して、小さじで一掬い。

口に運ぶと、鰹の芳醇な香りが口の中を満たす。薄口で、味のバランスも良い。

「美味しいですよ、鈴仙さん」

「そう？ それなら結構ね」

なかなかできるな。鈴仙さん。

麺つゆが冷めてしまうと問題なので、手早く麺の方を打ち終わってしまう。

沸騰しているお湯の中に打った麺を放り込み、麺同士がくっつかないように菜箸でかき回すように鈴仙さんをお願いしてから、その隣でうどんに添える具材をいくつか調理。

小松菜を一口サイズに切り、軽く湯通し。蒲鉾も同様に手頃な大きさに切りそろえる。

「どうでもいいことですけど、塩だとかってどうやって手に入れるんです？」

幻想郷には海がない。まさか岩塩でことは無いだろうし。

「とある妖怪が外の世界から持ってくるらしいわね。塩以外にも、外でしか手に入らないものを色々とね」

「はあ、なるほど」

結界で隔離されてはいても、完全なる閉鎖空間という訳ではないらしい。

まあ、人間だって外来人として迷い込むくらいだから、物品の移動だってできない訳では無いのだろう。

そうこうしている内に、うどんが茹で上がる。

濡れ布巾で鍋の取っ手をくるみ、素早く流しの中に置いたザルの上に中身のうどんを開ける。

「やつほつ」

つやつやと白く輝く中太麺。

この時点で食べてしまいたいが、我慢。

釜揚げの場合、普通はうどんを水で締めないらしいが、とりあえずコシを重視して冷水にさらす。

その後、麺を一人分ずつ井の中に取り分け、かぐわしい香りを放つ熱々の麺つゆを鈴仙さんが流し入れる。

うどんの冷たさでつゆの熱さも丁度良いくらいになるんだなこれが。

最後に麺の上に小松菜と蒲鉾を載せ、晴れて本日の昼食の完成と相成った。

「なかなかの出来ね」

「いや、そのコメントはまだ早いですよ。この主は料理にはうるさいんです」

まあ、何だかんだ言いながらも食べてくれるのだけれど。

ちなみに主こと弊文神楽氏はありえないくらいに料理が上手い。

本人曰わく、他人が作ったものはどんなものでも食べるらしいが、自分が作るとなると妥協はしないという。

どこの両儀式だ。

さて、台所にうどんを留めていても意味がないので、何はともあれ配膳である。

ふわふわと湯気立ち上る丼4つを盆に載せ、慎重に居間へと向かう。

襖の前で失礼します、と声を掛け、鈴仙さんに開けてもらう。

「おそーい」

開口一番、不満げな様子の神楽さん。

卓袱を挟んだ向かい側には、苦笑を浮かべる八意先生。

「どうも、遅くなりましたして申し訳ありません」

なんでこの人に料理で勝てないんだろう、と、世の理不尽さを感じつつ、丼を各々の前に一つずつ置いて行く。

「あら、美味しそう」

「見た感じではの」

「味の方も悪かない予定ですがね？」

さらりと酷い前置きを付け加えられつつも、正方形の卓袱の一边に収まる。

『頂きます』、と4人で声を揃え、一斉に箸を取った。

白い中太麺をつまみ上げ、軽く吹いてから口へ運ぶ。

柔らかすぎず固すぎず、程よい歯応え。

鈴仙さん謹製のつゆもよく馴染んでいる。

なかなか良い出来だ。

「お口に合いましたか、先生？」

「ええ。美味しいわ。要君、神楽が目を付けるだけあって料理の腕は確かね」

向かい側に座る鈴仙さんもコクコクとうなずいている。  
いやはや一安心。

「で、どうです神楽さん？」

「ん、65点の乙評価」

「微妙な……」

今までに作ったものの中では中程度といったところ。

ちなみに現時点での過去最高は70点半ば。

「どんだけ肥えてるんだこの人の舌は……と、改めてそんなことを考えながら、中太麺を噛み締めた。」

さて、腹拵えが終われば午前中の修練の再開である。

食器を洗ったりと、諸々の後片付けを済ませたところで、再び場所は母屋に隣接する修行場に移る。

食休みという概念が無い辺りが外の世界の学校っぽい。

「さて、おんしの場合、時間当たりの霊力生成量が人並み以外ということとは先にも言ったことじゃが……渋い顔をするでない、対処法はある」

そんなコメントから、神楽さんは午後の修練をスタートさせた。

彼女曰わくデフォルトの霊力生成量が少ない状態では、霊力を消費して行う種々の行動が大幅に制限されるという。

現代風に言い換えれば、燃費云々以前に燃料タンクの容積が少ないため、あつという間にガス欠になってしまう、とでも言えるか。

そこで彼女が考えたのは、僅かずつながらも時間の経過と共に体内で自動的に生産されていく霊力を外部に貯蔵しておき、必要に応じて取り出して使うということだった。

「要するに、バッテリー的なノリですね」



「ばってりー？ 何じゃそりゃ？」

「漢字で書くと蓄電池です」

「レコードの再生機かの？」

それは蓄音機。蓄しか合っていない。

惜しいけど。

「というか、レコードなんてどこにあるんですか？」

「人里のかふえに置いてあるでの。じゃが蓄電池 ばってりーは知らんな」

「まあ、電気が必要な道具はありませんからね」

幻想郷の家屋には外の世界みたいに電気が引かれているものなどない。

もちろんここもその例に漏れないが、代わりに色々と重宝しているのが神楽さんの使う霊術・妖術の類だったりする。

燭台のロウソクに灯をともしたり、戸を開け閉めしたり、といった感じで雑多なことに使われているが、何せよ式に指令を飛ばせば瞬時に結果が現れるので、外の世界において電灯のスイッチを点けるのと同じ様な感じで使うことができるのだ。

非常に便利。

「バッテリーなら知つとるが」

「それは寿司です」

美味いけど。バッテリー。

あんまり惜しくはない。

それはさておき、と、神楽さんは話を戻す。

「この札に靈力を充填し、必要に応じて取り出して使うという方針が良かる」

その言葉と共に取り出されたのは、白い和紙に墨で何やら細々と文字が書き込まれた、一枚の札。

縦15センチ、幅8センチほどの、神社仏閣で売られている感じの典型的なお札である。

手にとって表裏と眺め回して見るが、特に変わったところは見当たらない。

話は変わるが、お札に靈力を込めるとは、オーソドックスというか、常道というか、昨今の二時創作で使い果たされた感がある。

何番煎じか、判ったもんじゃない。

「言っちゃ悪いですが、分かり易い方法ですね」

「まあ、否定はせん。一番手っ取り早くて難易度も低く、それでいて強化の余地もあり汎用性にも優れる手法じゃけえの」

確かに、靈術のレクチャーを受け始めたばかりの僕からしてみれば簡単なことに越したことはないし。

「それで、具体的にどう使えば良いんです？ これ？」

「そうじゃの、基本的に午前中やったのと同じ様に靈力を操り、球を作る代わりにその札に流し込めばそれで終わりじゃ」

「なるほど。……それじゃあ、早速」

言われたとおり、やってみる。

午前中と同様に靈力制御の前段階である“起点”を作ろうと、両手指を組み合わせ九字印を結ぼうかと思っただが、やめる。

ぶつちやけ長ったらしい。

靈力を使う度に一々だらだらとあれを繰り返すというのは手間だし、何より痛々しい。

もう少し何かしら意味のある、かつ手早く終わるもので代用できないか、と右手を握ったり開いたりすること少し。

そういえば、欧米では人差し指と中指をクロスさせると幸運のおまじないになると祖母から聞いたことがあった。

簡単だし使ってみるか、と、左手の指二本をぴんと伸ばしてクロス。

何に対して幸運を祈ってるのかは知らないが、精々御利益があることを期待しよう。

無神論者だけ。

怪我しない程度に上手く行きますように。

“起点”は出来た。

さっさと目的の靈力制御に移るとしましょう。

両目を静かに閉じ、一度深呼吸。

肺に取り入れた空気でもって体内の靈力を包み込むようなつもりで、体の各部に散らばっている靈力の力ケラに“向き”を与え、収

束させて行くイメージ。

そうしてなけなしの霊力をかき集めてできた霊力の塊を凝縮させ、ゆっくりと両腕に送り込んでいく。

既に両掌を合掌させ、その間にはお札を挟み込んである。

午前中、霊力球を作った時にも感じた、腕の皮膚の真下を何かに通り返けてゆくような感触。

その何とも形容し難い違和感は、スルスルと腕を流れ落ちてゆき、あっという間に掌まで達する。

そして違和感の流れが札に触れたかと思うと、意外にも、それほど抵抗なくすんなりと札の中へと流れ込んでいった。

身体の中にある霊力が抜け出ていく感触を認めつつ、能力を発動して札の様子を“視る”と、何やら青白い燐光が。

「そうそう、その調子じゃ。焦らずゆっくり流し込め」

こちらを見守る神楽さんのアドバイスを聞きつつ、ともすれば乱れそうになる霊力の流れを支え、一定のペースを保ちながら札へと流し入れる。

そして、

「そろそろ、終わりですかね」

体内に感じていたあらかたの霊力　この短時間で移動が終わる量つても悲しいものがあるね　を札へと移し終えることに成功した。

実質的に2、3分程しか霊力制御そのものに費やしてはいなかったが、余剰の霊力はほとんど残らず放出してしまったため、身体全

体に僅かに重みを感じた。

能力を通して札を観察するに、何やらぼやーっと青白いオーラのようなものを纏っているのとおりあえず成功したと思われ。

「後は、ここから靈力を解放して術に使えば良いんですね」

「そうそうことじゃ。………ちと待て、要」 なら早速解放、と、それまで掌に挟んでいた札を右手の指に挟み直したところで、神楽さんが僕の行動を素早く遮った。

ずいつ、と、真正面から僕の両目を見据える双眸。

「は……何です？ 顔に何か付いてますか？」

「静かに」

何ぞ？ と、反射的に一歩後ろに下がる僕を追って、静かな光をたたえた双眸もまた前へと出る。

こんな時に心底どうでも良いが、この人もまたかなりの美人さん。きめの細かい肌やら、澄んだ瞳やら、この距離まで近付くということも増して強烈な印象を与えてくる。

対リアル女性スキルのほとんど無い僕である。

至近距離から見つめられると、非常に戸惑うというか、何というか………。

否応なしにドギマギしていると、すぐ目の前で端正な形の眉根がスツ、と寄せられる。

何事かを考えるような表情を見せた彼女は、そのまま何やらぶつぶつと呟きながら体を離れた。

一体何がしたかったやら。

「ふむ。まあ良い、何でも無い。……要、もう何枚か同じ様に靈力を込めてからじゃ。まだ量が足りん」

「はあ、分かりました」

何だったのか、と疑問符を浮かべながらも、言われたとおりに他のお札に靈力を充填してゆく。

「ちと外すぞ。五枚ほどできたら呼ぶがよかる」

一方で、僕にそう伝えて修行場を出て行く神楽さん。来客二人八意先生と鈴仙さんを送ってゆくらしかった。

完全に自主トシであるが、結局技術を身に付けなければならないのは僕自身なのだ。

全部を全部、神楽さんに頼って手取り足取りって訳には行かないと、言い聞かせ。

よし、と、一人で静かに気合いを入れ、再び体内にある靈力を加速させ始める。

目下の課題は、靈力札五枚の確保。

指をクロス。

ぐん、と、静かに渦巻く不可視の流れが体内で脈打つのを、はっ

きりと感じた。

「嬉しそうね、神楽」

「そりゃあ、ここの所することが無くて暇じゃったからの。アレはなかなか伸びしろが有りそうだし、良い暇つぶしになる」

「暇つぶしって、……貴女ねえ……」

永遠亭へと帰る八意永琳とその弟子の見送りに来た幣文神楽は、半ば呆れの混じった薬師の言葉に、からからと笑って応えた。

暦の上では立春を迎えるころとはいっても、まだ二月の上旬。時折吹き抜ける寒風が、冬という季節が未だに居座り続けていることを知らせている。

「神楽」

「ん？」

「彼は、やはり外に帰らないのかしら」

「そのようじゃのう。本人にも何度か訊いてはみたが、戻るつもりはない、の一点張りじゃ」

「そう……」

永琳が疑問を抱くには理由がある。

人間という生物は、どんなに建前を飾ろうとも、多かれ少なかれ他の人間や自らを取り巻く環境などから影響を受けるものである。

外の世界とは全く異なる環境の幻想郷。

その中に“ただ一人”放り込まれる訳であるから、当然精神的シヨックは大きい。

普通の外来人ならば、大体二三日、長くても一週間程しか滞在すること無く、結界の管理者である博麗の巫女などの手を借りて“外”へと帰ってゆく。

外の人間からしたら全くの“異界”であるはずの幻想郷に留まるというのは、かなりのレアケースなのだ。

「妖獣に殺されかけたって言うのに、判らないものね」

「むしろ、その経験を自らの糧にしているフシが有るの。やっぱり面白そうな奴じゃ」

「面白がる物じゃないでしょう」

「ならば興味深い奴と言い換えておくかの」

「……まったく」

そんな会話を交わしながら、踏み石をたどって庭園を横切つてゆく。

古びた日本家屋の周囲をぐるりと取り囲むように設けられた垣根。その切れ目の位置にある門口の傍らに立っていた兔耳の少女が、二人に気づいて一礼した。

「待たせたわね。それじゃあ、帰りましょう」



「はい。では神楽さん、お邪魔しまし　ぎゃあっ！」

「オウ、斬新ナ反応ウ」

「ちよつと神楽、ウチの弟子で遊ばない」　挨拶代わりに兎耳をキユツと軽く握っては、あうあうと声を漏らす鈴仙の反応を楽しむ神楽。

数回握ってから彼女が手を離すと、よれよれになった片耳がぺたり、と中ほどの部分から折れ曲がった。

手を頭の上に伸ばしてすっかりしおれてしまった耳のシワを伸ばそうとする鈴仙に、そっちの方が似合つとる、と、適当な事を告げて神楽はにっしっし、と笑う。

「それじゃあ、行くわね。何はともあれ、彼に無理をさせすぎては駄目よ」

「うむ、善処しよう」

要するに、思う存分シゴクという意味であるが、その本音は永琳にも通じたようで、はあ、と溜め息が薬師の口から漏れる。

何かあったら頼むぞ、という神楽に、何事も無いことを祈るわ、と返し、薬師は弟子と共に帰宅の途についた。

未だに雪がちらほらと残る道を行く二人の後ろ姿を見送り、神楽は一人鼻歌など歌いながら敷地の西側　修行場の隣に立つ土蔵へと足を進める。

表面に鉄板が取り付けられた重厚な正面扉のかんぬきを外し、同時に保護術式もまた一つ一つ解除してゆく。

最後の術式を解除すると、正面扉は自動的にズズズ、と音を響かせながら左へとスライドし、土蔵の内部が露わになった。

鼻につく埃臭さに顔をしかめつつ、暗い土蔵の中に足を踏み入れ、着物の左袂に右手を差し入れる。

中から引き出したのは数体の紙でできた人形。トカタ

彼女が簡易的な式神として使役する護符の一種である。

それを中空へ放ると、紙人形たちは僅かに空中を漂った後、その剣のように尖った足の部分を下に向けて姿を正し、それぞれの行動を開始した。

ある物は壁に設けられた燭台のろうそくに火を灯し、またあるものは雑然と積まれた様々な物品の中に潜り込んだりと、主が求める通りにその薄い体を翻す。

「……まずは、それが」

呟くと、神楽は壁に据え付けられた巨大な書棚へと歩み寄り、紙人形が示すあたりから一冊の書物を取り上げる。

黄ばんだページを開いてパラパラとめくり、内容を確認すると書棚の前に浮遊している紙人形に御苦労、と声をかけ、左袖の袂へと帰還させた。

「次、……これはまだ早いかの」

続けて違う書棚からも一冊を取り出すが、同様に中身にぞっと目を通した後で元あった場所へと戻す。

手招き。紙人形を呼び戻す。

同じような一連の動作を繰り返した後で、神楽の手の中には数冊の書物といくつかの護符があった。

書物の中に記されているのは霊術の基本。

どれもかつて自ら霊術習得の友として用いた物であるが、長いことご無沙汰だったために懐かしさから自然と笑みがこぼれる。

「よもや教える立場になろうとはのう……」

題目が掠れて消えかけている表紙を愛おしそうな面持ちで眺めながら、彼女はしみじみと追想する。

幣文神楽は妖怪と半人半妖の夫婦の間に生まれ、割合にして七割五分の妖怪の形質と、残り二割五分の人間の形質を持つこととなった。

長い寿命や高い治癒力といった妖怪の形質の元となる妖力と、人間が潜在的に持っている霊力という、本来相容れない二種類のエネルギーを扱う事ができるのは、これが理由である。

しかし、妖怪ならばほとんど労せずして扱う事のできる妖力とは違い、霊力を操るにはそれ相応の訓練が必要になる。

人間ならば勿論のこと、妖怪と人間の混血であってもその原則は変わらないのだ。

更には、訓練を重ねても霊力を制御できるようになるかどうかは

個人の素質に依る部分が大きく、妖怪と対等に張り合えるレベルともなれば、そこまで至るには抜きん出た才覚と相当の努力が必要となる。

そんな理由から、霊力と妖力を共に扱う事ができるという特性があっても、わざわざ好き好んで霊力の習得に努めるより、簡単に扱える妖力を使うことを好む半妖がほとんどだった。

そんな傾向がある中で、神楽は妖力よりも霊力の扱いに力を注いだ。

今彼女の手に収まっている書物のボロボロになった装丁こそが、霊力の扱いを習得するまでの間の長い修練の証である。

「……さて、感傷に浸るのもほどほどにして、行くとするかの」  
神楽はそう独りごちると、手に持った書物を小脇に抱え、ろうそくの火を吹き消してから土蔵の外に出る。

正面の鉄扉を移動させてかんぬきを掛け、防護用の術式を一からかけ直し、足早に修行場へと向かう。

足取りは軽く。

心に浮かぶのは、あの人間はどこまで自分が教えることを受け止められるか、という期待。

当の本人が気付かぬ内に、その頬には柔らかな微笑みが浮かんでいた。

其の閑・ 台所より始まる一挿話（後書き）

遅い、短い、内容がズレかけ、と酷い有り様ですが、なんだかんだで七話目。

2ヶ月かかるってどういふことっちゃって話です。

これから更に更新頻度が落ちますが、忘れ去られない程度のペースで続けて行ければと思います。

其之陸・人間の里、守護者と巫女との邂逅の件（前書き）

亀更新！！

其之陸・人間の里、守護者と巫女との邂逅の件

「 みんなも知っている通り、ここ幻想郷は博麗大結界によつて外の世界から隔離されているが、元から隔離されていたわけではない。元はと言えば

朗、と良く通る声が、閉じられた扉の向こう側から聞こえてくる。

へえ、なるほど、と、その一語一句に耳を傾けながら、手元の紙束をせつせと仕分けて所定の場所に置いて行く。

「 しかし、500年以上前、人間の文明の発達と人口の増加により妖怪の勢力が人間に押され気味だったため、境界を操る程度の能力を持つ妖怪が『妖怪拡張計画』を立案・実行して『幻と実体の境界』という結界を張った

言葉に続いて、カチカチ、とチョークが黒板の上を叩く音。

幻想入りして以来久しく耳にしていない音を久しぶりに聴いて、そついや外じゃ僕も学生だったねえ、と、今更な事を思い出していた。

聞こえてくる内容に合わせて傍にある和綴じの書物のページをめくり、ここ、と思つた場所に付箋を貼り付けていく。

どうでもいい事だけでも、こういう付箋紙つていくつかパツクになつて売られてても、なかなか使い切らずに終わるよね。

「これにより単なる山奥であつた幻想郷は、結界の作用により“幻となつたものを自動的に呼び寄せる土地”へと変化し、外の世界で勢力の弱まつた妖怪が幻想郷へ流れ着くことになつた、という訳だ。……今までの所で、何か質問は？」

はいっ！ と、威勢の良い声上がり、隣の部屋が一気に活気付いた。

生徒の一人が発した質問と、それに応える先生の声を聞きながら、壁に掛けられた時計を見る。時刻は12時を少し回つた辺り。

そろそろ終わりかな、と、周囲に残つた紙束の残りを捌き、整理し忘れが無いかどうかを確認していると、隣の部屋から、

「それじゃあ、今日の授業はここまで。来週は今までにやった内容を覚えているかテストをするから、予習を忘れないように」

というお達しの直後、生徒たちから、えええーというブーイングが発せられるのが聞こえた。

うん。

まあ、そうなるよね。

「きりーっ」

十歳に届くか届かないか、というあどけなさを纏まとつた号令が響き、教室の中が一瞬、しん、と静まり返る。

「れいっ！」

「「ありがとうございました」」

号令係の声の後に、他の生徒たちの唱和が続く。



「うん、ご苦労さま」

その言葉を待っていたとばかりに、ワイワイガヤガヤと、喧騒に満たされる隣の大部屋。

さながら外の世界の世界で、通常授業が終わって放課後へと突入した時のような、開放感に満ちた生徒たちの声が飛び交い、ぱたぱたと畳の上を歩く足音がその後続く。

「けーねせんせー、また明日ー」

「またねー」

「うむ、宿題はちゃんとやってくるんだぞ」

その一言に、うええ〜、と、あまり嬉しくは無さそうな反応を残し、生徒たちが玄関をくぐって出て行くのが判った。

最初はそろそろと何人がずつまとまって。

そしてだんだんと足音がまばらになっていき、やがて最後まで残っていたらしい生徒一人の足音が、ガラリという玄関の引き戸の開閉音にかき消される。

さて、という、つい今し方まで教室となっていた大部屋の方からそんな声が聞こえ。

ズズズ、と隣の大部屋と僕が居る部屋を隔てる襖が開けられた。授業で使ったのであろう、古びた装丁の本を抱えながら部屋の中に入ってきた人物に声をかける僕。

「こんな感じですが、とりあえず書類の整理は終わりました」

「悪いな。しばらくの間手が付けられなかったから、かなりの量だっただろう?」

「かなり大ざっぱかもしれないですが、……問題あったらすみません」

「いやあ、片付けてくれた事に文句は言えないよ。有り難う」

そう言って、両手に抱えた書物を机の上に置きながら、微笑む。

竜胆色のワンピーススタイルの服に身を包み、青みがかった長い銀髪の上に特徴的な形の帽子を載せた、中性的な言葉遣いの女性。

名前を、上白沢慧音という。

ここは妖怪やら魑魅魍魎やらが跋扈する幻想郷の中でも、人間にとって数少ない安全地帯である人間の里。

彼女は、その里の守護者であると共に、寺子屋を開いて里の子供たちに教育を施しているのである。

専門は歴史らしいが、読み書き算盤といった、生活に必要な事柄も教えているとのこと。

先生と呼ばれる人、第二号である。

「待たせてしまったな。案内がてら、お昼でもご馳走するよ」

「いや、そんな……」

「なに、整理を手伝ってくれたお礼だ。さ、行こう」

「は、はあ。有り難うございます……っと、先生、」

「何か?」

書物を書棚へとしまいながら僕を促す彼女に、机の上に開いてあった一冊の草紙を見せる。

それは歴史の授業に使われるテキストで、十ページほどに渡ってあちこち付箋をつけてあるもの。

「……これは？」

ぺらぺら、と、ページをめくりながらの問いに、簡潔に答える。

「今日の授業を聞いて、次回のテストのヤマを張ってみました」

僕が言うと、えっ、と小さく声を漏らしつつ。

「……何故分かるんだ？」

少し驚いた表情を浮かべる先生。

「まあ、授業を直接見ていた訳じゃないですから不確かですけど  
」

僕はしたり、という内心を隠しつつ、そう前置きしてから続ける。

「授業中に強調して説明していた所と、その他、このテキストそのものの文脈上で重要かと思う点を取捨選択してみました。」

ちなみに、付箋の色は赤、黄、緑の順で優先度が高くなっています。僕の発言に、ページをめくりながら付箋紙の位置を確認していく先生。

あらかた確認を終えたところで、顔を上げる。

「凄いな……完璧には行かないが、七割方出題しようと思ってる部分と重なっている」

「よっしゃ！」

幻想入りしてしまった以上ぶっちゃけ使うアテのない物であるが、テスト関係のヤマを張るのは僕のちよつとしたスキルである。

お陰様で暗記モノの教科（特に社会科）はかなり楽でした。久々にやってみたのだが、カンはやがて衰えていないようだ。

「まあ、今日1日分だけですから、予想範囲も狭いんですけどね……」

「いや、これはこれで凄いなと思うぞ。赤の付箋をたどるだけでも十分対策になる。……念のため言っておくけれど、生徒たちには言わないよ？」

「いや、さすがにその点はご心配なく」

「そうしてくれ。あくまでも公平な力試しにしたいからな」

情報漏洩を防ぐ為、ページから付箋を一つ一つ取り外してゆく。

クシャクシャ、と丸めてゴミ箱へ、と行きたかったが、外の世界から持ち込んだ貴重（？）な代物である。

別に一度貼って剥がした程度で元からあまり強くない粘着力が落ちる訳でもないのです、一枚ずつ台紙にくっつけ直した。

もったいない精神の実践だね

そんな件くだりの後、先生に促されて寺子屋を出た僕は、目の前に広がる人間の里の風景を改めて眺め回っていた。

先刻の歴史のテキストでも読んだのだが、幻想郷が隔離されたのは一世紀以上前の明治時代のこと。

当然ながら、里の町並みや往来に行く人々の姿もまた当時の形を

保っている訳でありまして。

「そう言えば君は、里に来るのは初めてだったな。外の世界とは勝手が違うかな？」

「ええまあ。……予想はしてましたけど、やっぱり驚きました」  
木造の平屋が立ち並び、それに挟まれた道を、和服姿の皆さんが闊歩する光景。

外の世界で見た時代劇モノのドラマや映画の中に迷い込んだみたいである。

流石にみんなザンギリ頭だったことに、何とはなしに安心。

「タイムスリップでもしたみたいですよ」

「そう表現した外来人も、君が初めてではないな」

やっぱり皆似たような反応をするんだなあ、とそんな感想を抱きながら、ふと気になったことを訊いてみる。

「あー、……今更ですけど他の外来人達はどのくらいの頻度でここに来るんです？」

「大方年に一人か二人。時たままとまって何人か、といった所だよ。まあ、大抵は一週間ほどで外へ帰って行くがね。……君がそうしないのには、何か理由があるんだろう？」

「僕は……」  
「いや、良い。君の考えをあれこれ詮索するつもりは無いよ。不躰なことを訊いたな」

誰しも自分の中にだけ仕舞っておきたいものはあるだろう。と、本当に済まなそうな様子で言う彼女に、気にしないで下さい、と返す。

「何はともあれ、案内よろしくお願ひします。上白沢先生」

「おいおい、私は君に教えたことなど何も無いよ？ それに、わざわざ名字で呼ばなくても良い」

「いやあ、何となく“さん”付けだとしつくり来ないような気がするんで」

八意先生同様、イメージ的に。

「……そ、そうか。なら名前で呼んでくれれば良い」

“上白沢先生”は、なんだかむず痒い。と、言葉を続けて、彼女は歩き出した。

お昼時だからだろうか。朝、神楽さんに連れられて里に足を踏み入れた時と違い、人通りは比較的少ない。

一歩進む毎に、先生の帽子のてっぺんにある房飾りがひよこひよこと揺れ動くのを無意識に目で追いながら、その斜め後ろにくっついて歩いてゆく。

里の人々は、慧音先生の姿を認めると大人子供の区別無く、挨拶をしたり会釈したりしていた。

慕われているということが、初めて来た僕にも良く判る。

ここは八百屋の畝傍さん、あつちは道具屋の霧雨さん、と、立ち並ぶ商店の一軒一軒を示しては説明を添えてくれる先生に、相槌を打ちつつ進む。

「そう言えば、神楽はどうしたんだ？ 君を預けてすぐ、そそくさと何処かに行ってしまったが？」

唐突に、先生はそんなことを訊いた。

「僕も詳しくは聞いてませんが、妖怪の山の方に用があるとか何とか……何の用事だか分かりますか？」

「妖怪の山……河童か天狗にでも会いに行くのかな？」

その言葉に、へえ、そうなのか。と、納得しかけてから、

「ちよつと待って下さい。居るんですか、河童？」

つい今し方耳にした衝撃の事実を再確認すると、先生は至極自然な調子で、

「天狗もだ」

と、付け加える。

「……マジですか？」

「真面目な返答をしたつもりだが？」

日本が誇るUMAがここにいる。だと……。

……。

な、なんだって!?

「念の為言っておくが、ここは幻想郷だぞ」

何を今更、とでも言いたげに肩を竦める慧音先生。

そうか幻想郷なら仕方がない。

というか、かなり身近に幣文神楽よつかいがいるのにも関わらず改めてその意味を理解したよ。

「すげえな幻想郷」

「すげえつて、……神楽から聞いていないのか？」

幻想郷さんマジばねえっすオーラをまとう僕の発言に、やや呆れた様子の先生。

「人間と妖怪が共存してる、だとか、かなりアバウトな内容しか聞いてないです」

霊術関係なら頭が痛くなるぐらい聞きましたが、と答えると、全くあいつは……、という台詞と共に先生は頭を抱えた。

「幻想入りしたての外来人に話す内容じゃないだろうに………君も君だぞ。外に帰らないと決めたのなら、少なくとも自分がこれから暮らしてゆく場所の情報を得ておく事ぐらいしなさい」

「す、すみません……」

怒られた。

それこそ寺子屋の生徒たちみたいに。  
やっぱり呼称は慧音先生で決まりである。

「それにしても、河童に天狗ですか……本当に居るんだ……」

「まあ、元来人間には畏れられていた存在だ。君にも少なからずそういう思いは有ると思うが」

「いえ、逆です」「逆？」

「超会いたい」

「……………」

僕の発言に対し、何だか形容し難い表情を浮かべながら再びこめかみの辺りに手をやる慧音先生。



「頭痛ですか？」

「……いや、心配しなくて良い」

何だか、神楽が君に目を付けた理由が分かる気がするよ、と、そんな事を述べつつ彼女は再び案内を始めた。

神楽さんが僕を居候させているのは、単に僕的能力に興味を示したからだと思っけれど。

他に何か有るのかな？

「そろそろお昼にしよう。蕎麦で良いかな？」

しばらく里の商店やら何やらを案内された後、先生はとある蕎麦屋の前で立ち止まった。

そうしましょう。と、二人並んで『蕎麦』と大書きされた暖簾をくぐる。

らっしやい！と、店主の威勢の良い挨拶に出迎えられ、少々気圧されつつ店内を見渡す。

「私は掛け蕎麦。君はどうする?」

「僕も同じく」

「それじゃあ親父っさん、掛け蕎麦2つ頼むよ」

注文に、へい、と返して蕎麦を茹で始める店主。

裏方の厨房を覗き込んで見ると、掻き入れ時ということもあってか、既に鍋の中のお湯はぐらぐらと沸騰している。

危ない手つきで蕎麦が鍋の中へと放り込まれてゆくのを見ながら、今度は蕎麦でも打ってみようかな、と、知らず知らずの内に触発されている自分に気づいた。

……別に料理人目指してる訳じゃないんだが。

「おーい、要君」

ぼけーっと突っ立っていると、奥の席からお呼びがかかった。

こつちこつちと手招きしている慧音先生の姿を認め、そそくさとその向かいの席に座る。

左手の革靴を座敷席の座布団の隣に置き、頭に被った烏打ち帽を取って一息ついた。

「慣れない環境で、疲れたかい?」

「そんな事を言ったら、幻想入りしてから今までの間に過労死してますよ」

別に何かしら働いてる訳じゃ無いが。

「……神楽の“霊術教室”か」

「何だか知りませんが、能力が判った途端にシゴかれて。毎日が知恵熱との闘いです」

「あー、……やはりな。そんなところだろうと思ったよ」

悟ったような顔で卓上に置いてある水差しに手を伸ばす慧音先生。やりますよ、と手を伸ばす僕を制して湯呑みに水を注ぐ。

「やはりって、僕の前にもこういうことが？」

「流石に自分の家に居候させてまで、というのは初めてだけれどもね。里の子供達に隙を見て教えては、私がやめさせる、の繰り返しだ」

差し出されたお冷やお礼と共に受け取り、一口含みながら、思い至る。

あれ？ やめさせるってことは……。

「人に教えちゃ駄目なんですか？」

「何もかも駄目とは言わないが……アイツの場合は相手の年齢を考えないから問題なんだ」

「はあ……」

判ったのか判っていないのか疑わしいであろう僕の相槌に、先生は人差し指を立てながら解説を加える。

「考えても見たまえ。例えば、君が大体10歳ぐらいの少年だったとする。同年代の友人達と意見が対立して、腕力に訴えようと考えるに至った。

いや、勿論君がそういう人物だと言っている訳では無いがね

その時君は、靈術というものの存在を知っていて、尚かつ実的に扱う事が出来るとしたら、それを使わずに居られるかい？」

しばし黙考。

10歳といえは小学校中学年辺りである。

某忍者アニメとか、某海賊アニメとかに没入している頃合いか。厨二病レベルとまでは行かずとも、その年代の子供達の思考を察すれば。

「少なくとも、使わないとは言い切れないですね」

僕の答えに、そうだろう、と、まさに教育者然とした口調で言葉を続ける慧音先生。

「私が危惧しているのはそこだよ。

多分に私見が含まれるけれどね、“力”と名の付くものは自分、もしくは自分が護りたいと思う事物を守るために振るわれるべきものだ。

その意味を解せずに“力”を振るうなど、正気の沙汰ではない。

仮に、自ら“力”を行使しなければならぬ状況が訪れたとしても、“力”を行使することで相手に、そして自分自身にどのような結果をもたらすか。それが理解出来ていなければ、赤子が戯れに棒切れを振り回すのと、何ら程度に変わりは無いだよ。

里の子供達には、正しい“力”を身に付けて欲しい。それが肉体的なものか精神的なものかに関わらず、ね。

それだというのに神楽の奴は面白半分には……」

一息にそこまで喋り通してから、はた、と言葉を切る先生。

ただただ聴き手に回っていた僕が目をぱちぱちさせているのを見て、気まずそうに頭を掻く。

「……やれやれ、日頃の授業のせいかな。説教臭いことを垂れてしまった。おまけに最後はただの愚痴だし……」

「いえ、そんなことは……。身につまされました」

上っ面だけの感想ではなく。

本当に、身につまされる。

「ははは、まあ、そう言って貰えば、教師冥利に尽きるかな。

……お、蕎麦が来たみたいだ」

湿気た空気を振り払うようなタイミングで注文の品が到着し、僕と慧音先生の間で醸し出されていたオーラも改善された。

ナイスタイミングである。

気前の良さそうな雰囲気のおかみさんが運んでくる漆塗りの盆の上に、湯気を立ち昇らせる井が2つ。

無意識につけ汁はどんな感じかと気になってしまつのは、十中八九我が師匠のせい。

おかみさんに会釈を返しつつ井を受け取り、卓上に並べる。

差し出された箸 当然ながら外にある使い捨ての割り箸ではなく、きちんとした塗り箸である を受け取り、二人同時に両手を合わせた。

いただきます、と、唱えてから箸を取る。

麵をほぐしてつゆに絡めている僕の目の前で、箸に挟んだ細い麵を数回吹いてから一息にすすり、先生は顔を綻ばせる。

「うん、いつ来てもここの蕎麦は美味しい。……どうした、食べないのか？」

「いやあ、猫舌なもので……もう少し冷ましてから頂きます」

なかなか口を付けない僕を見て、怪訝そうに尋ねる彼女に告げ、お冷やを口に含みながら箸で麺をかき回し、出来るだけ熱を取ろうと無駄な抵抗をする。

暖かい料理が食べられない訳ではないが、“熱々”レベルはあまり得意ではない。

この前のうどんの時に“程良い温度”に調製していたのもそのためである。

本心を言えば空腹感もそれなりなので、今すぐにも胃袋の中に投入したのであるが。

何だかお預けを食らった気分。

「暖かいものが食べたかったんで、掛け蕎麦というチョイス自体には問題ないんですけどねえ……」

「猫舌が邪魔をしている、と」

「まあ、そういう訳です」

言いつつ、細長い麺をつゆの中から引き上げては戻し、というのを繰り返す。

あまりマナーの観点からは良いとは思えないが、こうでもしないと熱が取れるよりも麺が伸びる方が早いのだ。

「先に頂いてるよ？」

「ええ、僕には構わずお先にどうぞ」

それなら、と、再び蕎麦をすすり始める慧音先生。  
そのシーンを見ているだけで空腹感が先程比一、五倍くらいに増  
強される。

箸で麺をかき回し、出来るだけ空気に触れさせようと悪あがきを  
する僕。

が、目の前の人物がスムーズに蕎麦を咀嚼しているその様子に、  
ついに熱さへの忌避感よりも食欲の方が勝った。

配膳された時よりはいくらか落ち着いたものの、まだほかほかと  
湯気を上げる丼の中身。

まだ早いと長年のカン（謎）が告げていたが、華麗に振り切っ  
て箸を中へと伸ばす。

麺つゆの中から一口分の麺を引き上げると、それに呼応するかの  
ように新たな湯気がふわりと立ち昇った。

内心かなりビクビクしながら、ゆっくりと箸先を口へと近づけて  
ゆく。

その先に待っているであろう熱量からの無言の圧力（笑）を感じ、  
思わず寸前で箸が止まる。

何をモタモタしている！たかが蕎麦程度の熱さを恐れるな！  
と、なんだか良くわからないノリですぐさま自分を叱咤。

意を決して鶴翼陣形を構える熱量という名の不可視の敵のただ中  
へ突撃する

「熱っ」

戦況報告。

あえなく惨敗だった。

予想はしていたため大声で叫ぶようなことがなかったただけまだマシか。

(熱さが)残ってやがる……、早すぎたんだ……。  
忌々しい。ああ、忌々しい。忌々しい。

と、苦々しい思いで箸の先端からぶら下がる麵を睨み付けていると、井の向こうから聞こえる、くっくっく、という異音。

というか、箸を持った右手で口元を隠しつつ笑いをこらえる慧音先生が、目の前にいた。

「……笑わないで下さいよ」

「ふふ、いや済まない……しかし……くふっ……眉間にシワを寄せながら、はははっ……一言ボソツと“熱っ”て……ふふははは」

なんだか知らないが笑壺に入ってしまった、笑ってコラエて状態の慧音先生。

おのれ熱量。

僕の舌に物理的なダメージを与えただけならまだしも、こんな精神攻撃までもたらすとは。

やはり彼らとの和解は有り得ないな。

「やれやれ、笑った笑った」



「……お喜び頂けて何よりです」

しばらくして笑壺から脱却した先生に、慥然と告げる。

ぶすつとした表情つて、多分今の僕みたいなのを言うんだろっね。

「悪かった。教育者にもかかわらず失礼した」

「……まあ、そういう反応自体、初めてのことじゃないですから怒りませんけど」

「ご免。……しかし要君」

「何でしよう?」

「成長するにつれ熱いものにも耐性がつくと思うのだが?」

「う、……どーせ僕ぁ子供舌ですよ」

「いや、……だがそれも悪いことばかりではないと思うぞ」

「フォローしないで良いです。余計恥ずかしい」

右手では箸を操って蕎麦に空気を送り込みながら、お冷やを口に含む。

「……本当、猫舌治す薬とか、有れば欲しいモンですよ」

「別に治さなくても良いと思うが」

「え?」

「だって可愛いじゃないか」

「うふっ!」

慧音先生の一言に盛大にむせた。

「それは……げほっ、一体どういう?」

ゴホゴホとえずきながら、なんとか声を絞り出す。

「君は、なかなか大人びた子なのかと思ったのだが……。  
意外に猫舌で熱モノに弱いとは、ね」  
見かけによらず可愛いところがあるじゃないか、と、慧音先生。  
ムッフ笑いは止めて。

要するに、世に言うギャップ萌えという奴だろっか？  
……自分、男なのですが。

「……可愛いなんて、良い年こいた学生崩れに言う文句じゃない  
でしょうに……」

少なくともその形容が許されるのは十年ほど前までです、と、左  
手の手のひらを井の上にかざしながら言う。

いい加減程良く冷めてきたように感じられたので、素直に箸で蕎  
麦をつまみ上げ、改めて口に運んでみた。

「お、美味しい」

猫舌とはいえ熱量さえ無ければ普通に食べるのである。  
ズズズ、と、一口分をすすって咀嚼。

思えば蕎麦を食べるのも年末の年越し蕎麦以来。

随分久しぶりのことだった。

うどんに続いて蕎麦も打ってみますかねえ、と、無駄なチャレン  
ジ精神を掻き立てられつつ、飲み下す。

うどんのそれとはまた違ったのどごしと共に、蕎麦は胃袋へ。

「しかし、そんなに気になるものかな？ 少し熱いぐらいが丁度  
良いと思うぞ？」

「……確かに良く言われますけど、やっぱり嫌じゃないですか。舌火傷しそうですし」

あのヒリヒリした感覚とか特に。

ウザさのレベルで言えば、口内炎が糸切り歯の辺りにできるのと同じくらい。

「それより、子供舌のくだりで思い出したんですけど……」

「コーヒーが飲めなかつたりするのかい？」

「コーヒーぐらい飲めますよ！……そうではなくて、年齢の話です」

ていうか、何故にコーヒー。

「年齢？」

「ええ。ぶつちやけた話、僕は霊力の使い方を学んでも問題ないんじゃないか？」

対象年齢に入ってます？」

里の子供たちには制限が掛けられているということらしいが、僕に対してはそのルールはどうなるのかって話である。

「ああ、それについては気にする事はないよ。止めるとは言わないし、制限もしない」

井の半分ほどを既に空にしながら答える慧音先生。

具体的に理由が知りたくて、僕は重ねて問いかける。

「良いんですか？ 里の子供たちと比べても精々五年ぐらいしか変わりませんか？」

「五年もあれば、状況判断ぐらい一丁前にできるだろう？」

やたらめつたらに力を振りかざすようなことがあれば別だが……

少なくとも君はそんな事はしないとと思うし」

「言い切って良いんですか？」

見かけによらず嗜虐<sup>サディスト</sup>趣味かもしれないでしょう？」

「そうなのかい？」

「いえ、言葉のアヤです」

「だったら良いじゃないか」

端的に結論付けて、再び井に向かう慧音先生。

淀みなく言い切って蕎麦をすする様子からして、その主張に迷いはないのだろう。

そうとは言っても。会ってまだ数時間しか経たない人間をそこまで信用して良いものか、と、既に湯気がほとんど消えた蕎麦を前にして考える。

普通はもう少し相手の事を知ってからじゃないだろうか？

「これでも人を見る目はあるつもりだよ。ほら、冷めるならまだしも、麺が伸びては美味しくないぞ」

井の上に視線を落としたままの僕の思考を読んだかのように述べると、先生はズズズと、勢い良く蕎麦を吸い込む。

なんとなく、だが。

言外に心配するなと言われているような気がして、僕は頭の中の疑問を押しやると、程良く熱の取れた麺を口に含んだ。

「さて、里にある店は大体こんなところかな。見て分かったと思うけど、日常生活に必要なものはほとんど手に入るから、欲しいものがある時は探してみるといい」

「はい。……とは言っても、僕一人で里まで来られるか分かりませんが。道中が昼間なら良いんですけどね」

夕方頃になると妖怪が出没し始める。

大体がフライング気味の弱小妖怪らしいが、たとえ“弱小”でもただの人間からしてみれば十分生命の危機になりうる訳で。

幣文邸は里から四十分ほどのところにあるので、安全策を取るとすると午後4時ぐらいが道中に居られる時間のボーダーになるか。

つまり、夕食の準備のタイミングで『材料・調味料が足りない！』、なんてことが起きても即座に買い出しには行けないのである。一番手っ取り早いのは神楽さんに付き添いを頼む事だが、あの人の場合『めんどい、明日でよかる』の一言で斬り捨て御免になりそうだ。

「そのためにも、そこらの妖怪から逃げられるくらいの霊術を身に付けることだ。」

里の子供たちならともかく、君の住んでいるところは妖怪のテリトリーのただ中だからな」

「……ていうか、そもそも妖怪のところに人間が居候ってどうなんでしょう？」

神楽あのみづかじさんが人間を喰う光景つてのも想像が付かないが。

元来、妖怪は人間を喰うものである。

現に幣文邸で初めて目を覚ました時、妖怪うんぬんについて本人に尋ねたところ、キツパリと彼女自身食べると明言していた。

「まあ、あいつのことだから君を襲ったりはしないだろうが……  
どうしても心配だったら、里に移ってくることを薦めるよ」

「いや、本人に食べるかどうか訊いたら、『骨と皮ばかりで不味そう』という有り難い評価を頂きましたから、大丈夫でしょう」

ついでに、『ワシは美食家くわめじゃからの〜』という、間延びしたコメント付き。

ナメた自称の一方、料理の腕前だけはどこかの板前さんも包丁をほっぽりだして逃げ出すようなレベルときている。

神様って不公平。

そうとは言うものの、やはり潜在的な恐怖感とまでは行かないまでも、いくらかの不安感が無いとは言えない。

何せこちとら幻想入りしてすぐに妖獣に殺されかけた身。

ぶち切られた腕そのものは八意先生の治療でほとんど元通りになったが、ごくごく稀に一瞬だけ、その断裂面であった肘の辺りに針で刺すような痛みが走ることがある。

頭では『妖怪が人を食べる』という事実ルールを受け止め、分かったつもりでいても、脳細胞の奥底にくすぶるあの神経が焼き切れるかと

思つような痛みや、濃密な死の気配の記憶を完全に上塗りすることはできないのだろう。

おそらくは、この先ずっと。

そんな訳で。

まさか（捕食的な意味で）寝込みを襲われたりはしない……よね？と、自分に言い聞かせながら日々眠りにつくぐらいにはビビっている文成要君であった。

考えてみれば、失礼な話である。

妖獣のあぎとから救い出してくれたのは、他でもない幣ヒツカ文神楽だというのに。

妖怪に対して恐怖感を抱きつつも、一方では会ってみたいと、ただ好奇心からそんな事を考える。

浅はかで、矛盾した思考。

全く、何て

「要君？」

「は、はい!？」

突然の声。

思考の渦から意識が呼び戻される。

呼び掛けられて顔を上げてみると、慧音先生が心配そうな面持ち

でこちらの顔を覗き込んでいた。

「大丈夫か？」

「……すいません、ちよつと考え事を」

「何か気になることが有るなら聞くけど？」

「い、いえ、何でもありません。大したことじゃないですからそれより、早く行きましょう」

僕の目を真っ直ぐに見据える慧音先生の双眸。

清流のように透き通った両の瞳は、心の奥底に渦巻く矮小な矛盾をも暴き出してしまっている。

精神の動揺を無理矢理に笑みを浮かべて誤魔化し、先生の視線を振り切るかのように歩を進めた。

ふう、と、目を閉じて深呼吸しながら、逃げるように足早に歩き出す。

いつも霊術制御のときにやっている精神統一と同じ感じで、先生に気取られない内に気持ちの落ち着けようとしたのだが、直後、この行動が逆に仇となった

「ちよつと待て要君、前！」

慧音先生の声に、閉じていた目を見開くと、目の前にはでっかい信楽焼のタヌキの置物が鎮座ましましていた。



「っ、と！」

大人が一人で抱えきれるかどうかが怪しいサイズのそれと正面衝突しかけ、慌てて身体を捻る。

派手にバランスを崩しながらもどうにか衝突は回避でき、事なきを得られなかった。

タイミングの悪いことに、タヌキを回避したのは良いが、派手によろけた先には丁度店の中から出てきた一人の少女の姿が。再び身体を捻る。

結果として、正面衝突から生じる一昔前の漫画みたいな事態は避けられた。

しかし、タヌキをかわした時の慣性を殺しきれないまま再び身体を捻ったことで、僕の身体に掛かる運動のベクトルの釣り合いは大きく崩れ、重力に牽かれるがままに地面へと体勢が傾いてゆく。

防衛本能が速やかに反応を示し、片足を大きく踏み出して倒れゆく肉体を支えようと試みた。

が、残念ながらスニーカーの靴底が捉えたのは地面ではなく袴の裾。

後はどうなるか分かるよね。

ドグシャアッ、と。

それこそどこぞのバトル漫画に出てくるような効果音と共に、地べたに叩きつけられる、痛い男こと文成要。

ついでに、タヌキの隣に並んでいた桶やら何やらを巻き込んだため、余計に賑やかになった。

擬音語を使つて表現すると、どんがらがつしゃんの賑わい。

「痛つててて、……あら？」

うつ伏せに倒れ込んだ体勢から頭を上げようとすると、何やら随分と重みを感じる。

重みの正体を振り落として確認すると、それは金だらい。

最早ドリフである。

このような場面で呟くべき台詞は一つしか知らない。

「ふ、不幸だ……」

どうでもいいけど、某幻想殺しはこんな目に日々会ってるわけだ。しかし対価としてあのフラグ。妬ましい。

「大丈夫か、要君？」

「………なんというか、凄い転び方だったわね」

声と共に差し出された慧音先生の手を借りて、よっこらせ、と立ち上がる。

「全く、すっかり前を見て歩きなさい」「どうも、お騒がせし

ました」

柔らかい手の感触に内心ドキリとしながら頭を下げた。

直後、衝撃音を聞きつけて店の中から飛び出してきた店主のおっちゃんに事情を説明し、謝罪。

幸いにして壊れてしまった物は無かったのであるが、白昼の往来での出来事と言うこともあって、ちよつとした人ばかりができてしまった。

意図せず顔を覚えられたかもしれない。

どうもお騒がせしてすみません、と、店主のおっちゃんに謝ったところ、がっはっは、と、帰ってきたのは豪傑笑い。

まあこれから気を付けるよ坊主、と、僕の肩を叩くと、店主は特に怒ることもなく、ガハハと笑いながら店番に戻っていった。

なんつーか、おおらかな人だ。

「いやあ、初っ端から悪目立ちしたなあ」

「……意外とそそっかしいところも有るんだな、君は」

慧音先生の僕に対するイメージが着実に更新されていく。

不相应にマセた評価をされるのはどうかと思うけども、よほどガキっぽく見られるのも……。

他人にどう見られるか気にしない訳にもいかないし。

難しいところである。

「で、慧音、見ない顔だけど何者？」

「つい半月ほど前に“外”から来た子だ。今は知り合いの妖怪のところへ厄介になっている」

と、そんなやり取りが聞こえて視線を移してみると、先程僕がぶつかり掛けた少女の問いに、慧音先生が答えているところだった。

「……文成要、只の人間だ。お前さんは」

目の前に立つ少女の容姿を観察し、若干戸惑いつつも一つの予想を導き出す。

もの凄く不確実な予想だが。

「巫女……か？」

「そ、博麗神社の巫女、博麗霊夢よ」

とりあえずよろしく、という言葉に、こちらこそ、と返しつつ、改めて少女 博麗霊夢の姿を眺める。

すらりと整った顔立ちと白磁のようにきめ細やかな白い肌。幻想郷の基準がどうか知らないが、少なくとも外の世界ならば、間違いなく美少女に分類されるであろう。

歳は十代前半、といったところか。

上着は紅を基調とし、セーラー服に付いているような白い襟元には黄色いリボンが映える。

下は洋服のスカートにも和服的な緋袴にも見えだが、裾から白いフリルが覗いている事からスカートと断定。

足元は草履かと思いきや黒のローファー。

漆黒の髪を大きな紅いリボンでポニーテールのように結び、その顔のサイドに垂れている髪も同じような意匠のリボンで纏められている。

特徴的なのは、その服の袖か。上腕部を包む布はなく、二の腕の辺りから先を覆う白い布地がくりつけられているだけで、脇が大きく露出していた。

寒く無いのだろうか……じゃなくて、本当に、巫女？

いや、紅白だからそう見えなくもないけども。

巫女か？ 巫女なのか？

……まあ、本人がそういうんだから巫女なんだろう。

「私の顔に何か付いてるかしら？」

「っと、悪い」

無遠慮にじろじろと観察していたら、流石に迷惑そうにたしなめられた。

慌てて視線を逸らすと、何やら訝しげな視線を向けながら博麗霊夢は口を開く。

「慧音の話聞いた限りじゃ、アンタ外来人らしいけど。“外”に帰らなくて良いの？」

「諸事情有ってね。しばらくは厄介になる予定だ」

具体的な期間など決まっちゃいないが。

慧音先生の時のように、帰らない理由を問われたらどうしようかと、内心気に掛かったのだが、予想に反してそんな質問が投げかけ

られることは無かった。

「別に私は構わないけど、ま、妖怪には食べられないよう気を付けなさいな。」

「帰りたけりや神社まで足を延ばせばすぐにも帰せるから、幻想郷を出たくなったらウチまで来て。」

「私から言えるのはそれだけよ。」

「じゃ、気が向いたらそうさせて貰おう。」

簡潔に注意点だけを述べる巫女（仮）に内心安堵しながら、社交辞令的に言葉を返す。

「話は変わるけど、アンタ外来人のくせに服はこっちの物なのね。」

「おかしいか？」

「私が見た事のある外来人は大体洋服だったけど。」

六十過ぎのおばあさんが着物だったのが、数少ない例外つてここ

「……生憎と、ここに着てきたのが普段着じゃなかったんだ。こいつは借り物だよ。」

剣道着も和服みたいなもんじゃん、という考え方は、実際のところ通用しない。

元が動きやすさや放熱性を優先しているあれの性質からして、当然のことながら、その保温性はお世辞にも良いとは言えない。

今は2月の上旬。

暑さにつだる夏場ならいざ知らず、まだまだ寒さの残る時期に、地肌の上にそのまま上衣を着るあの服装で外を出歩くのは色々と不自然だ。

まあ、袴の方を身に付けるのはまだ分かるが。

「妙に着慣れてる感じがするあたり、なんか外人っぽい感じがしないんだけど」

「別にこれぐらいなら着付けを習うまでもないさ。全く違う文化圏の衣服という訳でもないしな」

現時点での僕の服装は、言うなれば明治時代の書生さんスタイル。冬物の小袖の下に肌着の短襦袢を着て、下は袴。頭の上に烏打ち帽を載せ、左手にはレトロな革鞆。

草履の代わりに外から持ってきたスニーカーを履いた点を除けば、竹刀を振る時の服装とあまり変わらないのも事実である。

自分としてはあまり嬉しくはないが、剣道関係のスキルが微妙な所で役立つているとは。

何だか皮肉だ。

それが嫌なら武道の選択は柔道にでもしておけば良かったか、とも思うのだが、その場合は、下手すれば柔道着で幻想入りかつ、あの狼の妖獣と徒手空拳でやりあうことになるわけで。

学校行事の寒稽古でのチョイスをミスっていたら、今この瞬間にこうやって生きてはいられなかったかも知れないというのだから、別に人生とは不思議なものである。

「もう少し奇抜な格好の方が良かったか」

「生理的に受け付けない格好だったら、アンタの都合を無視して“外”に叩き出すわよ？」

「普通の服良いね！ 普通最高！」

言葉尻に本気が混じっていたので、強引に軌道修正。

つか、服に関して目の前の巫女には言われたくないが。

「そういえば霊夢、一寸訊きたい事があったのだが」

唐突に、僕が話を逸らしたタイミングを見計らって、慧音先生が口を開いた。

「何よ？」

「スペルカードルールについてだ。妖怪達の反応は？」

無愛想に促す巫女に対し、先生は幾分か真剣な面持ちで問い掛ける。

スペルカード、というワードを聞いて、僕も会話には参加しないものの耳を傾けた。

「反応、ねえ……。今のところ目立った反対意見は聞いていないけど、天狗の新聞を読む限りじゃ、あっち側も賛否両論ってとこね」

「予想はしていたが……。やはり受け入れて貰うには時間がかかるか」

腕を組みながら言う慧音先生に、それは人間の側も同じでしょ、と返して博麗霊夢は言葉を続ける。

「ルールそのものの理念とかは理解してるようだし、ウケも良さそうだけど、定着するのやら……」。



有効かどうかは、本格的に異変が起きてみないと何とも言えないわね」

言うだけ言って、それじゃ、と、巫女はこちらに背を向けた。

「どこに行くんだ？」

「神社に帰ってお茶」

言つが早いか、そそくさと歩き出す巫女・霊夢。

奔放な奴、という感想を抱きながらその背中を目で追つ。

と、

紅白の巫女装束が、ふわり、と、中空に浮いた。

「はい!？」

慌てて目をこすって見るが、重力を無視して足場も何もない空間に漂う少女の姿は、幻覚でも何でもなくそこに存在した。

「ちよつ、ええつ　!？」

慌てて能力を発動させて、おめでたい配色をした少女の姿の上に焦点を合わせるのと、少女が涼しい顔で、すいーつ、と空を横切つて行くのは同時だった。

「……………」

啞然。

開いた口が塞がらないとはこのことだ。

「全くあの巫女は……いつも通りと言えばそれまでだが……。  
さあ、戻って来い、要君」

「いや、意識は有りますからね……」

ぼけつとしていたらそんな事を言われたので、ぐんぐん遠ざかってゆく紅白の巫女装束から視線を外さずに応える。

「……慧音先生」

「何か？」

「……幻想郷の住人はみんな生身で飛べるんですか？」

幻想郷に来て最初の日、魔法の森をさまよっている最中に見かけた魔女らしき人影を脳裏に思い浮かべながら、僕は言葉を絞り出した。

「みんながみんな、という訳では無いが……。妖怪はほとんどが妖力を使って飛ぶし、彼女のような妖怪退治の専門家なら、人間だろうと飛べるよ」

「先生も、ですか？」

訊くと、彼女は僕の目の前で緩く両手を広げる。

まじまじと見つめる僕の目の前で、先生の体がふわり、と、上昇した。

驚いて後ずさる僕の目の前で、丁度不可視の踏み台に両足を載せたような具合に空中静止。

数秒間それを保った後、吊り下げものの糸がぷつりと切れるように先生の身体がストンと地面へと降り立つ。

「まあ、こつという感じだな」

「……」

なるほど、わからん。

(主に原理的意味で)

否、一つだけ分かる。

「百年経っても僕には無理だろうということが分かりました」

「そんな事はないと思うぞ。あの神楽が目を付けたんだ。練習を積みめ君にだって不可能じゃない」

「……さつきあの巫女が飛ぶ時に見えましたが、霊力の量が半端じゃなかったですよ？」

僕はアレの一千分の一も出せません」

見るからに、溢れんばかりの、という形容が前にくっつくであろうほどの量。

いつも僕がかき集めにかき集めてようやく作ることができる霊力球を、黒鉛の小さなカケラとすると、さつき見えたのは大粒のダイヤモンドと言えるか。

元をたどれば同じ炭素　　霊力　　の塊でも、質・量共に桁違いの代物だった。

能力を通して視ると、どうやら霊力の存在だけでなくその“純度も窺い知ることができ(らしい)のだが、見たところ量に質が

追いついていないといった様子もなく。  
まさに万能。

「……彼女、人間ですよね？」  
「勿論。ただ」

何を当たり前の事を、とても言いたげな顔で続ける慧音先生。

「普通の人間以外の人間だな。アレは」  
「ちょ、それ絶対人間の部類じゃないです」

つまりはあれか。  
妹紅さんやら永遠亭の姫様みたいな部類？

……いや、あの二人は蓬莱人だからまた意味が違うな。

「ちょっと待て要君。君、まだその件は知らないはずだろう？」  
「つと、マズい。ストーリー進行に響く」  
「メタ発言である。」

読み返すのダメ。ここから先は一方通行。

閑話休題。

「まあ、空を飛ぶくらいならばそこまでの霊力は必要無いと思うぞ。」

彼女の場合はもとの霊力がケタ違いだから君が言うように莫大な量に見えるだけだ。

実際に飛行に使っているのは彼女の能力であって、霊力ではないから参考にはし難いと思うが」

「そうなんですか……」

「それで、だ。君、具体的にどれぐらい霊力を使える？」

「具体的に、ですか……」

口で言うより実際にやって見せた方が良さだろう、と考えて右手に持った革靴の蓋を開けて中身を探る。取り出したのは例のお札。日々若干ずつ溜め続け、とりあえず一週間で二十枚弱のストレージができた。

クリップで纏められた束から一枚抜き出し、右手の指に挟む。

指をクロス。

能力を発動させて、お札の中に詰め込まれた霊力の動静に注意しながら、ゆっくりと解放する。

お札が青白い燐光に包まれ、霊力が外部へと出力され始めたのを確認して、注意深く霊力に“向き”を与えてゆく。

お札とそこに込められる霊力の関係は、言うなればコップと中身の水の間にあるそれと似ている。

コップの中に納められた水 即ちお札に溜められた霊力は、その状態では実効力をもつエネルギーとして使いにくい。

静止した水に力学的なエネルギーを持たせ、外部の何かに影響を

及ぼすためには、当然ながら外部からコップを揺するなり倒すなりして中身の水をコップから外に出さなければならぬ。

(重力による位置エネルギーとか、分子の運動とかに対するツツコミは無しで)

お札に込められた霊力の場合は、外部から追加の霊力でもって干渉を加えてやることで、丁度、満杯のコップを傾けて水を流し出すように霊力を取り出すのだ。

これが、“解放”の手順。

解放された霊力は放っておくとそのままでは文字通り霧散してしまふし、それだけでは何もできないので、実際に操る際には明確にカタチを固定しなければならぬ。例えば球体なら、中心に向かって全方位から収束させるように流れを与えて。

これが、“向き”を与える手順。

ぼつ、と。

右手の人差し指と中指の間に挟んだお札。

そのすぐ上に、テニスボールぐらいの青白く光る球体が現れる。

様子を見守る慧音先生が、おつ、と小さく声を上げる前で、もう少し大きくしても大丈夫か、と更に霊力を加えようとした。

瞬間。

ぺちつ、という張り合いのない音とともに、力のバランスにズレが生じたテニスボールは、破裂。

しめて半日分の生成量が跡形もなく霧散した。

ひゅう、と。

晩冬の寒風が吹き抜け、民家の屋根で鳥が、かあー、と間の抜けた声で鳴く。

虚しい。

「……………ダメだこりゃ」

形を保つのがえらく難しい理由は、先日の修練の時と同じ。

あの時の地球儀サイズから縮小して保持し易くなったとは言っても、決まった形を持たない霊力の形を維持するのは楽ではない。

「そう言うんじゃない。まだ始めて一週間だろう？ 霊力を操作できるだけでも十分過ぎるぐらいだよ」

そう言ってぼんぼんとorz状態の僕の肩を叩きながら励ましてくれる慧音先生。

ありがとう。あんたあ良い人だよ。

「……………それにしても、霊力で空を飛ぶって具体的にどうすれば？」

「具体的に、か……………。あまり意識していないからなあ。なんと言葉えれば良いんだろう？ 霊力を身体に纏わせて」

「待った。それ以上言うな慧音」

こめかみに指を当てながら説明を始めかけた慧音先生の言葉が、後ろから投じられた一言により遮られる。

「 やあ神楽。もう用は済んだのか? 」

「 お陰様で、万事終了じゃ。ウチのが世話になったの 」

唐突ながら、神楽さん登場。

ついでに言つと信頼性の高い情報を聞きそびれた。

「 なに、構わないさ。私の方もなかなか楽しかったよ 」

「 そうか。それなら持つて帰るか? 意外に理屈っぽいヤツじゃから、おんしの話し相手には良かる 」

「 持つて帰るて……僕を人間として見てくれてませんよね!? 」  
そんな対人コミュニケーション専門のアンドロイドみたいな言い方はしないでもらいたい……。

何? 例えがわかりにくい?

……スルーしてもらつて構いません。

「 それで、神楽さん。僕に教えちゃマズい内容ですか、空飛ぶつてのは 」

「 少なくとも今のおんしの腕では、の。その未熟な力で飛ぼうとして、落つこちて怪我でもしたらどうするんじゃ? 」

真つ直ぐに僕を見据えながら言う神楽さん。

……あれ、これつてもしかして心配されてる?

「 怪我はある程度までなら永琳に治して貰えるがの。死んでしまつたらそれまでじゃ。 」

……流石にあいつでも、死んだ者の命までは治せんからの 」



何事も、まずは霊力の基本的な操り方を身に付けてからじゃ、という言葉と共に、僕の頭の上に神楽さんの右手が乗っかる。

「んなっ……、子供扱いしないで下さい」

そのままわしゃわしゃと髪を撫でつけてくる右手から逃れようと身をよじる。

「ワシから見ればお前さんぐらいの年はまだまだガキじゃろ」

うりうり、と口に出しながら僕の髪を掻き乱す神楽さんのノリは、何やら猫か何かとじやれているような。

一方で、言葉自体はなんだか手の掛かる子供をたしなめる母親めいていて。

神楽さんの手首を掴んで押しのけつつも、余計な心配を掛けるもんじゃないなあ、と反省。

「分かりましたって。別に僕だって自分から寿命を縮めるような真似はしませんから」

「是非とも、そうしてくれ」

ようやく離れる神楽さんの手。

何から何までこの人には迷惑を掛けっぱなしである。

こんな調子では身に付くものも身に付くまい。

これからは自分自身の持っている能力の程度をわきまえて

「折角手に入れた暇つぶしの対象。ちつとやそつとで死なれては困るからの」

「僕の反省を今すぐ返してください!!」

その一言を聞いた途端に反省の念が八割方ぐらい減少した。  
やっぱり人として見られてねえんじゃね？

「というか慧音先生。あなたからも何とか言ってお下さい。苦笑してないで。」

「さて、そろそろ帰って夕餉の支度じゃ。行くぞ要」  
「僕の主張は完全に無視ですか……」

「聞き入れて貰いたくばワシを唸らせるような料理を作ってみることじゃ。またの、慧音。今度来た時は飲もう」

「ちょっと、神楽さん、料理とは何の関係も無いことでしょうそれは　って、言ってみるけどやっぱり右から左か!？」

あたふたと萌葱色の和服の背中を追い掛ける僕の目の前で、今度はその萌葱色がふわーっと中空に舞い上がる。

「はよせんと置いてくぞ〜」  
「そのタイミングで飛ぶんですか!？」  
ブルータス、お前もか……

フツ、　やれやれ、そんな姿を見せつけられたら飛行への憧憬が再燃しちまうZE  
……じゃなかった。

「慧音先生！　僕はこれで失礼しますッ。今日はどうも、案内ありがとうございました！　それじゃまた、今度里に来るときはお世話になります！」

「あー、うん。道中気を付けてな……」

慌ただしく駆け出しながら、引き続き苦笑を浮かべ続ける慧音先生と挨拶を交わすと、すぐさま夕焼け空にふわふわと浮かぶ萌葱色の衣の後を追い掛ける。

置いてけぼり食らってお腹を空かせた妖怪に目を付けられたくはないからねえ。

「待つて下さいよ〜って、カナメはカナメはかさねがさね頼んでみるけどやっぱり無視かよ……」

気分はレベル5第一位に置いてかれた某20001号。

「つーか野郎が口にするべき台詞じゃねえ。」

そんな益体も何もない思考を引き連れて、僕は駆け足で安全地帯を飛び出した。

後に残された慧音先生が、一人ぼつりと「あれはあれでなかなか良いコンビかもしれないなあ」と呟いていたりするのであるが。

丈長めの袴の裾を踏んづけないように摺り足みたいな走りて往來を走る僕は、そんなことなど知る由もない。

さて、今夜の夕飯は何にしようか。

其之陸・人間の里、守護者と巫女との邂逅の件（後書き）

ようやく本駄文にも原作主人公が登場です。

亀更新の割に分量が多いです。読みにくくてすみません。

というか、けーね先生の口調がどうも怪しい。

永夜抄の三面と書籍版文花帳では口調も違うし……。

どこがおかしい点などありましたらご指摘頂ければ幸いです。

それでは、次回の投稿がつつがなく行えることを祈って。

其之漆・人間の里、花と酒、人と妖怪、時々魔法使い（上）（前書き）

ようやく……

ようやく書けました……。

グダグダ感ハンパないですが、どうぞ

其之漆・人間の里、花と酒、人と妖怪、時々魔法使い（上）

「よし、花見をしよう」

「……いきなりですねえ。まあ、神楽さんらしいですけど」

月が改まって3月・弥生の中旬。

あつという間のこと、幻想入りしてからの日数が早くも1ヶ月を超えた。

夜間でも電灯が煌々と輝く外の世界とは異なり、夜になると明かりと呼べる明かりに限られる幻想郷。

必然的に、というべきか。

早寝の習慣が身に付き、反対に朝起きるのはご老体のそれに近い時間という真人間の生活リズムが確立するのに時間はかからず。

鶏の鳴き声に起こされ、朝食の支度。

惰眠を貪る神楽さんを布団から引っ張り出して共に食卓を囲み、それが終われば後片付け。

その時間になってようやく覚醒してきた神楽さんに掃除・洗濯を任せて、基礎体力をつけるための自主トレを行い、その後髪入れずに靈力制御の修練。

精神集中で神経をすり減らし、続いて待っているのは昼食の準備。午前中の修練の様子についてああだこうだと批評されながら腹を満たし、後片付けを終えたら即座に午後の修練に移行。

そこから大体午後4時ぐらいまでマンツーマンで教えを受け、一息ついた後に夕食の調理を開始。

6時頃には食卓について腹ごしらえと相成る。

夕食後は特に何をするでもなく、食後のお茶と共に、本を読んだり、修練で学んだことを書き留めたり、神楽さんと他愛の無い会話を交わしたり。

それから後は適当に入浴を済ませ、遅くとも10時あたりには床に就く。

と、大体日々の日程としてはこんな感じ。

ぶっちゃけかなりハードスケジュールである。

忙殺されているうちに1ヶ月が経ってしまった、という表現が正しいかもしれない。

まあ、何はともあれ幻想郷での生活にも慣れ始め、靈力制御にも僅かながらの上達が見られるようになってきた、そんな折。

昼食後の後片付けを終え、午後の修練が始まるまでの食休みの時間は何をしようか、と考えながら居間へと戻った僕を、そんな神楽さんの提案が出迎えた。

「なんだかワシがいつも思い付きで行動してるような言い草じゃの

う

「あながち間違いとは言えないでしょう？ 雛の節句の時だって、その前の人里に連れて行ってもらった時だって、提案のノリは大体今みたいな感じでしたよ？」

共に事の発端は、

「そつだ、里に行こう」

というコメントである。

なんだか某鉄道会社か何かの宣伝文句みたいなフレーズだった。

「失敬な奴じゃのおんしは。……まあ良い、別におんしも反対はしないじゃろ？」

「そりやまあ、时期的にもそろそろ……」

食後のお茶片手に縁側に腰掛けながら言う神楽さんの隣に立ち、眼前に広がる庭、その一点に目を向ける。

「……うーん、大体八分咲き？」

「と書いて『見頃』と読むべき頃合いじゃないか」

八分咲みじろき。ねえ。

まあ、間違いで無いことは確かだが。

幣文邸の庭の南東側の隅には、一本の桜の成木が鎮座している。取り立てて巨木というほどものではないが、枝振りには力強く、庭の隅という位置取りに反して確かな存在感を放っている。

実にご立派。



淡紅色の花弁を枝の随所に雲のごとく纏うその姿は、『我が世の春が来たあああツツツ！！（CV：子安武人）』とでもシャウトしているように。

そういえば、氣象庁の桜の満開宣言は八分咲きを越えるのが基準になると聞いたことがある。

つまりとところこの桜もまさに現在進行型で見頃である。

この時期を逃す訳には行かない、というのが神楽さんの意見だが、そこんとは僕としても全くもって同感。

「そういう訳で、花見をするぞ」

「それは良いんですけど、どこで？」

「さて……どこが良いかの？」

「考えてなかったんですか……」

やっぱり思い付きで動いてんじゃん、という感想を飲み込みつつ、桜の木のあるポイントを頭の中でリストアップしてみる。

……のだが、生憎幻想入りしてから精々1ヶ月ほどしか経っていない僕のこと。

当然行動範囲も狭く、基本的に人里とこの家しか知らないと言っても過言ではない。

したがって、肝心の桜の木にもあまり心当たりが有るわけでもなく。

「里に何本がありましたよねえ、桜？」

「……うる覚えじゃの」

「仕方ないじゃないですか。里まで行った回数だってそんなに多くないんですから」

言いつつ、頭のなかで里の情景を思い浮かべる。

確か里の中心部、お茶屋さんの前に一本でつかいのがあった気がするが……どうだったか。

寺子屋の前にある木　あれは確か梅だった。

なんでも学問の神様こと菅原道真にあやかっているらしいが。もっとも、今は関係ない。

「まあ、明日は日曜日。里の人間たちも休日を使って花見をやるのか言っとったが、桜の様子を見るに今日あたりじゃ。適当に見繕って飛び入りといくかの」

「……人間の宴会に妖怪が入って行って良いんですか？」

「のーぷろぶれむ、じゃ。いくら何でも宴の席で人間を取って食うようなことはせんし、仮に食おうとしたとしても出来ん。慧音に頭突きされる」

「いや、……そうではなくてですね、貴女が姿を現した時に里の皆さんがどんな反応をすることですよ」

慧音先生の頭突きのくだりはともかく。

神楽さんを見た瞬間、里の人々が蜘蛛の子を散らすように逃げてゆく情景とか、見たくはないし。

そこまですは行かずとも、『なんで妖怪が来るんだよ、オイ』という無言の圧力に満ちた、ギスギスした雰囲気の中で悠々と花見ができるほど、僕の神経は太くない。

まあ、当の神楽さんならそんな状況も意に介さず、のほほんと花見を楽しみ尽くしてしまうのだろうか。

「……おんしは色々と里の人間とワシの関係を誤解しとるようじゃ

の……。安心せい。自分でいうのも難じゃが、里の人間とは友好的じゃから、叩き出されたりはせん」  
「それなら良いんですけど……」

まあ、一緒に里まで買い出しに行った時も、見たところ特に問題はなかったので、杞憂かも知れない。

「他に質問は無いか？ 無いならとっとと準備を始めるぞ」  
「準備？」

「まさか手ぶらという訳にも行くまい。こういう場合は、参加費代わりに酒と料理を携えるものと相場が決まっとるんじゃ」

言いながら、神楽さんは手の中にある湯のみを傾けて中のお茶を飲み干す。

くあーっ、と、魂がそのまま飛び出て行くんじゃないかと思われるほどの大あくびをした後のコメント。

「という訳じゃ、料理の方は任せた」  
「……薄々予想はしてましたけどね！ やっぱりそうなりますか！」

たった今洗い物を済ませてきたばかりなのに……。

どうしてこうなった。

「何もおんし一人でやれと言っとるのではないぞ。腹ごなしが終わったらワシも手伝うからの。多分」

「多分って何!?!」

「それに、おんしに頼んだのは食い物の支度じゃ。酒の方はワシがやる」

「明らかに掛ける労力に差があり過ぎますからね!? 準備ってた単に持っていく酒を蔵まで品定めに行くだけでしょう!」

「なぜ分かった!？」

「ちょ、否定して下さいよそこは! ！ よもやそこまではないだろうと心の底では淡い期待を抱いていたんですけどやっぱり貴女はいつも通りかツツ!」

ぐぎゃあ、と叫び声を上げる人間と妖怪。

外の世界なら近所迷惑も甚だしいが、ここは幻想郷の中でも過疎地域。

多少五月蠅くても大丈夫だ、問題ない。

「……仕方ない。料理を手伝おう」

「そう言ってもらえて恐悦至極」

仕方ないって何ですか、と全力で突っ込みたかったが、これ以上続けるとなんだか収集が付かなくなりそうな気がしたので、とりあえずは黙っておく。

「……まったく……まあ、食休みの後で良いですから、ちゃんと手伝って下さいね?」

「ん。分かった」

答えて、ぱたりと上体を板張りの床の上に倒す神楽さん。

腕を頭の後ろで組んで枕代わりにした、モロ昼寝モードである。

「食後すぐ寝ると牛になりますよ?」

「ふははは、問題ない。ついた脂肪なぞ妖力で強制燃焼させてやる」

「そんなこともできるんですか……」

面妖な……。

世の女性たちから顰蹙を買っぞ、それ。

というか、男の僕から見ても相当羨ましい。

「いや、おんしが羨ましがする必要は無いじゃろ。脂肪なぞロクについでおらんに」

「……読心術遣いかアンタは！」

「むしろ世の女性たちから白い目を向けられるのはおんしの方じゃろ。何でまともに食つとるのにヒョロいままなのじゃ？」

「知るもんですかい！」

大方カロリー収支のバランスが取れてないからだと思われるが、少食だしね。

ちなみに、かつて外で友人二人に同じことを訊かれ、体質だからと理由を答えたところ、何だその恵まれた体質は、と首を締められた。

片方は小学校からの腐れ縁だった男。

もう片方はたまたま席が前後の関係だった女生徒。

二人同時に、しかもかなり本気でシメてきていた。

彼岸が見えたよ。うん。

あいつらどうしてんのかな。

さて、話が逸れた。

なんだか釈然としないが、ともかく午後の修練は花見に置き換わ

ったわけで。

ついさっき昼食を造ったばかりであるが、行き先は宴会みたいなものだからまあ楽しけりゃ良いか、と自分を無理矢理納得させて台所へと足を向ける。

後からわざとらしい寝息が聞こえてきて少々癪だが。

ああ、そうだ。

本格的に寝入ったところで、中華鍋でもこの妖怪の頭に被せてお玉でガンガン殴ってやろう。

結論から言つて、神楽さんはとりあえず手伝ってくれた。

僕がまな板に向かったり鍋の中をかき回したりしている間中ずっと、後方でああだこうだと批評するだけ、というのが手伝いの部類に入ればの話だが。

まあ、一人で作るよりは確実に質の良いものが出来たので、ある程度役に立ったと言えなくも……ない？

宴の席ということもあり、用意したのは主に酒肴の類。

で、佃煮やら何やら煮込む系統の時間がかかる料理をメインに作っていたら、

「すっかり夜ですね」

「すっかり夜じゃの」

とつぷりと日が暮れてしまった。

……花見、やってるのか？

「案ずるでない。宴では夜が主戦場になることはザラじゃろ？」

ほとんど真つ暗闇の屋外を見渡しながら神楽さんが言う。

「……そりゃ、まあそうですね」

貴女の場合は酒戦場、という文句が反射的に浮かんだが、口には出さない。

しかしこんな調子で大丈夫か？

まあ、何はともあれ作り終えた料理を重箱に詰め、さらに全体を風呂敷で包む。

いつも通り左手に革鞆を握り、右手に風呂敷包みを持つと、重量差から僅かに身体が右側に傾ぐような感じがした。

一見作り過ぎにも思えるが、わざわざ僕と神楽さんの二人だけで

消費するために作ったものではない。

参加費代わりの料理だ。

具体的な参加者の人数は知らないが、量としてはかえって足りないくらいかもしれない。

もつともそれも、

「……神楽さんの予想通り、里で花見が開かれていければの話ですけどね」

「人間たちが眠る時間だとしても、夜行性の妖怪たちなら間違い無く桜を囲んだら。問題ない」

「なるほど、それなら安心　出来る訳ないでしょう!!」

危うくずしりと重い風呂敷包みを振り回しそうになりながら笑顔で反駁する。

「ええ〜」

「ええ〜、じゃないですよ！　つまるところ、その場合僕は妖怪の集団のただ中に一人で入って行かなくちゃならない可能性がある訳ですよ!？」

妖怪たちの宴会に人間が酒瓶片手に飛び入りて。

そりゃあ、鴨がネギを背負ってくるようなものである。

「そんなんだつたら僕は行きませんよ！　まだこの世に未練が有りますからねッ！」

「あなたは死なないわ」

「……は？」

「私が護<sup>まも</sup>るもの。……な〜んちゃって」



一瞬遅れてその口上の意味を理解する。

「な、なんちゃってって何ですか！？　つーか、何でそのフレーズを貴女が知ってるんです！」

「外の世界で有名な台詞回しだと聞いたが……あの道具屋の言は本当らしいのう」

「確かに有名ですけど！　そのタイミングで言われても信用度は上がりませんからね!？」

何故にエヴァネタ。

というか、幻想入りしちゃ駄目だ。

まだ新劇場版が現役である。

「まあ、冗句じゃが」

あっけらかんとのたまう神楽さん。

「護る気は無かったんですか……」

「必要ないからの」

「……？」

「人間の里の中では妖怪は人間を襲えん。故に里から出ぬ限り食われはせんよ」

たとえ妖怪といえど、この幻想郷の大原則に喧嘩を売るつもりは無い、と、先ほどのエヴァネタとは打って変わり、真剣さを帯びた口調で言いうと、神楽さんは軽やかな足取りで勝手口から屋外へと踏み出した。

「気が進まないのなら強制はせんが？」

ちよこんと首を傾げて見せる。どうする？、という言外の問い。重箱片手にしばし逡巡したのち、わずかに戸惑いながらも結論を出す。

「……お供させて頂きます」

「うむ、良かる」

にこり、と、女妖怪は美麗に整った顔を綻ばせた。

なんだかいい具合に載せられてるなあ、とは思いつつも、破顔一笑する神楽さんに不思議とそんな考えも削がれてしまう。

やれやれ、である。

一升徳利を大事そうに抱え込み、鼻歌混じりで門扉に施錠するその後ろ姿が、花見をどれほど楽しみにしているか物語っていた。

まあ、モノに溢れた外の世界とは違い、娯楽の限られた幻想郷のこと。

ただ桜の花を愛でながら盃を傾げるだけとは言っても、その意味も期待も外の世界でのそれより大きいのかも知れない。

「酒良し、料理良し。家の戸締まりは終えたし、火も落としたの。

……要、忘れ物は無いな？」

「まあ、これといって思い付く限りでは無いかと」

生憎と忘れ物をするほど持ち物が無いという事でもあるが。

どこへ行くにしても荷物は全て鞆一つに収まってしまう。

「ふむ、準備は整ったな」

言葉と共に、神楽さんは大事そうに腕の中に抱き込んだ一升徳利を一旦小脇に抱え

「よし、四半人間の霊術師・幣文神楽、いざ参る！」

えいえいおー、とご丁寧に提灯を持つ右手を高らかに掲げて宣言なさった。

「……ダメだ、ついて行けねえ」

何でそこまでテンションが高くなるのか甚だ疑問である。

今にもスキップを始めそうな足取りで、人間の里へと続く道を歩み始める神楽さんの斜め後ろに位置取り、あえて付かず離れずの距離を保って歩き出す。

別に誰かに見られて困るようなことをしている訳でも無いし、そもそもすっかり日の暮れたこの時間帯に、こちらの様子を窺う他人の視線があるとは考えられない。

……のだが、妙に上機嫌かつおかしなテンションになっている神楽さんの傍らに秘書か従者の如く陣取るといふのは、そこはかとなく御遠慮したいのが正直なところであった。

正直言って、今のこの人と一括りにはされたくない。

大体こういう時の彼女のノリに巻き込まれるとロクな事にならないということとは、1ヶ月の間に十分経験済みである。

まあ、本人は来るべき花見への期待に胸を膨らませているようだから、それとなく距離を取って“生”暖かい目で見守ってあげよう。

気付かれないように、「っそりよ」。

「時に要よ」

「……何で御座いましょうかお師匠さま」

「おんし、何故にそうわざわざ間隔を開けてついて来るんじや？」

「……」

普通にバレてた。

気付くの早いつて。

近う寄れ、と手招きされて、えええ、という不服の念を込めた言葉を返す僕だったが、結局のところ、着物の肩の辺りをつまんで引つ張られ、強制的に神楽さんのすぐ隣まで引き寄せられる。

「夜なんじゃから無闇に離れるでない」

「夜だけに無闇……（笑）」

「馬鹿者」

ばかり、と裏拳つぽく額をはたかれた。

「そこら辺の妖怪に喰われてもええのか？」

「……良いわけ無いですよそりゃ」

「なら黙って付いて来い」

「へーい」

とまあ、そんなやり取りをはさみながら人間の里目指して歩き進めること数十分。

特に脈絡もなく神楽さんと駄弁だへんっていた時である。

「あなたは食べても良い人類？」

「いや、僕は食べてはいけない部類の人類」

会話の隙間を縫うように突然割り込んできた一言に対し、反射的に言い返す。

そして言い返しつつ辺りを見渡して声の主を探してみるのだが……何も見えない。

「空耳か？」

「違うよ」

間髪入れずに応える声があった。

声色からして相手は十歳そこそこの少女であると思われるが、その声が出た方向へと目をこらしてみても、やっぱり何も見えない。

「神楽さん、今の聞こえましたか？」

「勿論。大方誰であるか正体の見当もつく」

「えと……まさか声だけの妖怪とか言うオチじゃないですよね？」

「うんにゃ、その線は考えずともよい。まあ、おんしの能力で探してみたらどうじゃ？」

「……そついう使い方は想定外なんですけど……」

適当なノリで応える神楽さん。

具体的にどうするかは自分で考えろ、ということだろう。

「君、僕がそつちの位置を当てられたら姿を現してくれるかい？」

「んー、良いよ。その代わり……」

「その代わり？」

「当てられなかったらあなたを食べる！」

「ちよっ、おま」

なんだかもの凄い対価を提示された。

命に関わるレベルの。

どうしたものと、ちらりと神楽さんの方を見やるが、返って来たのは『まあ適当にやれば？』的な視線のみ。

離れずに付いて来いとか言っただくせに。

どうしろと……。

「どうするの？ 早くしないと食べちゃうよ？」

一見無邪気な少女の声だが、内容はかなりデンジャラス。

「わ、判った……。今当ててやるから首洗って待ってるよ！」

ヤケクソ気味に言い返し、風呂敷包みを神楽さんに預けると、左袖の袂の中をまさぐって例のお札を取り出す。数は3。しめて半日分の生産量。

「南無三……」

某ソロモンの悪夢やらどっかの無免許天才外科医も使っていた一

言と共に目を閉じ、右手の人差し指と中指を交差させる。

それを合図にしたかのように、そうなつてくれなければ色々  
と困るのだが 体内でぐるぐると渦を巻き始める霊力。

ここ1ヶ月間ほとんどこればかりやってきたためか、この工程  
にかかる時間もだんだん短くなってきた。

荷電粒子を加速器にかけて高速回転させるようなイメージで、体  
内に分散している霊力をかき集め、循環させる。

程よく加速が乗ったところで、三枚のお札を持つ左手を身体の前  
方に掲げ、そこへ一気に霊力を流し込む。

点火……で、解放。

既に閉じているまぶたの向こうで、半日分の備蓄が一気に容器た  
る札から放出されるのが“見えた”。

さて、これを言うと僕が何をしようとしているか分かってしまっ  
が、行動のイメージとしては潜水艦のアクティブソナー。

暗闇を見通すことはできずとも、霊力の流れならば目で追うこと  
が可能だ。

自分を中心にして探知波を打ち出し、半球形に拡散してゆく霊力  
の波に異変は起きないかぐるりと周囲を見渡す。

はたして、

「そこだ」

拡散する霊力の流れが遮られて陽炎のような揺らぎが見えたのは二カ所。

1ヶ所は自分のすぐ隣、神楽さんの立っている位置。そしてもう一カ所。

後ろ上方に五メートルほど離れた辺りの位置で、ふよふよとUF0機動するナニカが霊力の網に引っ掛かる。

「……………あれ？」

闇の向こうに居るであろう何かを指差してみた。

……………のだが一向に返事が返って来ない。

やっべえ大見得切った上にしくじったか！？

札からの霊力の照射は終わってしまったので、そのナニカがどこにいるのかはもう分からない。

どうすんのこれ、という視線を我が師匠に向けてみるが、相変わらずの微妙な視線に、微妙な表情。

これは……………喰われるフラグが立ったか！

＼(^o^)/

「我が人生が、いつぺんに台無し!!」  
「アホな事を」



ぺしっ、と再度裏拳気味に額を張られる。

「おんしと話しとった妖怪は、ほれ、そこに居るし」  
「そこって……どこに？」

神楽さんが僕の背後を指差す。

示されるがままその方向へと視線を巡らすと。

「人間なのにわたしの居場所が良く分かったね」  
「うわっうわっ！」

目の前に広がる夜の闇の中から、一人の少女が飛び出してきた。

人間でいうと、先ほど聞いた声相応の大体十歳に届くか届かない  
くらいの背格好。

白いブラウスの上から、闇からそのまま切り出したような黒いワ  
ンピースを身に纏い、金糸を思わせる美しい金髪が肩口の辺りで揃  
えられている。

「……お前さん、名前は？」  
「わたし？ わたしはルーミア、宵闇の妖怪。あなたは？」  
「文成要、只の人間だ。こっちは僕の師匠の」  
「かぐらの事は知ってる」

頭の左側に結ばれている赤いリボンを夜風に揺らしながら、少女  
は言う。

「あー、まあ当然か。幻想郷住人同士だし。……というか、相手が

誰だか分かってるのなら教えて下さいよ神楽さん!」

「まあまあ、良いではないか、術の練習になったことじゃし」

ひらひらと片手を振りながら適当な調子で切り返す我が師匠。

最早何も言つまい。

「しかし、三枚使ってあの出力とは情けない。これでは霊撃として  
実戦に堪える威力を出すまでどれだけかかるか……。もうちっと放  
出に掛ける時間を短くして」

「そしてこのタイミングで講義!？」

ついでにかなりの酷評。

この人の求めるレベルまで達するには人生をあとどれだけ修行に  
費やせば良いのだろうか？

「最初に言った事じゃろ？ 幻想郷こゝろで生きて行くのならそれなりの  
覚悟を持って、と」

「いや、それは分かってますけども……。求められてる覚悟の意味合  
いがあるんだか違うような気がするんですが？」

確かに妖怪に補食されないために霊術を学ぶというのは理解でき  
る。

だけでも、神楽さんが要求してるのは生存・生活そのものという  
より彼女にシゴかれることへの覚悟じゃないか？

「金刚石も磨かずば、珠の光は出いでざらん、とは良く言つじやる?」

「少なくとも原石がロクなものじゃないですから、磨いたところで  
大して光りはしないかと」

「ははは、減らず口を」

べしっ

「ぐふっ」

言葉と共に鳩尾に神楽さんの裏拳が突き刺さる。漫才のツッコミみたいな感じで。

擬音語だけならそれ程大した威力ではないが、当たりどころがアしなのでダメージが地味にでかい。

あ、あ、痛え。

一方加害者はというと、うずくまる僕の隣で清々しいまでの微笑みを浮かべていた。

ドSめ……。

「それで、あなたはかぐらの携帯食か何かなの？」

「ぐ……、何だって？」

「だって、こんな夜に妖怪と人間が並んで歩いてるって……他に何か理由がある？」

首を傾げる宵闇の妖怪。

つまりはアレか。彼女の予想では僕は神楽さんに喰われる（捕食的な意味で）運命なのか。

それにしても、携帯食とは……。どっかのドーナツ好きのロリ金髪吸血鬼みたいな言い回しだ。

共通点はロリと金髪。……至極どうでも良いが。

「……さっきの会話から分からないか？ 僕は神楽さんの……あー、

弟子みたいなモンだ。まかり間違ってもそういうイベントは起きないから。うん、そう思いたい」

「そういう事じゃルーミア。この人間はワシの弟子。喰いもせんし、お前さんにもやらんからの」

「そーなのか」

どうやら分かってくれたようである。

まずは一安心。

「大体こやつ腕を見る、こんな鶏ガラみたいなのを喰ったところで腹に溜まるか？」

「え、ちょ、よりもよってそれを良いですか!？」

確かに『肉付き？ 何それ美味しいの？』的な体型であるのは認めるが。

認めるけども……。

「ヒョロいことは自覚してますけど、いくら何でも鶏ガラはねえ…

…」

「ならば骨格標本と言い換えよう」

「それ最早肉の要素無いじゃん!」

散々な言われようである。

何故肉が付かないかは前述の通り。

つーか肉付き無いネタで弄られすぎである。

「そういえば、その包みからは何か美味しそう匂いがするんだけ

ど？」

「これか？　これは駄目だぞ。お花見への持参品だ」

さて、話は変わってこれからのこと。どうやらルーミアは特にあてもなく夜の散歩を楽しんでいた所だったらしいが、僕達には行き先がある。

「お花見？」

「ああ、里まで行くつもりなんだが……ルーミア、お前さんも来るか？」

「お花見ね……………、ん……………？」

少々考える素振りを見せる妖怪少女。

わざわざ考え込む必要も無いだろうに。

「今宵の花見は人間も妖怪も集まると聞いた。酒だろつが食い物だろつが十分期待できるじゃろつな」

何を思ったやらルーミアの傍らでわざとらしくのたまう師匠。

「……………おさけ……………こはん……………」

ぶつぶつと呟くルーミア。そして、

ぐっつ

と、お腹の虫が彼女の意志を代弁した。

「わたしも行こー！」

「なるほど、了解」

実に分かりやすい。

「決まりじゃの。なら、ここで立ち止まっている理由もない。行くでしょう」

神楽さんに促され、夜の小路を歩き出す僕とルーミア。もともと、ルーミアの方は数歩歩いた後すぐに、ふよふよとホバー移動を始めたのだが。

にしても、やっぱり飛べるのって便利だよな……。妖怪に襲われた時も逃げやすくなるし、何より歩くよりも格段に速い。ついでに疲れにくいだろうし。

「今のお前さんには無理じゃろ」

「……神楽さん、頼みますから独白を読まないで下さいよ」

もう少し穏健な意見を下さいとか、そういう要求はしないから。

「？」

一方で、当のルーミアとは言うと、何のことやら分かっていない様子でクエスチョンマークを浮かべていた。

よもや彼女の頭の中には食べることしか無いのではないだろうか。

「かなめ」

「何だルーミア？」

「……今なんだか失礼なコトを言われた気がする」

……エスパーかこいつら。

そんなこんなで、妖怪二人と人間一人という、なんとも奇妙なメ  
ンツで人間の里へと足を踏み入れることとなった。

警備のおっちゃんが、ルーミアにまわりつかれながら歩く僕を  
見て苦笑しつつ片腕を軽く挙げてきたので、それに会釈を返しつつ  
その前を通り過ぎる。

四分の一だけ人間の妖怪と、丸々一人の妖怪がただの人間と一緒  
に里へと入って来たのだが、特に咎められるような事も無かった。

ひとたび妖怪が里の中で暴れば、もれなく博麗の巫女もしくは  
その他の妖怪退治の専門家による制裁がついてくるということもあ  
り、少なくとも里の中では安全が保たれているという。

なら警備要らないじゃん、とも思うのだがそこはそれ。万一に備  
えて里の男達がローテーションを組んでやっているらしい。

「かなめー」

「何だルーミア？」

「おなかへった」

「……妖怪つてのは食欲で動いてるのか？」

うちの師匠然り。

とりあえず花見ポイントに着くまで待て、と、しきりに袖を引っ張ってくるルーミアをなだめすかし、目の前に行く神楽さんにくつついて通りを進む。

なんつーか、こいつを見てるとどっかの暴食シスターを思い出すな……。

「とりあえずほら、かりんとうやるからしばらく我慢してろ」

「むぐっ」

口の中に和製スナック菓子を押し込んでやる。主に僕の肉体に害が及ばないように張った予防線だ。ちなみに制作・文成要。

例の『あなたは食べても良い人類？』発言から考えて、これ以上放っておくと、今度は引つ張るだけじゃなく腕をかじられそうで怖いからね。とりあえず口寂しさだけフォローしておこう。

「ふむ、揚げ加減はなかなか。おんしの作にしては意外と旨いのう」  
「どこからともなく手を伸ばして来ないで下さいよ……」  
「じゃが、ちと味が濃すぎる。75点」

酷評なのはいつも通り。ただ、今まで作ったものの中では屈指の



点数。

何と言つか、複雑だ……。

ついでにかりんとうが詰まった小袋をルーミアの手に押しつけてから、夜の里の風景をざっと眺める。

昼間に比べれば人の姿は少ないものの、代わりにそれを補うように妖怪の姿が数を増していた。

満月の少し手前、十三夜の月明かりに照らされて夜の闇の中にひっそりと沈む家々、という情景を予想していたのだが、それは良い意味で裏切られたと言える。

表通りの商店の軒先には提灯が下げられており、そこから放たれる控えめな明かりが夜の闇を僅かに切り開いて、人妖の行き交う表通りをほのかに照らし出していた。

それがどことなく懐かしさを感じさせるような光景を作り出していて、思わず溜息が漏れる。

「昼の様子とはかなり違いますね」

「夜に開いとるのは大体が夜行性の妖怪を相手にした店じゃからの。趣きが異なるのも当然じゃ」

そんな感想を述べると、神楽さんは里の中央部に向かって並足で歩きながら補足を加えた。

「一昔前に比べたら、人と妖怪の関係も随分と変わったものじゃの。」

あんな風に、気軽に酒場で盃を交わすようになったのはつい最近のことじゃな」

神楽さんが示す先では、四十歳ぐらいの人間（確か大工の棟梁だったか）と、見た目同年代の妖怪の男が互いに酌をし合いながら談笑している。

興に乗ったのか、どうやら元は熊かなにかであるらしい妖怪の男が爆笑しながら人間の背中をばしん、と叩いた。

妖怪の腕力で叩かれた人間が激しくえぞきだし、それを見て慌てて謝る熊男。対して、いやいや大丈夫、と咳き込みながら返す親父さん。

「なんとというか、体育会系の部活の上下関係を彷彿とさせますね…

…」

「それがどういった物かは知らぬが……まあ、少なくとも殺伐とした雰囲気は無いじゃろ？」

「ですね」

この様子ならば、食べられはしないか、という不安は杞憂に終わりそうで一安心である。

「かなめー、これもう無いの？」

「食うの早えよ……。あんまり量が無かったとはいえ、もう一袋全部食っちゃまったのか」

空っぽになったかりんとうの紙袋をひらひらと振るルーミア。

前言撤回。一つ懸念事項が残っていた。

「神楽さん、早いとこ花見に取り掛からないと、彼女が僕のことを捕食しかねないんですが？」

「目的地はすぐそこじゃ、問題無い」

『しょーとかつと』じゃ。

そう言つと、神楽さんは突然それまで歩いてきた表通りから離れ、路地へと足を向けた。

家屋と家屋の隙間、人が一人通るので精一杯といった幅の路地をすいすいと抜けて奥へと進んでいく萌黄色の振袖。

こんなルートで本当に大丈夫か、と疑問に思いつつも、そこはまだ里の地理にも馴れていない僕のこと。

とりあえずその背中を追って埃っぽい隙間を進んで行く。

「すぐそこって……ああ、確かに」

疑念を持ちつつも少し進んだところで、視界が開けた。

路地を抜けた先の空間は広場となっており、中央には薄桃色の花弁を満杯に湛えた桜の大木が鎮座している。

そしてその下で敷物を広げ、めいめいに食べ物をつつき、盃を傾け、会話に花を咲かせている人間、そして妖怪たち。

神楽さんのように外見は人間と見分けがつかないもの、頭に獣耳を生やしたり尻尾を備えた半人半妖の姿をしたもの、数は少ないが完全な獣形をしたもの。

種族も見た目もてんでばらばらな妖怪たちと、里に住むごく普通の人間達が、ごく親しげに酒宴を共にしていた。

「やあ、神楽に要君。それとそつちは……おや、ルーミアか。良く来たな」

「あ、慧音先生！」

喧騒に包まれる花見会場をきよろきよろと見渡していると、その中に見知った女性の姿を見つけた。

初めて人里を訪れて以来、買い物途中などでちよくちよく顔を合わせる、寺子屋の先生にして里の守護者の一人。上白沢慧音先生である。

「こんばんは、慧音。いつも通りながら、今夜も世話になるぞ。色々々々《……》」

「やれやれ……。それにしても、今日は随分と遅い出だな。てつきり昼の間から来るものだと思っていたんだが？」

「料理を作るのに手間取つての。そのがもうちつとテキパキ動いてくれればここまで遅くは」

「実質料理してたのは僕だけじゃないですか！ それも煮物とか時間掛かる物ばかり！！」

件の料理が納められた重箱を目の前に突き出して反駁するが、神楽さんはどこ吹く風と言った様子で視線をそらしつつ、ぴーぷー口笛を吹く。

この人ひでえ。

「さて、宴会の方も大盛況の様で何よりじゃ。この様子なら朝まで  
楽しめそうじゃの」

オイっ！

この妖怪今何だった!?

「ほんなら、まあそういうことで。早速！」

何が『そういうことで』なのか知らないが、僕が指摘する間もなく、びしっ、と片手を突き出してサムズアップ、そして宣言。

うえっへっへ、という不気味な笑いと一升得利を抱えつつ、人妖入り混じるアルコール祭りの渦へと身を投じてゆく我が師匠。

跡に残された先生はこめかみの辺りを指で抑えながら呻く。

「……監督する私の身にもなってくれ。これでも昼過ぎからぶっ続けなの……」

「お疲れ様です」

「けーねも大変だね」

思わずねぎらいの言葉を掛ける僕とルーミア。  
うつうつ、と漫画チックに滝涙を流す慧音先生。

一方、一人で宴会のただ中に突撃していったと思いきや、既に会話の輪の中心に陣取っている神楽さん。

この人本当にひでえ。

「……まあ、とりあえず腰を落ち着けてからこのお重を解放するとしますか。先生も一緒にどうぞ」

「君は強いな要君」

「はい？」

「神楽の無茶振りに毎日耐えているとは、恐れ入ったよ。……ああ、席はそこが良いだろう」

「あの……先生？ 大丈夫ですか？」

「……フフ、私なら大丈夫さ。昔からあいつはあんな調子だったんだ。一日ぼつきり、それも宴会の間だけなら軽いものだよ、ふふ、ははは……」

何やら黒いオーラを纏った先生の言葉に、背筋を冷たいものが走るのを感じた。

さあさあどうぞどうぞ、と暗い笑みを浮かべる先生を促し、とりあえず敷物となっているむしろの上 神楽さんが加わった集團の隣の空きスペース におさまったところで、風呂敷包みを解く。

「基本的にお酒のお供的なメニュー構成なんですけど、徳利は神楽さんが持つて行っちゃったんで、とりあえずはこれだけです」

「また結構な量だな……これ全部君が造ったのか？」

「ええ。ほとんど煮物系統ですけど……ルーミア、ちっと待ってる。今取り分けるから」

重箱の中に詰め込まれた料理を見てすうつと伸びて来たルーミアの手をいなしながら答え、取り皿を用意する。

佃煮やらフキの煮締めやらを乗っけて手渡すと、妖怪少女は早速箸を伸ばして口の中へ放り込んだ。

「おいしいー！」

「そりゃ良かった。とりあえず、一人で食べ尽くすなよ？ さ、慧音先生もどうぞ」

「それでは、頂こう」

ぱくぱくと皿の上の料理を口の中に放り込んでゆくルーミアの隣で、先生は律儀に手を合わせると、フキを一本箸で挟み上げて口へ運ぶ。

評価のほどはいかに、と、フキを咀嚼する口元を見つめる僕の前で、

「うん、旨い。確かにこれはお酒が欲しくなるな！」

好感触そうに顔を綻ばせ、さらにフキへと箸を伸ばした。

「よかった……自分で味は見たんですけど、若干不安で……。先生の評価が良くて安心しました」

「わたしだって、おいしいって言ったよ？」

「お前さんは何食ってもそう言いそうだから、かえって心配だったんだよ」

早くも空になった皿を差し出してくるルーミアの顔を、人差し指でつんと小突きつつ答える。

「む、いくら私でもそんなことは無いよ！」

「そうなのか？ それならこの味無し団子をやるう。それ、あーん」

全三段の重箱、その一番下の段から餅米の粉を水と練って丸め、茹でただけの団子を取り出し、ルーミアの口へと放り込む。

もきゅもきゅ、と、あつという間に生団子を咀嚼し終える宵闇の妖怪。

「で、ご感想は？」

「お団子の味だけだった」

その答えに僕はやれやれ、といった表情を浮かべてみせる。

「何と、お前さんにはこの味が分からないと言うのか……」

「えっ！？ けーね、今わたし何かおかしなこと言ったの？」

「い、いやそんなことは……無いと思うんだがなあ」

何やら慌てた表情で慧音先生に助言を求めるルーミア。

自分も一つ口にいれてみて、自信なさげに答える先生。

二人揃って首を捻っているが、答えは見つからないらしい。

「うん、まあそりゃそうだ。その団子には餅米しか使っていないからな。でんぷんチックな味以外がしたら逆におかしい」

「……？ じゃあ、団子の味が分からないっていうのはどういう意味？」



「ああ、普通な感想が返って来たから、無理矢理『おいしかった』という言葉を引き出してやるうと思つて揺さ振りをかけてみましたはい。

「いやあ、意外だ。少なくともお前さんの味覚は正常だったってこと。うわなにをするやめっ痛たたたたあっ！」

何が起きたかと言うと話は簡単。

僕の言葉が終わらないうちに怒りに満ちたルーミアの歯が頭に突き立ったのである。

頭蓋からメリメリという異音が聞こえる気がするが、幻聴だと思いたい。

「ちょ痛っ、おまつ、頭に噛み付くつてどこかの暴食シスターじゃねえんだから、ぐおおっ……慧音先生ヘルプ、このままじゃ頭が噛み砕かれっ」

「いや、今の発言は全面的に君が悪い」

僕の救援要請に、日頃里の子供達を諭す時のような、まさに教育者然とした表情で先生は答えた。

死亡、確定。

「っ！わ、悪かったルーミア、さっきのアレは撤回する！頼むから許してくぎゃあああああっ！」

三月十五日、午後七時三十九分。

僕は生まれて初めて妖怪に『喰われた』。

原因は、まあ、どうしようもなく自業自得であるが。

あつれえ、おかしいなあ？　なんで頭から赤い液体が流れてるんだろうか？

「何から何まで当然の報いですねわかりますごめんなさいもついた  
しません」

「ふんっ！」

敷き物のむしろの上で、ただひたすら人が作り出した究極の汎用  
謝罪兵器『DOG E Z A』をくりだす僕がいた。

見回目十歳に届かない金髪幼女に対し、見回目十代半ばの男が平  
身低頭つて、傍から見たらどうなんだろう。

「……要君もこの通り謝っていることだし、そろそろ許してやらな  
いかルーミア？」  
「むう」

額を地面にくっつけてからかれこれ十分ほど経ったところで慧音先生が仲裁に入る。

その一言を聞いた宵闇の妖怪は、物凄い勢いで皿の上の料理を掻き込むと、空になった皿を再び差しだしてきた。

すわ申し訳ありませんぬルーミア様、と頭を下げたまま重箱の中から料理を取り分ける。

バクバクバク、と再び物凄いスピードで皿を空にする妖怪少女。そして再度、目の前にずいっと指し出される皿。

これは、重箱の中身をあらかじめ供出しなければ許さないというとか、と考えつつ皿の端に指を掛ける。

「……………」  
「……………」

受け取ろうとしたのだが、何を思ったかこの妖怪の指、皿を妙に強い力で掴んでいた。

「……………あのー、、、ルーミア？」

若干頬を膨らませ、そっぽを向きながらもその指は皿から離そうとしない。

「……………おいしかった」  
「……………はい？」

何やらぼそりと呟くような一言を聞き取れず、聞き返すとルーミアは勢いよくこちらの方に顔を向ける。

「おいしかったって言ったの！」  
「……お、恐れ入ります」

そんな彼女の剣幕に気圧されつつ何とか言葉を絞り出し、手早く料理を取り分けると妖怪少女の元へさし出した。

ひったくられる皿。ふん、と小さく鼻を鳴らしてまたそっぽを向くルーミア。

これは……本格的に怒らせてしまったか。

どうしたものかと途方に暮れていると、後ろの方から肩をちよいちよいとつつかれる。

振り返ってみると、そこには白いシャツにサスペンダーで吊った真紅のもんぺを合わせた女性の姿があった。

「も、妹紅さん！」

「久しぶり。それはそうと、ちよつと……」

いきなり登場、藤原妹紅さん。先日永遠亭まで付き沿ってもらって以来、すっかり御無沙汰である。

あいさつもそこそこに、ちよつとちよつと、と手招きされてそちらに体を向けた。

「お久しぶりです。お変わり有りませんか？」

「私のことは良いから。その前に、あの子に何か言うことが有るでしょう?。」

ほとんど囁くような小声で言う妹紅さん。その視線はムクれたままのルーミアへと向いていた。

「……料理の評価にはお礼を言ったの?。」

半ば呆れたような調子の混ざった一言に、あつ、と思に至る。

ぐるん、と僕が体をルーミアの方に向けると、宵闇の妖怪が、ずいっ、と空になった皿をさし出すのはほぼ同時。

「……おいしかったよ?。」

「ありがとう、ルーミア。お前さんからも感想を貰えて良かった……それと、さっきは悪かったな。」

皿を受け取り、言葉を掛ける。

相手が妖怪だからではなく、一人の人間に対してのそれと同じく真剣に、誠実に。

今度はしっかりとこちらの姿を捉えている、血のように赤い双眸を見据えながら。

「ん、わたしの方もごめん。……お代わりいい?。」

「おk。」

重箱から料理をとり分けてやると、先程の仏頂面とは打って変わってほくほく顔で皿を受け取るルーミア。

その様子が、一転して人間でいうところの年相応の少女らしく見え、微笑ましさに思わず頬が緩んでしまう。

……決して不純な意味じゃないよ？

「……要君、顔を洗って来なさい」  
「え？」

もしかして今のアホみたいな独白、筒抜けだったのか！？  
やっぱり幻想郷の女性陣はみんなエスパーだな。

と、慧音先生の一言に思わずぎくりと慄おのいている僕の元に、小さな手鏡とスティック糊ぐらいの大きさの小瓶を一本さし出しながら妹紅さんがその後を続ける。

「第三者から見たら、頭からだらだら血を流しながら微笑んでる怪しい人よ？ 少なくとも血は洗い流して、薬を塗っておくべきだと思っけど」  
「げ……うわ、確かに」

鏡を覗いてみて、一瞬の間もなく理解できた。  
たたり、と、左のこめかみの辺りから赤い筋が二つ、頬へと伸びている。

今更だけど、すげえな妖怪の力って。  
ルーミアが本気で噛み付いていたら、今頃ここにあるのは人間の頭ではなくザクロだったかも知れない。

原因は自分自身にあるので、まあ、当然の結果だけ。

何、我々の業界ではご褒美？

……残念ながら僕にそんな性癖は無い。

ひとまず席を立ち、水場はあつちだ、と先生が示してくれた方向へと足を進めた。

ほとんど労せず井戸に到着すると、照明として持って来た提灯を傍らに置き、井戸の縁に伏せて置いてある釣瓶を中へと放り込んで水を汲みあげる。

両手で井戸水をすくい取り、まずは荒く顔を洗ってみると、うす赤く色づいた水が両手からこぼれ落ちて行った。

何度かそれを繰り返した後に、顔の血が洗い落とせていることを鏡で確認すると、鏡と一緒に受け取った小瓶を手に取る。中身はどうやら傷薬らしい。

ハンカチで顔と手の水気を取り、鏡を覗き込みながら傷の場所を確認する。

とはいっても、見付かったのは髪の毛の生え際に近い位置の二つだけで、他は髪の毛のなかに隠れてしまっているため今一つ位置が分からない。

位置の分かる傷にだけ塗っておき、残りは洗髪の際にでも何とかしよう、と結論付けて、瓶から薬剤を指に取った。

生え際近くの傷は既に血が固まっているので、他のも特に心配するほどのものでも無いだろう。痛みはあるが。

必要な処置を済ませて席に戻ると、ルーミアが先ほどの白団子をばくついているのが見えた。

「言っちゃ悪いが、……文字通り花より団子だなお前さん」  
「だって桜を眺めてるだけじゃお腹は一杯にならないよ？」  
「否定はしない。ただし一人で食い尽くさないでくれよな」

それにちゃんと味付けができるように、小豆餡やらきなこやら持つて来であるから、と重箱の中を示す。

「やたー、と無邪気に喜び、更に食べるスピードを早める宵闇の妖怪。」

前言撤回やっぱりもうお前さんはしばらく食わんでいい、と、結構軽くなった重箱三段目を彼女の射程距離外に遠ざける。

「これは貴方が作ったの？」

「ええまあ、後ろから神楽さんに激を飛ばされながら……良かったらどうぞ食べちゃって下さい。それと、鏡と薬は有難うございます」

妹紅さんから借りた手鏡と小瓶を手渡し、新たに重箱から皿に料理を取り分ける。

「む、あら、美味しい」

「お口に合うようで何よりです」

と、表向きはやんわりとお礼を述べつつ、内心では『いよっしゃああっ！』とガッツポーズ。

やっぱり自分が作ったものを食べて喜んでもらえた時の達成感は格別。



……たとえそれが後方からグチグチと指導を飛ばされながら作つたものだとしても。

「さて、美味しい肴さかなを分けて貰ったからには、私の方からも『コレ』を出さなくちゃね」

そう言つて妹紅さんが取り出したのは一升瓶。

「おや、お酒とは気が効くじゃないか」

「あくまでも彼の料理へのお礼のつもりなんだけど……まあ良いわ。今は宴会だし」

妹紅さんの手が清酒の封を開け、透明な液体を盃へと注ぐ。

これでようやく本来の予定通り酒とつまみが揃つた訳だ。

料理をつまむ慧音先生、皿上の料理を食べ終えて手持ち無沙汰な様子のルーミアに盃が手渡される。

「要くん、どうぞ」

「あ、どうも……」

そして僕の手にも。

既に目の前では先生が口元に寄せた盃を傾けている。

「うん、美味しい。やっぱりお酒が進むなこれは……どうした、要君？」

「いやあ、……外じゃ酒なるものを飲んだ事ありませんので」

不思議そうな顔をする3人に、外の世界での法律　未成年うんぬんの件　について説明すると、幻想郷の住人たちは3人とも、揃って意外そうな表情を浮かべた。

「そーなのかー」

「外の世界は世知辛いわねえ」

「逆を言えば、それだけ教育がしっかりしているということだな。君みたいにしつかり法令を遵守しているところから考えて」

「まあもつとも、無視して飲んでる奴もいましたけどね……」

どことなく気の抜けた感想を述べるルーミア。

この美味しさが二十歳になるまで分からないなんて、と続ける妹紅さん。

僕の話にそれとなく教育者魂を刺激されたらしい慧音先生。

三者三様の反応が帰ってくる。

「そついう訳で、これが初めてということだな」

「ですねえ……。せいぜい、お正月のお屠蘇とそを舐める程度でした」

「あれがお酒に含まれるのか疑問だわ……」

お屠蘇。数種類の漢方を酒やみりんに浸した薬酒である。

イメージとしては養命酒やリキュールの類に近いのか？

良くは知らないが、縁起物だからといって、祖父の家でお節料理と共に出されたことがあった。

他に口に入れたことのあるアルコール類というと、母親が料理酒として使っていたワインとか。これも舐めただけ。

どうでもいいけど、小学校の理科の実験で使ったアルコールランプの中身を舐めた奴がいたっけか。（良い子は真似しない）あれはメチルアルコール。酔えるけど一歩間違えば失明したり永遠に目覚めなかったり。

戦後のヤミ市では本物の酒の代わりに、通称『ばくだん』として売られていた、と祖父から聞いた事がある。

飲用はエチルアルコール。正しく酔えるのはこっち。

炭素一個と水素二個の差で生死を左右する。有機化学の面白いところだ。

「というか、幻想郷ではお酒って何歳くらいから？」

「ここでは君ぐらいの年齢で既に一人前として見られるからなあ。お酒についても」

……なるほど。

「まあ、とりあえず飲んでみると良い。人生、何事も経験だ」

「……それじゃ、頂きます」

黒い漆塗りの上等な盃。と、そこに八分目ほどに注がれた酒。

目を閉じ、ごくり、と唾を飲み込みつつそれを口元へと寄せる。

まずは一口。

小さじ一杯分ほどを口に含んだ。

途端に舌の上に広がる、ひりりと刺すような感触。世に言う『辛み』か。

辛みは辛みでも、唐辛子や山椒のようなタイプの辛みではない。

口の中であぐり、と舌で掻き回すと、仄かに甘い香りが鼻腔をくすぐり。

こくり、と飲み込めば熱をもった塊がするりと食道を流れ落ちる。

目を開けてみると、ゆっくりと長い息を吐きながら口から盃を離すまでの一連の様子を、三人にじっと見つめられていた。

「どうかしら？」

「……んー、辛いです」

一口飲んだばかりで、いきなりどうと訊かれても答えようがないのだが、率直に感想を伝える。

「確かにこれ、どちらかというところ辛口だから、初めての貴方には合わなかったかしら？」

「どうなんでしょう？」

一口飲んだだけでは何とも言えないので、再び盃に口をつける。今度は盃に残った酒を数回に分けてゆっくりと飲み干してゆく。

アルコールの香気がすつと鼻に抜け、あっさりとはしつとも確かな後味が口に残った。

なるほど、酒とはこういうものか。

「もう一杯飲む？」

「……頂きます」

ちよつと考えてから盃を差し出す。  
一かかえある酒瓶を器用に傾ける妹紅さん。  
ゆっくりと注がれる酒。

今度は盃の半分ほどにしてもらい、先回と変わらず時間を掛けて飲み干してゆく。

確かに、慣れればこれは美味しいかもしれない。

ふつつ、と息をつき、盃を降ろす。  
酒瓶を軽くゆすって見せる妹紅さん。

「いえ、今日はこの辺で止めときます」

と、次の一杯を辞退しようとした瞬間である。  
その言葉を口から発する事は叶わなかった。

息と共に生命力でも一緒に吐き出してしまったかのように、くらり、と体が右前方に倒れていく。  
敷物となつてゐるむしろの編み目一つ一つがクローズアップされるのを、どこか他人ごとのようにぼけーっと眺めていた。

何やら慌てた様子の先生と妹紅さんの声がだんだん遠くなつてゆく。  
まぶたに掛かる堪え難いほどの圧力に抵抗することすら叶わず。

僕の意識は驚くほど呆気なく狩り取られていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3312s/>

---

東方双漂譚

2011年11月27日04時48分発行